

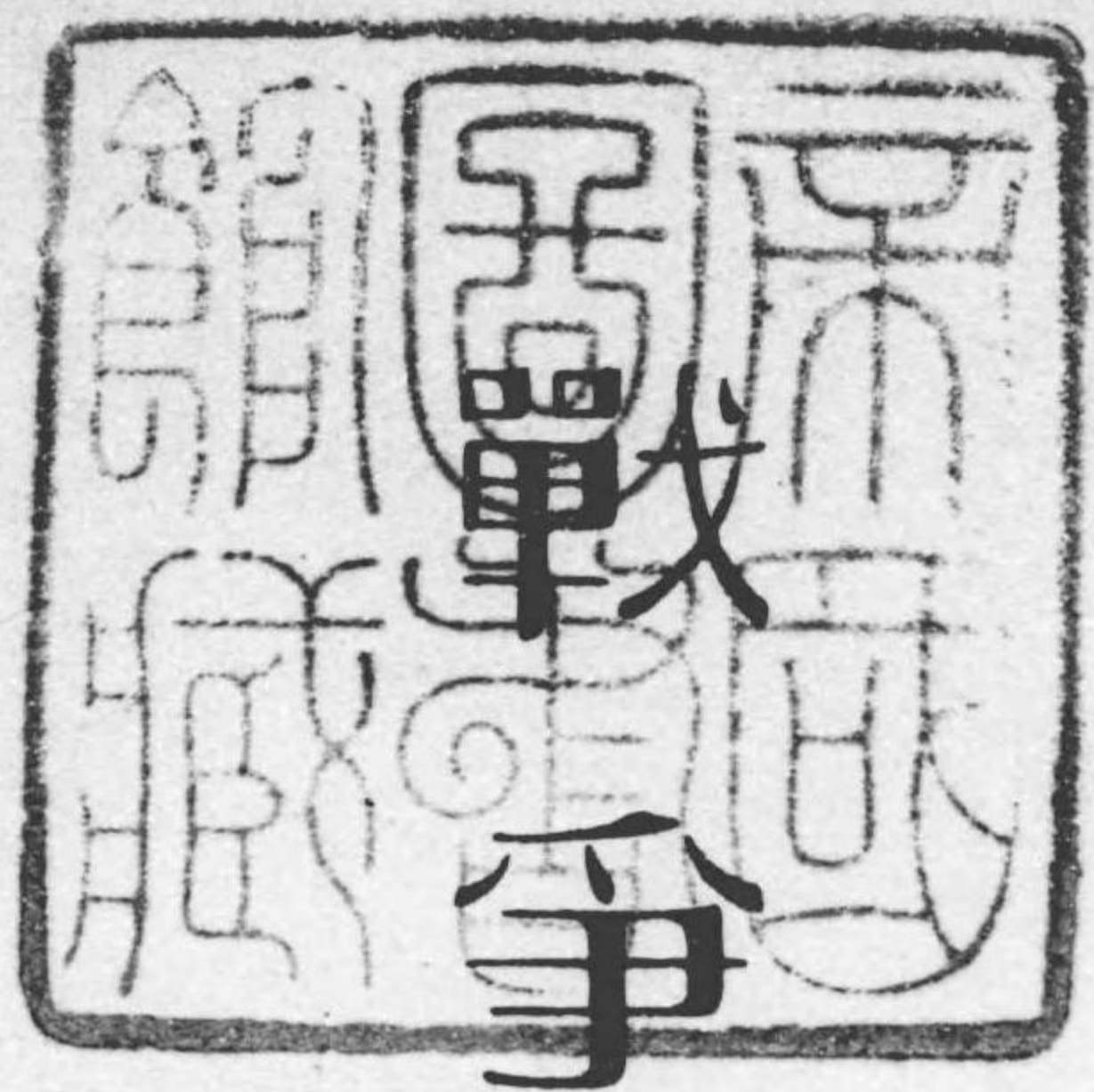
543
51

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



書物は
大切記



と
平
和

上
卷

大正

14.12.2

内交

例言

△「戦争と平和」のやうな既に近代文學中のクラシックになつて居る大作に、別段序文を添へるにも及ぶまいと思つたので、その代りに、著者トルストイの略傳を載せたのだが、未だ少々この作品に對する解題めくもを書いた方が宜いかも知れぬと思はれるので、左に少し左様いふ事などを書いて置く。

△「戦争と平和」は、トルストイ家の歴史のやうなものである。即ち、ロストオフ家はトルストイ家、ボルコオンスキイ家はヴォルコオンスキイ家であるのだ。けれども、公爵アンドレーエーは、架空の人であり、ピエールも又左様であらう。従つて、この二人の性格、思想、感情を一緒にすると、著者トルストイその人になる譯なのであらう。

△戦争の部分に於ては、ナポレオン、アレクサンドル一世、皇帝フランツを始として兩軍の名將等を巧に描寫して居る。が、比較的少勇士のなかには、架空の人物もあり、又、實在の人物をモデルにして書いたものもあるらしいのだ。現に、上巻から出て来る、レエルモントフ式の性格の將校フォードル・ドロオホフは、トルストイの従兄テオドル・トルストイのことを書いたものだと言はれて居る。

△「戦争と平和」は各齣に山があつて、讀者の感興を引き付けて行く所に、トルストイの小説家としての豊かな天分が十分に表はれて居る。此の如き長篇中の長篇を、人に勞苦無く讀ませやうといふには、左様いふ用意の必要なことは、論を俟たぬが、これだけの大問題を扱つた作品が、よくも斯う面白く書けたものだ、嘆服せざるを得ない。

△この作は、この上巻位なものが、このあと二巻で完結する、即ち、總計二千頁餘にのほる長篇であつて、

トルストイが最も力を籠めたのは、半ば以後であるやうに見える。で、この上巻だけでも非常に面白いのはあるが、これは未だ、あとの二巻に對する序詞のやうなものであつて、中巻下巻と書き進むに従つて、著者の筆は、次第に入神の域に進んで行つて居る。上巻を讀了するのに、多少の勞苦を感ぜられる讀者でも、忍耐して、中巻以後を讀み進まれ、ば、感興も次第に加はることも勿論だし、又、それが爲めに得られる所の多いのは、確である。

△「戦争と平和」の如き小説は、唯だ讀者を樂ませ、面白がらせる爲めに書かれるのでは無い。讀者に考へさせ、讀者に何事かを教へる爲めに書かれるのだ。斯ういふ作品に對する時は、讀者は先づ左様いふ豫想を以て、讀み始めなければならぬのだ。

△譯者は、この大作を譯するに當つて、所謂氣の利きたる語法を用ゆることを避けた。殊に地の文に於て、左様いふ注意を爲たのだ。重過ぎて、不器用に見えやうとも、輕きに過ぎてはいけまいといふ用心に出たのである。従つて、地の文に於ては「見たいな」『てな』といふやうに言葉は一切用ひなかつた。

△それから、會話の中に於ても、已を得ざる場合を除いて、敬語を成るべく少くするに力めた。「お」の字や「御」の字が、餘り多いと、力が抜けるやうに感じたのと、外國語の語法をも考へ合せたのとで、左様いふことになつたのである。

△手紙は勿論、勅諭、宣言、布告の如きものまで、成るべく、口語、若くは、口語に近いものに譯した。これは、譯者が、我國の有らゆる文體は、成るべく早く口語體に改めらるべきものと信するが爲めなのだ。

△兵語、軍職名等に就ては、軍隊の組織が今日とは大に相違して居る所があると思ふので、適宜の譯語を當てた。

△佛蘭西語、獨逸語、伊太利語等の他國語も譯して了つて、原語を掲げない。誰にでも讀んで貰ひ度い譯書としてはその方が宜いと思つた爲めである。

△本書に出て來る年月日は皆露西亞曆だ。即ち、現今の歐洲曆に比すると、十二日後れてゐるのだ。

△露里とあるのは、露西亞の一里であつて、〇・六六哩、即ち、我國の約十町だ。

△「戦争と平和」の翻譯にかゝつたのは、一昨年の八月からである。この第一巻を譯了したのは昨年の二月頃かと思ふ。その後、翻譯を今日まで繼續して、第四巻の三分の一餘の所まで進んで居る。遅くも、この十月までには、全部を譯了し得られるだらうと思ふ。

△譯者は、この二年間、専心にこの大作の翻譯にかゝつて居たのだ。十分な結果を挙げ得無いのは、微力の爲めであつて、決して、怠慢の爲めでは無い。譯者は、この空前の大作を、本邦の讀書界に紹介し得るのを光榮とし、且身の幸運と思ふのであるから、能き得る限りの力は盡くした積りである。

△然しながら、譯者は甚しく貧乏なるが爲めに、この雄篇の翻譯に今少しの歲月をかけ得無いのは、遺憾である。

△この翻譯は校正に至るまで一切譯者一人の爲事だ、他人の助を借りるだけの餘裕が無かつたのだ。従つて、本書に關する責は全く譯者一人にて負ふべきものである。

△一昨年の秋であつたと記憶して居るのだが、或る席で故平出修君から、「戦争と平和」の翻譯をやつて居るか尋ねられたので、僕が、さうだと答へると、平出君は、容を改めて「誠に有り難うございます」と云つた。僕は、自分に對して述べられた禮とは一寸と氣が付き兼ねて、挨拶に途惑つた位であつた。平出君は、熱心な文學愛好者であつた。彼様いふ職業の人としては知識も博かつた。全く惜しい人であつた。君にして、

若し生きて居られるのであつたら、僕はこの第一巻が世に出ると共に、曩に君から與へられたその奨励の言葉に對して、厚く禮を云はうものをも、故人の面影が今更に懐かしく感ぜられる。記して以て、故人の靈に向ひ、茲に謝意を表して置く。

千九百十四年七月五日

馬場孤蝶

戦争と平和 上卷 目次

レオ・トルストイ略傳……………一—六

第一章……………一

第二章……………一八

第三章……………三四

第四章……………五三

第五章……………六三

レオ・トルストイ略傳

(一)

レオ・ニコラアヴィイチ・トルストイは、千八百二十八年八月二十八日(露西亞曆)に、中央露西亞のツウラ市の南方十五露里程の所にあるヤアスナヤ・ボリヤアナ村のヴォルコオンスキイ家代々の領主館で生れた。父は、伯爵エリア・トルストイの息ニコラアス、母は公爵ニコラアス・ヴォルコオンスキイの女公爵嬢マリイであつた。即ち、父方、母方、共に露西亞の名門である。

トルストイ家の始祖は、不詳であつて、或る歴史家等の説では、その始祖は獨逸人だといふのであるし、又他の説に據れば、リシアニア人だともいふし、尙ほ他の説に依れば、韃靼の汗(王)から出たともいふのである。トルストイの容貌から見ると、大分後者に根據がありさうにも思はれる。それは左に右、最初の伯爵は、ピョートル・トルストイであつた。この人は彼の彼得大帝の腹心であつて、皇太子アレキジスの暗殺にも與かり、次いで、國事探偵局長の職に就いて、彼得及び女皇カザリン一世の信任甚だ厚かつた。彼はその女帝の戴冠式の日、伯爵を授けられたのだ。けれども、アレキジスの息の彼得二世が位に登ると共に、ピョートル・トルストイは、爵位を削がれて、八十二歳の老軀を、北海の濱のソロヴェツキ修道院に流されて、其所で間もなく死んだ。が、爵位は、彼得大帝の女、女皇エリザベスの世になつて、トルストイ家に返された。

レオ・トルストイの祖父に當る伯爵エリアは、親切な、寛大な、快活な人であつたが、少々錢使が荒かつた。何時も、領地では、宴會、演劇、舞踏會、骨牌の勝負、饗應等を催して居たのが、何時の間にか、そ

の妻（公爵嬢ベラギイ・ゴルチャアコフ）の巨額の財産を悉皆抵當に入れて了まつて、艱然、カザン縣の知事の職を得て、生計を立てた。

トルストイの母方の祖先、ヴォルコオンスキイ家の諸公は、ルウリク王から出たのだ。十四世紀の始に、ルウリク王から十三代目のプリンス・ジョオンが、今のカルウガ及びツウラ縣に在る、ヴォルコオンカ川に沿つたヴォルコオンスキイの領地を受けた、で、その人から、ヴォルコオンスキイ家が始まつたのだ。レオ・トルストイの母方の祖父の公爵ニコラアス・ヴォルコオンスキイは、種々な官職に歴任した後で、引退して、公爵嬢カザリイン・ツルベエツコイを娶つて、父から譲られたヤアスナヤ・ボリヤアナに住つた。ところが、公爵夫人カザリインは天く死んで、孤女のマリイを遺した。公爵ニコラアスは、この愛嬢に佛蘭西女を附添はして、依然ヤアスナヤ・ボリヤアナで暮して、千八百二十一年に死んだ。

レオ・トルストイの父ニコラアス・トルストイは十六歳で軍隊に入り、千八百十三年及び同四年の戦役に與かつた。獨逸の何處かで急使に差遣された途中で、佛蘭西軍の爲めに捕虜にされて、千八百十五年に露西亞軍が巴里に入るまでは、釋放され無かつた。戦争が終るといふと、軍職から退いたが、それから間も無く彼の父——即ち、レオ・トルストイの祖父——が死んで、ニコラアスは、破産しさうな状態に陥つて了まつた。大領地の持主であつた公爵嬢マリイ・ヴォルコオンスキイが、ニコラアス・トルストイと結婚したのは、前者の父公爵ニコラアス・ヴォルコオンスキイが死んでから後直きであつた。

公爵夫人マリイは、四男一女を擧げたが、レオ・トルストイが生れてから一年半後に死んだ。それから、レオ・トルストイの父の方も、レオが九歳の時に死んで、小兒たち——男の子四人に女の子一人——は伯母の世話に委ねられた。

(二)

その伯母——男爵夫人オステン・サアケン——が死ぬるといふと、小兒たちは、今一人の伯母ベラギイ・ユウシコフの世話になることになつて、皆カザン市へ移つた。それは、千八百四十一年のことであつた。レオはその時は最早満十三歳であつた。

兄三人が入つて居たカザン大學へ彼も入つたのだが、性來熱中し易い質であり、且獨立を愛する心の強かつた彼は、大學の課程を正直眞法にやつて行くといふ學生にはなれ無かつた。自分に興味のある學課にばかり熱中して他を顧み無いといふやうなことが多かつた。のみならず、保護者ユウシコフはカザンの交際場裡の勢力家であつたので、自然レオもさういふ方の快樂に耽ることも多かつた。舞踏會、劇場、訪問等で冬の時間が大抵費されて、さういふ事がなかく、研學の妨害になつたのであつた。

そのうちに、レオは大學の學生生活に飽き果て、兄ニコラアスが大學の課程を修了して了まふと共に、それを好機會にして、自分も學生生活を止めて、兄と一緒にヤアスナヤ・ボリヤアナへ歸つた。

隸農の悲惨なる状態は、彼の心を動かし、彼は未だそれに就て、何等の救濟法を執らうとは爲無かつた。間も無く、彼は彼得堡へ出た。其所での生活は、彼の生涯中の一番烈しい、一番情熱的なものであつた。或る時は、國外に出やうと企て、或る時は、大學の試験を受ける準備を爲、又或る時は、軍隊に入らうと爲た。彼は骨牌の勝負を爲、負債を造へ、ジブシイの歌女等に心を寄せ、そして、一體に、放逸な生活を爲て居た。けれども、さういふ事の間にも、自分の道義上の墮落に對する自覺が時々起つて、彼の心を陰鬱にさせると同時に、他日の覺醒の素地を造つたのだ。

その時代の一部は、莫斯科で費されたのだが、其所での生活も依然彼得堡での生活より少しも善くは無かつた。

が、斯ういふ風に、この世の歡樂——賭事、肉慾の満足、狩獵など——に耽つて居る間にも、不意に、禁慾主義に近いやうな宗教的謙虚の心持が起つて来るのであつた。そして斯ういふ暗澹たる背景の前に、藝術的創作の念がだん／＼深くなつて行きつゝあつたのだ。

(三)

レオの長兄ニコラスは、大學を終るといふと、軍隊に入つて、コウカサス駐在の砲兵に加はつて居たのだが、その兄が、千八百五十二年の四月に、賜暇を得て、都へ歸つて来て、レオの状態を見て、その危険を覺り、自分と一緒にコウカサスへ行かぬかと勧めた。レオは、物質上并に精神上都是に止まり得無い状態であつたので、直ちにその勸に應じた。そして、その同じ春、兄に伴れられて、コウカサスへ行つた。

ニコラスの屬して居た砲兵は、スタライ・ユウルツに移された、其所は非常に景色の好い所であつたが、其所で、兄弟は、サアカシヤ人の侵入隊との戦闘に参加したのであつた。が、冬に爲ると、レオはティフリスへ出て、士官になる試験を受け、それに及第して、再スタライ・ユウルツへ歸つて砲兵二十旅團の第四中隊の準將校に爲つた。

スタライ・ユウルツで、壯大な天景や、自然的な人民の生活などに接すると共に、レオの創作熱はだん／＼強くなり、千八百五十二年の七月に至つて、小説『幼時』を脱稿した、これは、ティフリスに行つた時に書き始めたのだ。彼は、それを、詩人ネクラアソフが主幹となつて居た『ソブレンニク（現代）』といふ月刊

雜誌——彼得堡にて發行——へ送つて、それが千八百五十二年の九月の誌上に現はれた。これと共に、トルストイの天分は、『ソブレンニク』に關係あるツルゲーネフ等當時の大文人たちから、矚目されるに至つたのだ。

レオは、コウカサスに三年居たのだが、そのうちに、單調な生活に飽きて、他に新しい周圍を求めやうと爲だした。千八百五十三年の末頃に、クリミヤ戦争が起つたので、彼は親戚に依頼して、ダニウプ河畔に出征して居た露西亞軍に加はらせて貰ひ、ダニウプ軍の總司令官の公爵ゴルチャアコフの幕僚と爲つた。

レオ・トルストイは、ダニウプ軍に加はる前に、試験を受けて、將校に昇任されて居た。彼はシリスツリアの襲撃にも参加し、軍の退却にも加はつた。が、その退却の單調なのに飽きて、セヴァストオ波尔へ移して貰つて、其所へ、千八百五十四年十一月に達して、砲兵十四旅團の第三中隊に加へられた。

トルストイは、其所に居るうち、大攻撃とか、大逆襲とかいふやうな大きい戦闘には加はら無かつたが、最も危険な地點であつた第四砲臺の任務に度々就て、少しも死を恐れ無かつた。

トルストイが、人間の運命、人生の目的、永遠の眞理といふやうな問題を考へ始めたのは重にこの時からであり、又、後年彼が全力を擧げて唱導した人道的基督教に對する思想を得たのもこの時であつた。

千八百五十五年の八月にセヴァストオ波尔は陥落したのだが、トルストイは、それより以前に、最後の戦の報告使として、彼得堡へ遣られたのであつた。

セヴァストオ波尔での彼の経験は、『セヴァストオ波尔』といふ小説に書かれて、それが、千八百五十四年から同五年に互つて現はれた。戦争を描寫した文書としては全く破天荒のものである。戰場にある人間の眞實の感情、感覺を『セヴァストオ波尔』程明瞭に忠實に描いた著作は、それまで、何の國の文學にも無かつた。

のである。斯ういふ方から見れば、コウカサスでの経験を基礎にして書いた「侵入」伐木の二篇も、注目すべきものであるのだ。

(四)

トルストイは、彼得堡へ歸ると間もなく軍職を辭した、そして、いよく文人の生活を始めた。千八百五十七年の正月に、トルストイは歐羅巴に向つた、ワルソオまで驛馬車で行き、其所から、鐵路に依つて、巴里へ行つた。其所では、度々ツルゲーネフと出會つたのであつた。

五月の始め、彼は、巴里を去つて、瑞西に行つて、ゼネヴァ湖畔のクラレンスに滞留した、それから、直きに、ルセルヌに行つた、其所では、一等旅館のシウワイツェルホフに宿まつて、衆客の顧みも爲無かつた。食の樂師を大食堂へ喚び込んで、衆客を閉口させたことなどもあつた。この事件は彼の小説「ルセルヌ」に書いてある。

トルストイはルセルヌから、獨逸を経て、露西亞に歸り、八月にヤアスナヤ・ボリヤアナに達した。で、その領地で小學校を開かうと爲たのだが、避寒の爲めに、一家盡く莫斯科へ移つた。

トルストイが、その友フエツトと共に、ツヴェル縣へ熊獵に行つて、熊に噛み殺される危険を間一髪の所で避けたのは、その年の十二月のことである。

ヤアスナヤ・ボリヤアナでは、彼は、熱心に機械體操を爲ると共に、自ら犁鋤を執つて、農業をやつて居た。千八百五十九年二月に、レオ・トルストイは莫斯科文學會の會員に推選された。

千八百六十年の始め、トルストイの長兄ニコラアスは肺結核に罹つて、夏を獨逸のソデンで送つて居たが

だん／＼重體になるといふ報を得て、レオ・トルストイは、兄のセルギウスに代る爲めに、當時は最早結婚して居た妹のマリイ及びその二人の娘を伴れて、彼得堡から汽船でステッティンに行き、其所から伯林を経てソデンへと向つた。妹マリイは、レオに先だつて、ソデンへ直行したが、レオは、伯林に止まつて、知名の教授等の講義を聞き、それから、自分がその人の民俗生活の寫生に感服して居た有名な小説家アウエルバッハを訪問し、尙又諸所で、獨逸の小學校の教授振を見た。彼は、獨逸の強制的教授法には甚く不感服であつた。

トルストイが、ソデンに達した時には、ニコラアスは全く重體に陥つて居た。同じ年の九月二十日に、ニコラアスは死んで了まつた。この兄の死は、レオに強い感動を與へた。レオの死に對する思想はこれが爲めますます／＼深くなつた。

その強い悲痛から恢復するや否や、トルストイは、尙旅行を續けて、獨逸、佛蘭西、英吉利の小學制度を研究した。倫敦では、露西亞の革命家のアレクサンドル・ヘルツェンと知り合ひになつて、一ヶ月程の間非常に親しく交際した。

千八百六十一年二月十九日、即ち、隸農解放の日が來た。トルストイは、急いで歸國したが、直ぐ、自分の縣の農夫と貴族との間の「仲介者」を命ぜられた。

貴族は大抵隸農の解放には不賛成であつたので、諸種の權利の取り極めに於ては、「仲介者」としてのトルストイは、常に農夫の身方であつた。で、貴族側からの非難が烈しかつたので、一年ならずして、辭表を出した。

その後のトルストイは、全力を擧げて、小學校教育に従事した。彼が、初めて初等教育に手を着けたのは、

カザンから歸つた千八百四十九年であつたが、その時に開いた小さい學校は、彼が、コウカサスへ去ると共に閉られて了つた。彼は、それを再千八百五十八年から同九年に到る冬間開いて居た、が、それも成功し無かつた。

彼は、「ヤアスナヤ・ポリヤアナ」といふ教育雜誌を發刊し、「ヤアスナヤ・ポリヤアナより」といふ讀本の叢書を出版し、そして、自分の主義を實驗する爲めの小學校を開いた。トルストイの目的は、豫備教育として、無く、全く獨立した初等教育を兒童に施さうといふのと、その教授法は決して強制的にならぬやうに爲やうといふのであつた。

此度のは、成功する見込みが確になつて來たが、不幸にして、トルストイは病氣に爲つた。で、醫師の勸に依つて、ステツプ(廣原)へ行つて、馬の乳を飲むクウミス療法を試みることに爲つて、五月にヤアスナヤ・ポリヤアナを立つてステツプに向つた。

その留守に、無智の探偵の報告に依つて、政府は、トルストイ家の家宅搜索を行つた。革命の企ての書類でも得られるかと思つたのであつた。けれども、元より其様な書類などの有りやうは無かつた。

それを始として、政府の干渉がだん／＼煩くなつて來たので、トルストイは遂に學校を閉ぢて了まつた。

それから、トルストイは、ドクトル・ベエルの娘と千八百六十二年九月二十三日に結婚した。その時、彼は満三十四歳、妻は満十八歳であつた。

(五)

それから、間も無く、トルストイは、小説『哥薩克兵』の上半を書き終はつた。これは、コウカサスに於

て彼が實見した天景、人間、及び事件を巧みに且深刻に取り扱かつた作品である。が、不幸にして後半は遂に書かれずに終はつたのである。その次に書かれたのが、「ポリクウシカ」といふ短篇であつた。

トルストイの創作力は、ますます偉大になり始めた。彼は、千八百二十五年十二月十四日に彼得堡で革命を企てた所謂「十二月黨」の事績を書かうと思つた。で、當時の歴史の研究を始めたのであつたが、その結果、その一時代前の事件、即ち、那翁戦争に興味を吸収するに至つた。彼は、その時代が「十二月黨」の時代よりも一層有意義であることを發見した。彼は、彼の天才の全力を傾けて、その時代をば、藝術品に纏めやうと、決心した。即ち、彼は「戦争と平和」の大作に取り掛かつたのだ。トルストイの書簡及び日記に依るも、彼が、この空前の作に就て、非常な力を籠めたと同時に、十分な自信を持つて居たことは明である。

「戦争と平和」の元の題は「千八百十五年」といふのであつた。彼は、當時の史實を調べる爲めに、歴史及び軍事の諸記録を涉獵し、當時の生存者等に面會し、ポロディノオの古戦場を踏査する等、非常な努力を爲た。

この大作は、完結までに、七年を費した。即ち、千八百六十三年から同九年までかゝつたのだ。

「戦争と平和」の目的は、トルストイ自身も云つて居る如く、歴史上の事件の發展に對しては、所謂大人物なるもの、働が、何程も影響を及ぼすものでは無くして、民衆の意志、願望が一團となつて働が爲めに、歴史上の大事事件は生じ來るものだといふ眞理を明確に闡明するにあつたのだ。

「戦争と平和」は、我等をして從來の英雄崇拜といふやうなロオマンティックな夢から醒めて、個人の力、個人の尊嚴を自覺させる作品である。

時代を忠實に描寫するといふよりは、その時代に對するトルストイ自身の判断及び解釋を提出するといふのが、トルストイの目的であるのであらう。

彼は、那翁戦争なる大事件の起つた時代を捉へ來つて、其所に、永遠なる、普遍なる人間性その者を見やうと努めた、彼は其所に千古に亙つて變らざる人間的眞理を發見しやうと試みたのであつた。

故に「戦争と平和」の中には、その時代の史實、傳説、人物の正確なる叙述及び描寫があると同時に、トルストイ自身の經驗は元より、トルストイ自身の性及びトルストイ自身の周圍が、諸所に織り込まれて居る。即ち、公爵アンドレーエーの性格と、ビエール・ベズウホフの感想及び行爲のうちには、トルストイ自身のそれ等のものと共通なものが甚だ多いのだ。

「戦争と平和」をば、單に藝術的見地のみより見るとしても、これだけ廣大なる事件を、斯の如き首尾一貫せる形に纏めた手腕は、何うしても、大天才の手腕と云は無ければならぬ。「戦争と平和」は、肉感的描寫の模範である。十九世紀の新藝術の殆ど完全なる標本である。

「戦争と平和」は、著者トルストイの人道的意見を十分に提唱したる作品として、並に、十九世紀に於ける新藝術の發展がその絶頂に達したる一濬標として、全く不朽の價值のある紀念碑的作品である。

(六)

「戦争と平和」を書いて居るうちも、他の方面の思索、活動をトルストイは決して止めては居無かつた。現に、彼が土地公有の方策を考究したのも、この時代のことなのである。

で、「戦争と平和」を書き終はるといふと、彼は再、教育事業を始め、教育に關する論文を公けにすると共に、初等讀本の著述を爲し、以て、露西亞の教育界に多大の刺戟を與へた。

そのうちに、再、創作熱が起つて、千八百七十二年には、彼得大帝の事績を小説に書かうと企だてたのだが、研究するに随つて、彼得に對する興味が無くなつて了まつて、千八百七十三年になつてこの題目は全く捨て、了まつた。

が、次ぎには、大作「アンナ・カレニナ」が書かれた。

「アンナ・カレニナ」の執筆中、即ち、千八百七十三年に、トルストイ一家は、サマラ縣に行つて居て、其所の飢饉に苦しんで居る人民の救済に力めた。

その後は、トルストイの危機、即ち、人生の意味に就ての懷疑時代であつて、勞働に依つて、他の爲めに盡くす者は、人生の意味を知り、人生を愛し、死を恐るゝこと無しといふ解決を得るまでの煩悶時期が續いたのだ。

トルストイの宗教上の思想に一大進化が起つて、露西亞の正教會に對する不満が云ひ表はし始められたのは、この時代からである。

千八百八十一年に、トルストイ一家は、莫斯科に住まふことに爲つたが、彼は、都會に於ける貧富の差に、今更ながら、甚だ心を動かされた。千八百十二年の冬に、莫斯科の市勢調査があつた。トルストイは、それに助力して、莫斯科の諸所にある貧民窟に出入した。その結果として、彼は、所謂慈善なるものゝ無意義なことを覺るに至つた。

彼は、自身も、貧民の爲るやうな勞働に服し、粗食に甘んずることを主義とするに至つた。莫斯科からヤアスナヤ・ボリヤアナへ歸る用のある時などは、全路程を徒歩するのが常であつた。

トルストイが、知識普及の爲めに、ボスレエドニイク(仲介者)といふ出版協會を起して、通俗叢書の出版を爲したのも、この時代のことである。

その間、トルストイは、時々ヤアスナヤ・ポリヤアナに歸つて、自ら農業の勞働に就て居たが、千八百六十六年には、草を刈りに出て、荷馬車に乗らうとする際に、膝に骨に達する傷を受け、全一と月床に就て居た後で、大手術を受けたことなどもあつた。

彼は、その病床に於て、『闇黒の力』の想を構まへ、その年の秋になつてその劇を書いた。この劇は、數か所の削除のみで、検閲を通過し、莫斯科の帝國劇場で上場されることになつたのだが、背景、衣装其他一切の準備が出来た後になつて、政府は俄然何處の劇場でもそれを演ずることを禁止した。で、この劇を演じ得られるやうになつたのは、それより餘程後年のことなのだ。

(七)

それより以後のトルストイは、人生批評の論文を公にし、社會の諸制度に關する最も大膽なる、忌憚無き所見を發表して、所謂人道の大戦士たる眞面目を發揮するやうになつたのだ。

千八百九十一年には、露西亞の約半分が大飢饉に苦しめられた。この飢饉の救済には、トルストイは一家を擧げて全力を盡くしたが、その方法は極めて有効なものであつた。當時の大飢饉はトルストイ一人の力で全部救はれたかの觀があつた。

千八百九十五年七月十日、ツランス・コウカサスの二三が所で、非戦主義の宗派のツウホボオルが、自分等の武器を積み上げて、讚美歌を歌ひながら、それを焼き棄てた。元來この宗派は、兵役に就のを拒むので、露

西亞政府は、その宗派の者に對し種々なる迫害を加へ來つたのであつた。トルストイは、その宗派の者の爲めに、非常に盡力し、遂に彼等が外國へ移住し得る許可を、政府から得た。所で、それ等のツウホボオルが、加奈陀へ移住する爲めの基金を造る爲めに、トルストイは、小説『復活』を書いて、それより得る報酬を全部ツウホボオルの救済費に提供した。

トルストイの宗教に關する意見并に信仰が、露西亞の正教會の信條と反對であることが、餘りに明白になつて來たので、千九百〇一年三月五日に至つて、正教本部は、トルストイを破門する布告を公に爲した。

トルストイは、それに對して、自分の基督教に對する意見を發表し、自分は、眞理に反した信條を捨て得ざる正教會の一信徒たるを欲せざるは勿論、元來基督教徒といふ言葉が、眞理を曖昧ならしむる嫌無きにあらざれば、自ら基督教徒と稱するさへ躊躇せざるを得無い、而して、破門の如きは自分に取つては、何でも無いことである、何となれば、何人も眞理といふものから自分——即ち、トルストイ——を破門することは能き無いのだから、と宣言した。

この破門一條は、世上の同情及び尊敬をますますトルストイの一身に集めたのであつた。

この時分に、トルストイは、可なり重病に罹つた。で、南方で避寒することに爲つて、千九百〇一年の九月にクリミアへ行つて、ガスブラにある伯爵夫人バアニンの別荘に逗留した。千九百〇二年の秋になつて、全く健康に復して、ヤアスナヤ・ポリヤアナへ歸つた。

日露戦役が始まると共に、トルストイは『汝等自ら考へよ』といふ、非戦論を公にした。千九百〇五年一月二十一日の所謂僧ガボンの示威運動以後の露西亞全國の争闘、動搖の時代にも、トルストイは、政治の圏外に立つて、保守、革命兩派に對して、争闘の無益なことを、靜に論ずる態度を執つたのであつた。

千九百〇八年には、トルストイは満八十歳に達したので、湯仰者間に、祝賀會を催さうといふ企があつたのであるが、僧侶及び政府の干渉の爲めに、十分に實行するに至らずに了まつた。けれども、千九百〇九年の春に至つて、トルストイ展覽會が彼得堡で催され、其所では、トルストイの原稿、書簡、肖像、胸像、挿畫、端書、ボンチ繪等が陳列された。この展覽會の際に、その後設立すべきトルストイ紀念館には、その展覽會の陳列品の大部を收容しやうといふ決議が、委員間に成り立つた。

(八)

トルストイが、財産を捨て、一賤民の生活に入らうと企てたのは、随分古くからのことであつたが、諸種の事情に妨げられて、それを實行するに至らなかつたのだ。所が、老年になるに従つて、自分の周囲と自分との不調和がだん／＼烈しく感ぜられた。彼は、いよいよ決心して、千九百十年十一月十日の朝、自分の決心の理由を説明した手紙を妻に宛て、遺して置いて、ドクトル・マコオヴィツキイ及びその娘のソオニヤを伴つて家を出て、汽車に乗つて、オブティン修道院へ行つて、其所で一晩を明し、それから、尙十二哩ばかり先のシャマルディン尼院へ行つた。其所には、トルストイの妹のマリーが尼になつて居るので、トルストイは、それに逢つた。暫時その村に滞在しやうと思つて、家を探がした位であつたのだが、家出以來トルストイの健康が勝れなかつたので、尙前方へと旅行を續けなければならなかつた。が、途中でだん／＼身體が弱つて來たので、ウラル・リヤザン線の停車場アスタボヴァで止まつた。トルストイの考は、唯漠然と南方へと進まうといふのであつたのだ、その停車場の驛長イヴァン・オソリンは、親切にも、トルストイの爲めに自分の宅の敷室を明け渡した。

やがて、肺炎が起つて、人としての務を最も壯大に盡くし終つたトルストイが、この世を靜に辭する日が近づきだした。

彼の臨終は實に靜であつた。何の悶無く、何の苦しみ無く、眠むるが如く逝いた——千九百十年十一月十九日(露西亞曆は七日)のことである。

十一月二十二日に、遺骸は、サセエカ停車場へ運れて、其所で、親族、知人、其他同情者、代表者等の群集に迎へられた。

葬式は極めて質素なものであつたが、如何にも嚴肅に執行された。質素なる棺は農夫に擔がれ、數千の會葬者は『デ・プロンデイス』の讚美歌を歌ひながら、その後を續き、その行列の先頭には、二人の農夫が、粗麻布の急造の旗を二本の樺木の棒に附けたのを捧げて進んだ。旗には左の銘があつた。

「君が、善根の記憶は、吾等の間に、永久に消ゆること無かるべし。

ヤアスナヤ・ポリヤアナの孤兒となれる農民」

で、棺は、ヤアスナヤ・ポリヤアナのトルストイ家へ持つて來られて、階下の一室に置かれ、其所で、蓋が除かれて、數千の人々が、この偉人の遺骸に最後の別離を告げた。

輓歌の聲に送られて、棺はトルストイの子息たちに擔がれて、庭園を過ぎ、森を過ぎて、その縁の小さい谷へ達した。其所が埋棺地であつた。丁度その地點が、兄ニコラスが、少年時に、四海同胞の幸福なる世を來す秘密の方法を書いた棒を埋めて置いたと、レオ等に屢く話した場所だといふのである。

棺が墓へ下されるといふと、数千の人々は、跪ついで、頭を垂けて、黙禱した。その厳肅な沈静の裡で、下された棺の上へ投げかけられる凍つた土の音のみが聞えた。

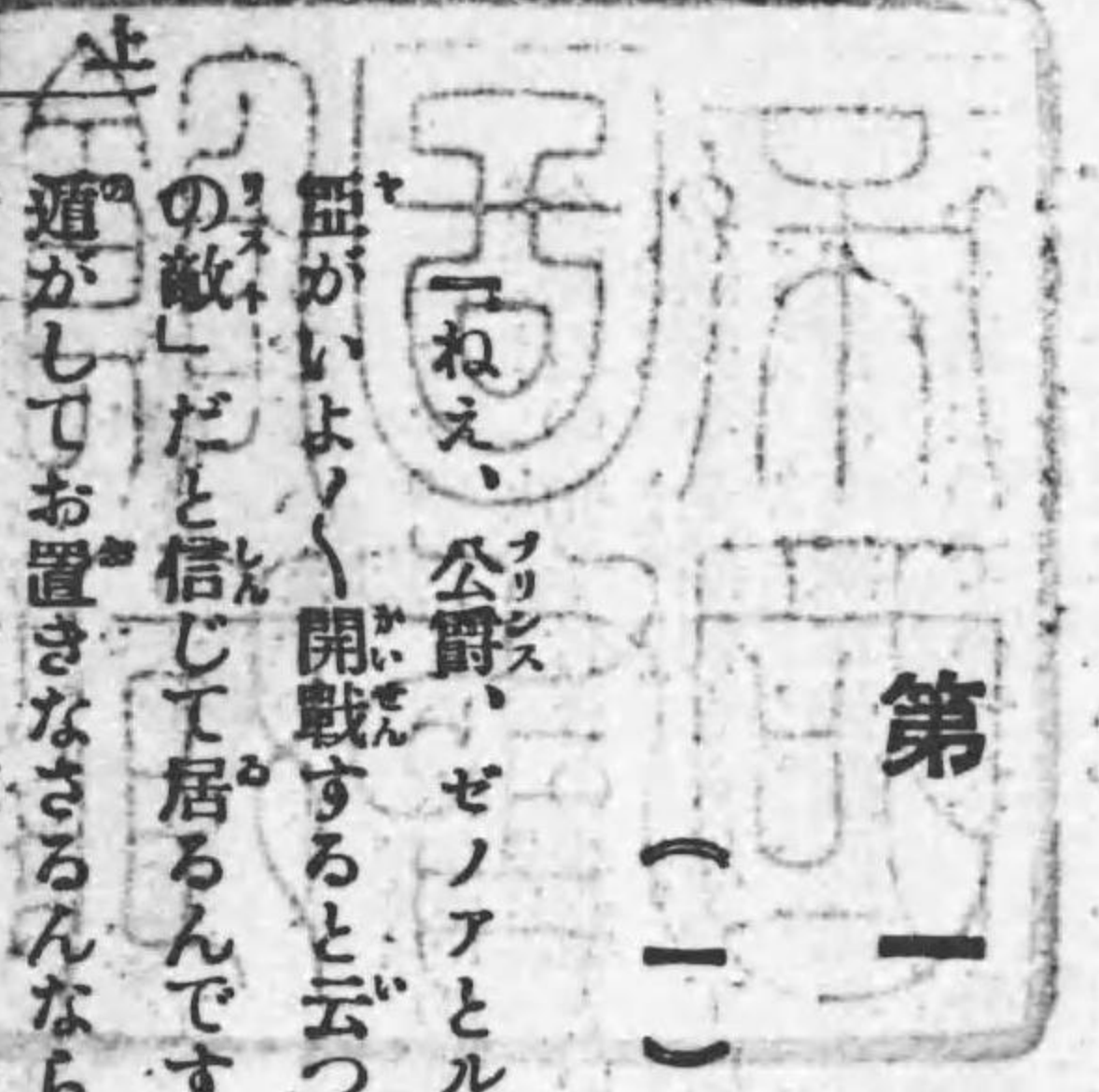
(ボオル・ビルウコフの「トルストイ傳」に據る)

戦争と平和 上卷

露國 レオ・トルストイ著

馬場孤蝶 譯

第一章



「ねえ、公爵、ゼノアとルッカは最早ボナバルト家の屬領、私有財産といふより外はありませんね。露西無がいよいよ開戦すると云つて下さら無ければ、貴下がこれでも彼の「基督の敵」——私は確に彼奴を「基督の敵」だと信じて居るんですよ——彼の「基督の敵」の何様な怪しからん事でも、何様な兇暴でも貴下は見通がしてお置きなさるんなら、貴下とのお交際は此れつ限りですよ、貴下は最早お友達ではありません、貴下は最早、何時も仰しやる通りの私の忠實な奴隷ではありませんよ。さ、消沈つてはいけませんよ、私の調子に吃驚なすつたんでしようねえ。さア、此所へお出なすつて、詳しいお話を聞かして下さいませよ。」
「宮女で、皇后マリア・フェオドロヴナの心腹であつた名高いアンナ・バアヴロヴナ・シニールが、自分の家の夜會にやつて来た一番初めの客の公爵ヴァシイリといふ有力な政治家に、斯ういふ風に挨拶したのは、千八

百〇五年の七月の或る晩であつた。

アンナ・バアヴロヴナは五六日此方咳嗽をして居た、グリッパに罹つて居たのだ、此婦人は自分の流行性感冒のことを氣取つて然様呼んだ——グリッパはその時分には極く偶にしきや用ひられぬ言詞であつた。

その朝、赤い役服の従僕に配らせた小さい何枚もの口上書は、悉皆同じ文面であつた——

「別にお差支がございませんなら、伯爵(或は公爵)、そして又、哀れな病人の相手を一晚なすつて下さることが餘まり太どくお嫌でございませんなら、今晚七時から十時までの間に宅でお眼にかゝれ、ば眞個に續しうございます。——アンネット・シーレル」

「ヤア。何といふ蠻的の攻撃だらう」と、公爵は歩み寄りながら應じた、刺繍のある参内服、半ズボン、金剛石の扣子付きの半靴といふ服装で、淡々としたその顔に生眞面目な表情の出で居るので見ると、主婦の挨拶を全然何とも思つて居無いのらしかつた。

公爵は立派な佛蘭西語を使つた——昔は露西亞人はさういふ佛蘭西語で話を爲たばかりで無く、それで考へも爲たのであつた——公爵の聲は、交際社會と宮中で長い生活を送つた豪い人にふさはしい低い、そして他を下目に見るやうな調子であつた。

公爵は、アンナ・バアヴロヴナの側へ行つて、主婦の手の上へ香料を塗つた自分のテカくした禿頭を曲けて、接吻し、それから、長椅子の上に乗々と坐つて——

「ねえ、先づ貴女が何んな案配なんだかそれを聞かして、この友達を安心させてください」と、今度は露西亞語で云つた、けれども、聲は前の調子を變へ無かつた、その言辭が婦人向に懇懇で親切であつたに拘らず、その聲調は尙且冷淡、所では無く、冷嘲の意味をさへ洩らして居た。

「道徳的感能が斯様に惱ませられる時節に——誰が快くつて居られるでしょう？ 少しでも感情を持つて居る者に取つて、此頃のやうな時代に、誰でも靜になつて居られますか？」と、アンナ・バアヴロヴナは高調子に爲つたが、今晚はゆつくりなすつて下さいませ、ねえ？」

「ええ。けれども、英國大使の祝賀會がね、水曜日なのでしよう。彼所へも顔を出さん譯には行かんのね」と、公爵は云つた。娘が、同行する爲めに、今に私を連れに参ります」

「延びたのだと思つて居ましたのにねえ。祝賀會だの花火なんてものはだんく下ら無くなつて來たやうですねえ。左様申しては何ですけれども」

「貴女の思召と知つたら、先方で延期したでしよう」と、公爵は云つた、信じて貰へるとは自分でも少しも豫期し無い斯ういふやうなことを、巻いた時計のやうに、自然に云ふやうな辭が付いて居るのであつた。

「お駈りなさるなよ。——所で、ノヴォシイルツォフの急報一件は何う極りましたね。貴下には何でも分かつて居るでしょうから」

「何うとも云ひやうがあるもんですか」と、公爵は當惑の冷たい調子で云つて、「何う極まつたと云つた所で、唯だ斯うです、ボナバルトが自分の船を焼いたこと、それで、吾々も吾々の船を焼かうとして居ると信するだけですな」

公爵ヴァシイリは、演慣れた役割を繰り返へす俳優のやうに、何時も氣乗りのし無い物の云ひやうをするのであつた。アンナ・バアヴロヴナは、その反對で、四十代でありながら、如何にも快活で、なかく勢が好かつた。

物に熱中する性質であることがこの婦人に交際社會に於て特種の位置を與へた、それで、時には、自分で左様するやうに氣の向かぬ時でさへ、知人たちに意外の思ひを爲せぬやうにと、熱中の何時も所の調子まで、自分からせり上るやうにするのであつた。顔の上に絶えず漂よつて居る抑へ付けた微笑は、す枯れた顔の道具立とは不調和であるけれども、驕兒の場合と全く同様に、愛嬌の方面での缺陷を此女が何時でも自覺して居ることを表して居た、その愛嬌の缺けて居るといふことは、自分でも何とかする方が都合が好いと思つて居たに於て、何うにもすることができず、又何うとかなるといふ氣も無かつた。二人は政治問題の話に耽つて行つたが、アンナ・バアヴロヴナは全く熱中して了まつた――

「いゝえ。壤地利のことは一切私に仰らずに置いてくださいよ。壤地利のことは私は全然知ら無いかも知れませんが、けれども、壤地利は此れまで決して開戦する氣はありませんでしたし、今でも、そんな氣はありませんわ。彼の國はわれ／＼を裏切つて居るのです。露西亞ばかりが歐羅巴の救主で無ければなら無いんですよ。聖上はご自分の崇高な職任を自覺なすつてお居になつて、それを何處までも忠實にお守りなさいますわね。これだけは私は何處までも確信して居りますわ。世の中でも一番壯大な仕事はわれ／＼のご仁徳の高いお豪い陛下の御手を待つて居るのです、陛下は彼れほどご仁心がお篤くつてお徳が高く居らつしやるんですもの、神の御助けが無い氣遣はありませんわ、ですもの、陛下は、今何とも云ひやうの無い厭な恐ろしいものにだん／＼なつて來た革命の九頭怪を、彼の殺人者の無頼漢の鼻先で踏み潰すご天職を十分にお盡しなさるに極まつて居りますわ。われ／＼露西亞人ばかりに、正しい者の血潮を償ふ天の命任が下つて居るのですわ。われ／＼が頼みに能きる國が何處にありますえ、何うです貴下。――商人根性の英吉利には、アレクサンドル陛下のいや高い御心が本當に解かる氣遣は何うしたつてありませんわ。彼の國はモルタを

明け渡すことを承知し無いぢやありませんか。彼方ではわれ／＼の行動に何か秘密な動機でもあるだらうと、そればかり一生懸命に探して居るぢやありませんか。彼方ではノヴォシールツォフに何と云ひましたね。――何にも云は無いでしょう。今上陛下が御自身の利益にと云つては何もお望みなさらず、唯だ何でも世界の爲ばかりにと思召して居らつしやる克己の大御心は、英吉利人たちには何うしたつて解りつゝはありませんよ。彼等は何を約束しましたね。何にも約束し無いぢやありませんか。此れまで約束して居たことまでも實行し無いぢやありませんか。普魯西は既にボナパルトは打勝つことの能き無い者で、歐羅巴全體が彼の前では無能力だと公言したぢやありませんか。――で、私はハルデンベルヒにもハウヒウィツツにも寸毫だつても信用を置きませんわ。彼の評判の高い普魯西の中立は陥穽に過ぎませんよ。私は神ばかりを信じ、われ／＼の愛する聖上陛下のいや高い御天職を信するばかりです。陛下は必然歐羅巴をお救ひになりますよ。――アンナ・バアヴロヴナは自分の調子の餘り激しいのが我ながら可笑しくなつたといふ笑顔で、不意に言葉を切つた。

公爵は微笑ながら、「貴女が若しわれ／＼の愛するウインツェンゲロオデの代りに公使であつたら、遮二無二普魯西王を説き伏せて了まつたでしょうに。貴女は實に雄辯だ。お茶を一杯頂けませんか」

「唯今。時に」と、女主人は又元のやうに落着いて云ひ足した。「今晚は二人面白い人が見える筈になつて居ります、佛蘭西の大家のロオアン一族を通してモンモランシイ家と縁類になつて居る子爵ド・モントマアル。本當の歴つきとした脱走王黨者の一人なんです。それから、長老モリオ、彼の深い心の人をご存じですか。謁見を許されました人です。彼の人をご存じですか」

「え、お目に掛れば非常に仕合せです」と、公爵は云つて、「それは左様と」と、其瞬間に不圖思ひ出

したことのやうに云ひ出したのだが、實際はその問題が自分の訪問の主要な目的であつたのだ。「皇太后陛下が男爵フウケを維也納の一等書記に命じ度いといふ思召だといふのは事實ですかね。彼の男爵は私の見る所では何うも思はしい人で無いやうですが」

公爵ヴァシイリは、或る一派が皇后マリア・フェオドロヴナの勢力に依つてその男爵に得させやうと試みて居たその位置に自分の子息を就かせ度いと熱望して居たのだ。

アンナ・バアヴロヴナは死と眼を眠むるやうに爲た、自分ばかりで無く、誰であつても、皇后の思召が何うだなどとは決して解かるもので無いといふ意味を見せたのだ。

「男爵フウケは皇太后陛下に陛下の御妹の手から推薦されたんです」と、アンナ・バアヴロヴナは佛蘭西語で、素氣無く、陰鬱な調子で云つた。アンナ・バアヴロヴナが皇后の事を話す時には何時でも、その顔に不意に陰鬱の陰を帯びた崇敬の、深い眞實の表情が表はれて来るのであつて、これが、この女が自分の高貴な保護者のことを憶ひ出させられる總ての場合の特徴であつた。アンナ・バアヴロヴナは、陛下から男爵フウケは懇篤なお取り扱ひを給はつたと云つたが、其所で又陰鬱の陰が顔の面を通つた。

公爵は無頓着な沈黙を守つた。アンナ・バアヴロヴナは、女、特に宮中で育つた女の特質である所の迅速さと巧妙で、公爵が、皇后に推薦された人に難癖を付けた云ひやうをする大膽さに就て、敢て公爵に懲戒の一撃を與へたのであつたが、それと同時に公爵を慰めた。「それは左様と、お宅のお話を爲ようではありませぬか」斯う云ひ足して、「お嬢さんは、交際社會へお出なすつてから以來、われ／＼のなかの、好い連中を全然熱中させてお了ひなさいましたですよ。お日様のやうにお美しいといふ評判なんですよのねえ」公爵は尊敬と感謝の徴に頭を下げた。

「私は屢々思ふのですが」アンナ・バアヴロヴナは、少時黙まつて居てから、公爵の傍へも少し近く寄つて、政治だの交際社會のことでは最早話は無くなつたが、此れからは一身上の打明け話を爲やうといふ意味を利かせるかのやうに、媚びるやうな笑顔を向けて、斯う追つ掛つて云つて、「世の中の廻り合せといふものは何うもヘンなものだと思ひますわ。何うして彼様なお二人とも立派なお子さんをお授かりなすつたのですよ、（私はお末のアナトオルさんを勘定に入れませんが、彼の方は私嫌ひですからね）と、挿句のやうに、眉を揚げて、斷然と云つて彼様な二人の奇麗なお子さん、それで居て、貴下は眞個にそれを何とも思つてお居でなさら無いのですもの、ですから、貴下はあの方たちの親の資格は無いのですよ」

で、アンナ・バアヴロヴナは熱心な笑顔を見せた。

「何うするものですか。ラヴアテルに尋いたら、私には愛、兒心の衝動が缺けて居ると云ふでしようよ」、公爵は斯う云つた。

「最早冗談は止しましよ。眞面目なお話が爲たいのですよ。私は貴下の末の子息さんには辛抱が能き無くなつて居るのです、善うござんすか。これは此所だけのお話ですがね、（此所で顔に例の陰鬱な表情が出て）皇后陛下の御前でも、皆ながそれを云ひ出して、貴下のことをお氣の毒がつて居つたんですよ」

公爵は何の返答も爲無かつた、けれども、アンナ・バアヴロヴナは言語を止めて、公爵の答を待つて居る間意味ありけに彼を見守つた。公爵ヴァシイリは顔を擧げた。

「何うしろと云ふのですかね」と、到頭公爵が、聲を高めて、「ご存じの通り、私は親の力で能き限り彼等の教育に手を盡したのです、けれども、彼等は兩方とも全馬鹿に育つて了つたのです。イボリイトは毒にならぬ馬鹿といふだけなのだが、アナトオルの方はそれとは全く反對の種類の馬鹿なのです。二人の相違

はそれだけですわい」と、何時もよりは少し自然な活氣のある笑顔で云つたが、それと同時に、意外な野鄙な厭な表情を、口の周圍の小皺のなかで如何にも判然と漏らした。

「で、何うしてまア貴下のやうな方が子をお持ちなすつたのでしようねえ。貴下が親でさへ無かつたら、全く點の打ち所の無い方でしようのにねえ」と、アンナ・パアヴロヰナは悲しさうに眼を揚げながら、云つた。

「私は貴女の忠實な奴隷です、ですから、貴女にだけは打明けてお話ができますがね。私の子供等は私の存在の障碍物ですなあ。此れが私の十字架ですわい。私は斯う自分で説明を付けて居るのです。何うするものですか」――

彼は言語を止めて、身振りで、自分はその残酷な運命に何處までも服従して居るといふことを表はした。アンナ・パアヴロヰナは考に沈んだ。

「貴下は彼の道樂子息さんにお嫁を當がつて見やうと思つたことはありませんか。世間では、老嬢は媒妁をし度がつて堪まら無いものだといふんですが、私は自分には未だ其様な弱點が出来たとは思ひませんけれども、私の親戚で、父親と一緒に何うしても幸福に暮し兼ねる若い娘があるんですよ、公爵嬢ボルコオンスキイと云ふんですがね」

公爵ヴァシイリは何とも答へ無かつた、けれども、頭の動き方で見ると、彼が世間漢の特質である考量と記憶の迅速で女主人の心添を一考して居ることは明白であつた。

「彼のアナトオルには年四萬掛るのですからなあ」と、彼は自分の考の苦しい流を抑へる事が明に能く無い様子で云つた。彼は躊躇つたが、「この割合で行つたら、五年後は何うなることでしょうね。親であること

の利益たア先づ此様なものです。金持なんですかね、その貴女の方の公爵嬢は」

「その娘の父親は金持ですが、畜いんです。田舎で暮して居ます。ご存じでせう、先帝の御生前に退隠した彼の有名な公爵ボルコオンスキイなんですわね「普魯西王」といふ綽名でした。なか／＼恂巧な男ですけれども、随分偏屈なんです、本當に扱ひ憎い人なんです。娘は全く可愛さうなんです。兄が一人あるんですが、それは此頃ルイズ・マイネンと結婚したんです。クツウヰフの幕僚なんです。今晚來ますでしよう」

「ねえ、親愛なアンネット」と、公爵は不意にその友達の手を撃つて、何ういふ理由か、それを下の方へ曲けながら、「この縁談を纏めてくださらんか、さうすれば、私は何時までも渝らずに貴女の最も忠實な奴隷で居ますからねえ。その娘は名家で金持でしょう――私の望にピッタリなんですわい」

公爵の身振りとして極く眼に立つその自由で自然な上品な様子で、彼は女主人の手を持ち揚げて、それに接吻し、それから、接吻して後も、尙放さずに、自分の安樂椅子へ戻つて、傍へ顔を向けた。

「待つてお居でなさいよ」と、少時考へてから、アンナ・パアヴロヰナは云つた。「今晚直ぐルイズ（若ボルコオンスキイの妻）に話しましょう、それで、纏まるかと思ひます。先づお宅のことから、私は老嬢の年季を入れ初めますわね」

(二)

アンナ・パアヴロヰナの客室はだん／＼込みだした。彼得堡の最高の貴族社會が來たのだ、年齢だの性格だのに於ては皆それ／＼非常に違つて居ながら、社會の同じ階級に皆屬して居るといふ點では誰れも異なら

無い人々なのだ。公爵ヴァシイリの娘の美人のエレンが、大使の夜會へ父親と同行する爲にやつて来た。娘は舞踏支度で、帝室の徽章を着けて居た、彼得堡ちうでの一番人を引き付ける女として知られた小さい若公爵夫人ボルコオンスキイも来た。若夫人はその直ぐ前の冬結婚したのであつた、それで、今は妊娠なので、大きな會合には出無くなつたが、小さいのへは尙且出るであつた。公爵ヴァシイリの子息の公爵イボリイトは、自分の手で、此頃交際社會へ紹介しつゝあつたモントマールと一緒に来た。長老モリオ其他多勢も来た。

「伯母にお逢ひなさいましたか」とか、「伯母をご存じですか」とか、入つて来る客毎に、アンナ・パアヴロヅナは尋いて、そして、客が来だすと見るや否や次の部屋から帆走り出た圖抜て大きい襟飾を着けた老女の傍へと大眞面目で彼等を導びいて、一人々々名を云つて紹介し、客から伯母へとつくづくと見渡して、それから、やがて、自分の場所へ戻るであつた。

客は悉皆この誰も知らず又誰も知らうとして居無い餘計者の伯母に紹介される儀式を経無ければなら無かつた。アンナ・パアヴロヅナは同情的な満足の陰鬱な嬉くつて堪まら無さうな表情で以つて、黙つて人々の儀式的挨拶の交換に聞き入つて居た。

「伯母さん」は新來の人には誰にでも全く同じ言語で、相手の人々の健康を尋ね、自分の健康を話し、それから、「神のお蔭さまで、今日は餘程お宜しい」といふ皇后陛下の御健康を話した。この老女に捉まつた人は誰れ彼れ無く皆、禮儀からこそ別に不相應な急ぎ方はし無かつたのであつたが、時が来るや否や、不快な義務を勤めあげたといふ、重荷を下したやうなホツト安堵の知覺で遁け出すのであつて、老女の傍に止まつて居るとか、其の晩ちう再とその近傍へ行くとか、いふことを爲無いやうに骨を折つた。

若公爵夫人ボルコオンスキイは金刺繡のしてある天鵝絨の袋へ何か仕事を入れて持つて来た。殆ど見分けられ無いやうな柔毛で一寸陰を付けられたその可愛らしい小さい上唇は少し短かつた、けれども、それが齒を露はす時には一層愛嬌があり、若夫人がその唇を引き下けて、下唇の上に結ぶ時には尙一層愛嬌があつた。非常に人を引き付ける女の常である如く、この若夫人の唇が短く、口が半分開いて居るといふ難がその人の美人としての特徴で、そして尙其上の添加物であるやうに見えた。

健康と生に左様まで満ち、今やがて母親になるといふ希望でそれほど優雅になつて居るこの若い美しい女を見るのは誰にも心持が好かつた。年取つた男だの、その齡が未だ來ぬのは最早氣むづかしくなつた偏くれた若者だのは、この夫人の前に出て、少時でも話した後では、夫人を見て居るうちに自分等も夫人と同じものになつたやうな氣がした。何様な人でも、この夫人と話を爲、その晴やかな笑顔、一言毎に見えるその艶の好い白い齒を見れば、彼はその日を何時にも無く愉快に送つたといふ印象を以て去ることは確であつた。

若公爵夫人は仕事袋を下けながら、小刻みの速い足取りで進んで行き、卓子を廻つて通り越し、心持好く衣服を揃いて、銀の沸茶器の傍の長椅子に坐わつた、その様子は、この夫人の爲た事は悉皆夫人自身及び周圍の人々に對する慰さみの藝當であつたかのやうであつた。

「仕事を持つて來ましたの」と、袋を開けながら、佛蘭西語で一語全體に話し掛けて、云つた。「もし、アンネット、悪い戯言をするもんぢやありませんよ」と、女主人の方へ振り向いて、言葉を續け、「御手紙ぢやア一寸とした内々の夜會だといふのぢやア無かつたの、ご覽なさいよ、私の服装の異式なことつたら、で、夫人は、ソニスで縁取つて、幅廣ナリボンで高く帯を付けた、形の好い鼠色の長上着を人に見せるや

うにと、腕を廣げた。

「構まうもんですかよ、リーズ」と、アンナ・バアヴロヅナは答へて、「貴女は何時でも何様な座でも一等の美人なんぢやありませんか」

「良人に捨られかけて居るんでしよう」と、若夫人は矢張佛蘭西語で、一人の將官に向いて、言葉を續けたが、「良人は死に行くんですわねえ。——ねえ、何故、此様な厭な戦争なんぞあるんでしようねえ」と、此度は、公爵ヴァシイリに向いて云ひ足し、その返答は待たずに、公爵の娘の美人のエレンに何か一寸としたことを云ふのであつた。

「この可愛い公爵夫人は何といふ愛嬌のある人だらう」と、公爵ヴァシイリは（佛蘭西語で）アンナ・バアヴロヅナに囁語いた。

若公爵夫人が来てから後直きに、大きい肥つた壯漢が入いつて来た。頭は短かく刈り詰てあり、眼鏡を掛け、粹な薄色の下袴で、太く大振りの縁飾のある肉桂色の上衣を着て居た。この肥つた壯漢は、カザリン時代の有名な貴族で今莫斯科で死にかゝつて居る伯爵ベズウホイの庶子であつた。この男は外國で教育を受け、今其所から歸つたばかりの所で、別にまだ何處へも奉職して居無い、今夜が交際社會への出始めなのだ。

アンナ・バアヴロヅナは、自分の家の客室の系圖で一番重く無い人に對して取つて置いてあつた領きのやうな會釋で、その壯漢を迎へた。が、殆ど侮蔑と云つても宜かりさうなその會釋に拘らず、ビエールが入つて来た時のアンナ・バアヴロヅナの顔は、人が、大き過ぎる場外れの何でもを見る時に、感じるやうな心配と驚慌とを、表はして居た。

ビエールは、その部室のなかの誰もより背が高かつた位ではあつたが、アンナ・バアヴロヅナの驚慌は、

その壯漢の、精巧さうなと同時に遠慮勝ちな、そして、その部屋の誰からも彼を區別した程に正直な、鋭い眼差しに依つて、起こされたのであつた。

「眞個に御親切ですわねえ、「ビエールさん」、哀れな病人の所へ好く逢ひに来てくださつて」と、自分が今彼を紹介しにと、連れて行く伯爵の方から眼を移して心配さうに彼を見上げながら、アンナ・バアヴロヅナは云つた。

ビエールはちぎれくゝの言葉で何か返答を唸り出して、そして、會集全體の上に眼を漂はした。彼は小さい公爵夫人の方へ向けて、先方が自分の親しい友達でもあつたかのやうに、陽氣な浮かれ立つたやうな笑顔で頭を下けて、女主人の伯爵の方へと導かれた。

アンナ・バアヴロヅナの心配は中つた、ビエールは伯爵さんが皇后陛下の御健康の講釋を終はるのを待た無いで、その途中で伯爵さんを見捨たのであつた。アンナ・バアヴロヅナは甚どく慌て、何か云つて彼を引止めやうと爲た——

「長老モリオを存じですか」と、尋いて、「極く面白い人なんです」

「え、彼の人の永久平和の策といふのを話に聞いたことがあります。至極面白いものですが、何うも實行は能きさうではありませんね」

「左様お考へなんですか」アンナ・バアヴロヅナは、何とか云は無ければならぬ場合なので、さう云つてそれなら、再女主人としての義務に戻つた、が、ビエールは今度は前のは全く反對の性質の失態を來した。前には、彼は老女に話を終らせずに置いてきほりを食はせたのであつて、此度は、他の婦人が彼の前を去らうとして居たのに、それを引き止めて、自分の話を聞かざるを得無いやうに爲たのであつた。

頭を下へ曲げ、脚を踏んばたかつて、彼が長老の策を空想だと考へるその理由をアンナ・パアヴロヅナに示めさうと爲だした。

「そのお話は直き唯今伺ひますよ」と、アンナ・パアヴロヅナは微笑みながら云つた。

で、禮儀正しい交際社會の掟を知ら無いこの壯漢を振り捨て、アンナ・パアヴロヅナは再女主人としての義務に身を委ねて、談話の調子が弛みだした所があると見るや否や何處へでも直ぐ加勢に出る心構へで、絶えず聞耳を立て、見渡して居た。丁度、紡績所の持主が職工をそれ／＼の位置に就かせてから、彼方此方と見廻りながら、止まつた紡錘があるとか、高い或はキイ／＼といふ音のする奴があるとかすれば、直ぐ其所へ行つて、それを止めるか、平調に戻らせるかするさういふ案配に、アンナ・パアヴロヅナは客室を其所此所と廻つて、黙まつて居る一團だの、激し過ぎて話して居る連中だのへ行つては、一言か、又は、毫末とした話の方向の變させ方で、再び談話機關全體を故障の無い禮儀正しい運轉調子に戻すのであつた。

けれども、さういふ仕事に掛り切つて居る間も、女主人が始中終ビエールに對して特に心配して居たことは、傍目にも明白であつた。女主人は、ビエールがモントマアルの周圍の一團の話を聞きに行き、それから長老が論議を聞かせて居た連中に加はつたまでの間、心もと無さうに、様子を見守つて居た。

外國で教育されたビエールには、このアンナ・パアヴロヅナの家の夜會が、露西亞の交際社會への彼れの初陣であつた。彼は、彼得堡の學問のある連中が總べて此所に集まつて居るのだと知つたので、玩具展覽會に入つた小兒のやうに、絶えず刮目して氣を付けて居た。彼は益になる何か氣の利いた談話を聞き漏らしてはならぬと始終油斷を爲無かつた。此所に集まつた人々の顔の面の悠然とした上品な表情を見るまゝに、特に高尚な何物かを何時も期待せずには居られ無かつた。

彼はやがて長老モリオの居た所へ來て居た。其所の談話が面白さうに思はれたので、其所に立つて、若い男は誰れも兎角好きな、自分の説を得意で持ち出すといふ機會の來るのを待ち受けた。

(三)

アンナ・パアヴロヅナの夜會は今、酣であつた。何の方面の紡錘も滑らかに故障無くブン／＼轉つて居た。傍に、この華やかな會合には寧ろ適應はぬ可愛さうな人間の、涙で顔の窠れ切つた善い年齢の老婦人が坐わつて居るばかりの「伯母さん」は別として、客は三團に分かれた。一つの大抵男ばかりで成り立つて居るのでは、長老モリオがその中心であり、第二の團合では、公爵ヴァシイリの娘の美人エレンと、顔色のパット華やかな、けれども、年齢にしては肥り過ぎた可愛い小さい公爵夫人ボルコオンスキイとの周圍に若い連中が集まつて居た。

第三のなかには、モントマアルとアンナ・パアヴロヅナが居た。

子爵は、華やかな顔の道具立の、上品な舉動の如何にも人好きのする様子の壯漢であつた。彼は明かに自分を高名者と認めて居たのだが、上品な育ちであつたので、自分が交はる連中が自分を引張り出して各自の利益に使ふまゝに温順しく身を委せて居たのであつた。アンナ・パアヴロヅナが客への馳走として彼を引張り出したことは一目で明かであつた。何様な好い料理でも物の旨さうに無い庖厨で見たら食ふ氣にならぬが、それが好い料理人の手に掛ければ、途方も無い珍味として味はるゝことがあると丁度同じ理窟で、その晩、アンナ・パアヴロヅナは客一同に最初には子爵を、次には長老モリオを、滅法な珍味として饗したのであつた。

モントマルルの一團では、直ちにダンギアン公の虐殺が論ぜられた。子爵は公は自分自身の寛恕の徳の犠牲になつたのであること、ボナパルトが悪意を持つたのには内密な二三の理由があること、を主張した。「あゝ、もし、それを私どもに話して聞かしてくださいませ、子爵」と、アンナ・バアヴロヴナは浮か

れ立つたやうになつて云つた、この『コンテエ・ヌウ・シラ・ヴィコント』といふ佛蘭西語には何と無くルイ十五世の口調が籠つて居るやうに思つたのであつた。

子爵は承知の徴に頭を下げ、そして、上品な笑顔を見せた。アンナ・バアヴロヴナは子爵の周囲の連中をもつと前へ詰めさせて、その話を聞きに来るやうに皆を誘ひ寄せた。

『子爵は公とお近づきでしたんですよ、アンナ・バアヴロヴナは客の一人に佛蘭西語で斯う耳打ちし、子爵は非常にお話上手なんですの』と、今一人は云ひ、『上流の交際社會に馴れてお居での方は直ぐ分かりますね』と、第三の人に感嘆の調子で云つた、斯ういふ案配に、子爵は熱い大淺盤のなかの和蘭芹で飾られた炙

肉のやうに、彼自身に取つて最も心持の好い得意な後光を背負されて客の前へ持ち出されたのであつた。子爵は談話を丁度始めやうとして居た、微弱な微笑が唇のうへを漂つた。

『此所へお出なさいよ、親愛なエレヌ』と、少し隔たつて坐つて居た第二の團合の中心であつた可愛らしい公爵嬢に、アンナ・バアヴロヴナは云つた。

公爵嬢エレヌは微笑んだ、この部屋へ入つて来た初めに浮べて居た、全く美しい女に眞個に善く適應つた微笑を顔に表はして、立ち上つた。蒺藜と苦で飾つた白い舞踏服を軽く引き摺り、白いキラ／＼する肩と艶々した多量の髪と、燦めく寶石とを見せ、傍へ寄つて通して呉れる人々の列の間を進んだ。特に誰をと云つて極まつた人を見るでは無く、座中全體に向かつて笑顔を見せ、さながらに、その姿、肉置の好い肩、

當時の流行の低く裁つた衣服から露き出しになつて居る美しい胸や背、夜會の燦輝さを體現したやうなこれ等の總ての美しくさを見ることの特權を愛嬌好く客の各自に許すかのやうにして、エレヌはアンナ・バアヴロヴナの傍まで辿り着いた。

エレヌは餘りに美しくかつたので、思はせ振りの装態をする性質の女のやうな所は影さへ認められ無

ばかりでは無く、尙その上に、反つてその反對に、謂はゞ、自分の申分の無い誰にも優つた處女の美しくさを氣恥かしい位に思つた程であつた。自分の美しくさの効果を減らさうと心では骨折りながらも、天然の美

くしさは何うにも爲やうが無かつたのだ。「まあ美しい人」といふ(佛蘭西語)が、エレヌを見た座中の誰の口からも出た。

子爵は、エレヌが正面へ来て坐わり、その何時も絶えたことの無い微笑の燦輝さを彼の上に向けた瞬間に、何か全く異常な物に壓倒されたかのやうに、肩を縮めて眼を伏せた。

「奥様、斯ういふ聴衆では私の話の方が太く負けます、子爵は笑顔で頭を下げた。若い公爵嬢は、裸出しの圓い腕を卓子に凭たせたが、子爵に返答として何か云は無ければならぬものだと

は思は無かつた。唯だ微笑んで待つた。子爵が話して居た間、すつと通して、エレヌは眞直に坐り續け、時

時、卓子に推しつけるので形の變はつて見える自分の美しくいまる／＼とした腕を一寸々々見たり、それよりも更に一層美しい胸を見て金剛石の頸飾の位置を直したりして居た、唯一二度衣服の裝を延した、で、

談話が非常に強く胸に徹へるやうな所へ来ると、アンナ・バアヴロヴナを見て、一寸との間女主人の顔にあつたと全く同じの表情が出たが、やがて再元の落着いた花やかな笑顔に戻るものであつた。

小さい公爵夫人ボルコオンスキイも茶の卓子を離れて、エレヌの後に續いた。

「一寸と待つてくださいますよ、仕事を持参で出かけますからね」と、調子を高くして云つて——「もし何を其様なに考がへ込んで居らつしやるの」と、公爵イポリイトに振り向いて、云ひ足し——「私の仕事袋を持つて来て下さいよ」

若い妻は、微笑んで、誰にも言葉を掛け、迅速に引移しを終はり、賑やかに體を整のへて、座に就いた。「さアこれで樂々となりましたわ」と、調子高に云ひ、子爵に談話を始めるやうに頼んで、再自分の仕事に掛つた。公爵イポリイトは仕事袋を持つて来て、それから、若夫人の傍へ自分の椅子を置いて、それに坐つた。

面白いイポリイトは、人が見て不思議がる程善く妹の美人エレンに似て居たが、更に不思議なのは、イポリイトが、其様なに妹に似て居ながら、吃驚する程醜かつたことだ。顔の道具立は妹のと同じであつたのだが、妹の方は、今を盛りの若き生の花やかな嬉しさうな自ら満足した何時も絶え無い莞爾さと、容姿の驚くべきクラシクな美しくさとして、顔全體が如何にも晴れ々として居た。兄の方は、それとは反對で、顔は、同じではあつたが、白痴のやうな表情で曇らされ、何時も高慢に片意地さうに見え、そして、體が痩せて弱々して居た。眼、鼻、口が、皆な心の不満である状態を漠然と示す何時も變ら無い顰面に、宛然、刻み付けられて了つたかのやうであつたと共に、腕や脚は何時とてもギゴチなさうな何うとかいふ態度を執つて居た。

「怪談ぢやあ無いの、え、これは」と、彼は、公爵夫人の傍に坐すると、急いで眼鏡を掛けながら尋いた、さながらに、さういふ道具無しには一言も云ふことが能き無かつたかのやうに。

「何。いゝえ、貴下」と、驚かされた話手は、肩を縮めて答へた。

「怪談は大嫌ですからね」、イポリイトは斯う云ひ足したが、その言葉を云つて了つた後で、やつとその意味が自分に分かつたのであることは、彼の聲調で明らかであつた。

彼がさう云つた様子が如何にも平氣なものであつたので、誰もその言葉が極く氣の利いたものなのか、極く馬鹿々々しいものなのか、何方とも極め兼ねたのであつた。彼は黒ずんだ緑の上衣で、彼が自分で「畏縮た女神の脚部」と名づけた薄色の半下袴で、靴足袋を出して、舞踏靴を穿いて居た。

子爵は、その當時世間に廣がつて居た逸話を、極く巧く話した、それは詰り、ダンギアン公はマドモアゼル・ジョルジュに逢ひに忍んで巴里へ行つたが、これもその同じ名高い女優に矢張り手を付けて居たナボレオンに其所で出逢つた、女優の家で公と落ち合つたナボレオンは、其時持病の癩癩が發して卒倒したので、全く公の手中に落ちて了つたのであつた、けれども、公はその機會に乗ずるのを控へた、而るに、ナボレオンの方は公のその寛恕に報ゆるに公に死を與へたといふのであつた。

この物語は善い面白いものであつた、戀敵同士が敵手を互にそれと悟つた場が殊に左様であつた、そして、婦人たちは、見た所、感動した。

「まア面白かつたわねえ」と、アンナ・バアヴロヅナは云つて、小さい公爵夫人を、何うだといふ風で見遣つた。

「面白かつたわ」と、小さい公爵夫人は、談話の面白さで縫ひ物の手を止められて了まつたといふことを見せやうとするかのやうに、仕事に刺した針を探がしながら、嘸いた。

子爵は賞讃のこの沈黙の貢が嬉しくつて、得意の笑顔で後を續けやうとした。けれども、丁度その刹那に、危険くつて堪え無かつた壯漢に始終眼を離さずに居たアンナ・バアヴロヅナが、その壯漢と長老が餘まり

聲高に、勢込み過ぎて話して居るのに気が付いた、で、直ぐに危険になつて居た場所へ手を貸しにと急いだ。

實際、ピエールは政治上の平衡の話に長老を誘ひ出すのに成功したのであつた、で、長老は、見た所、壯漢の率直な熱烈な調子に興味を覚えて、得意な持論を餘蘊無く聞かせて居た。雙方とも餘りに斟酌の無い熱中で話したり聞いたりして居たのだが、これがアンナ・バアヴロヴナには氣に食は無かつた。

「何ういふ手段に依るかやと仰しやるかな。——歐羅巴の平衡と國際法」長老は斯う云つて居た。「野蠻だといふ評判の露西亞のやうな強國に取つてこそ、歐羅巴の平衡を目的とする同盟の主位に於て私心無く斷乎として立つことは能きべきことでありませう——それで、その國こそ世界を救うてありませう」

「何うしてその權力の平衡を來たさせるのですか」と、ピエールが問ひ始めやうとして居た、けれども、恰かもその利那にアンナ・バアヴロヴナが割つて入つた、で、ピエールに嚴かしさうな顔を一寸と向けて置いて、伊太利人の長老に、彼得堡の氣候を何う感ずるか尋いた。

伊太利人の顔は直ぐに變はつて、氣障な態とらしい和らかな表情になつた、女に話しをする時は、この男は何時も左様のやうであつたのだ。

「御當地のお方のお才と御修養、殊に、私がお招きに預かる交際社會のご婦人のお右様に殆ど魅せられて了ましましたでな、氣候のことなど考へる餘裕が未だ出来ませんのでな、彼は斯う云つた。

アンナ・バアヴロヴナは、ピエールも最早大丈夫と見極めたので、二人を自分の見張りの下に置き得るやうにと、一般の集團のなかへ伴れ込んだ。

丁度この時に、新たな人物が客室に現はれた。この新たな人物は、小さい公爵夫人の夫のアンドレーエー。

ボルコオンスキイであつた。公爵ボルコオンスキイは、強く引立つた嚴格な顔の道具立の、中背のなか／＼美しく壯漢であつた。彼の眼の倦怠して切れ切つたやうな表情から、チャンと揃へたやうな落着いた歩調に至るまでの、彼のあらゆる様子が、彼の小さい可愛らしい妻とは、ひどく目に立つて反象を呈して居た。彼は、見る所、部屋のなかの誰でもと近付であるどころか、唯彼等の顔を見、聲を聞くのにさへ堪へられ無い程彼等にはつく／＼厭き果て、居るのらしかつた。其所の總べてそれ等の顔のなかで、何うも彼の美しい小さい妻の顔が一番彼をデレさすものらしかつた。美しい顔を太く醜くなるまで變面にして彼は妻に背を向けて了まつた。アンナ・バアヴロヴナの手に接吻し、それから、半眼で一座をグルリと見渡した。

「では、いよくご出征のお支度中ですか」と、アンナ・バアヴロヴナは尋いた。

「將軍クツゾフが私を副官にと望んでくださつたです」

公爵は佛蘭西語で云つて、クツゾフの名の終りの綴字に佛蘭西人のやうな音勢を付けた。

「で、ルイズは、奥さんは」

「田舎へ行けば宜しい」

「彼の美しい奥さんをわれ／＼から取りあけてお了まひなさるのには、貴下の罪になるぢやありませんの」

「アンドレーエー」と、他人に對して用ゐるやうなその同じ媚びた聲調で、小さい公爵夫人は夫に向いて調子を張り上げて聲を掛けて、「子爵のなすつたマドモアゼル・ジョルジュとボナバルトとの關係のお話は眞個に貴下に聞かせ度かつたわ」

公爵アンドレーエーは聲を擧めて、他所を向いた、公爵が部屋へ入つて來たその時からして、愉快さうな親

切らしい眼を離さずに居たビエールは今その傍へ行つて、腕を撃つた。公爵アンドレーエは見向きもせず、誰れか腕に觸る者があるといふことさへ、五月蠅くつて堪えらぬと云つたやうな風に顔を撃めたのであつたが、やがて、ビエールの笑顔を見るといふと、公爵の顔が以てな親切な快さうな微笑で明るくされた。

「何うしたんだ。——君まで派手な交際社會に入つたのかい」、彼は斯うビエールに云つた。

「君が来るだらうと思つて居たんだ」とビエールは答へて、「家へ行つて一緒に晩飯をやりましょう」と、物語を爲出して居た子爵の邪魔にならぬやうにと、囁語で云ひ足して、「何うです」

「いや、駄目だ」と公爵アンドレーエは笑つて云つて、手を少し強く握つて、左様いふことを尋く要の全く無いことをビエールに理解させやうと爲た。

まだ何か舌の尖頭まで出て来て居た事があつた、けれども、丁度その時に、公爵ヴァシイリとその娘が立ちあがつたので、二人の壯漢は通り路を開ける爲めに、傍へ退いた。

「御免を蒙ります、子爵」と、公爵ヴァシイリは云つて、立ちあがらうとするその佛蘭西人の袖を引いて、禮儀正しく、抑へるやうに坐わらせ、「生憎な大使館の夜會のお蔭で眞に面白いお話を中途でお邪魔致して、退席します——此様な面白い夜會を中座するのは如何にも残念ですが」と、彼は、アンナ・バアヴロヅナに云つた。

娘のエレンは如何にも形好く衣服の装を掛けて、椅子の間を辿つたが、美しい顔の面の微笑は尙一層輝かであつた。ビエールはその美しい者が傍を通つて行くのを殆ど絶驚したやうな熱中した眼付で見送つた。

「なかく美しいね」と、公爵アンドレーエが云つた。

「實に」と、ビエールは云つた。

傍を通る時に、公爵ヴァシイリはビエールの腕を押さへて、アンナ・バアヴロヅナに振り向いた。

「私の爲にこの熊を馴らしてください」、斯う云つて、「此男は最早一月から私の家に居るのだが、それで居つて、會へ出たのを見たのは、これが最初です。氣の利いた婦人方と交際ふほど若い男の益になることはありませんな」

(四)

アンナ・バアヴロヅナは微笑んで、自分の知つて居る所では、父側から公爵ヴァシイリと續合ひになつて居たビエールの爲に氣を付けやうと受け合つた。

「伯母さん」の傍に坐つて居た老女は急に跳びあがつて、公爵ヴァシイリの後を入口まで隨いて行つた。その顔には前の興味の装ひは全く無くなつた。親切さうな、涙で濡れた顔には唯だ心配した慌てたさまが表はれた。

「私のボオリスのことは、公爵、何ういふ案配でしようねえ」と公爵に隨いて行きながら、云つて、「老女はボリスといふ名を最初の綴りに音勢を置いて發音した」、「最早この上、彼得堡に居ることは能きませんですがねえ。彼の子に逢つたら何と云つたら宜しいでしょう」

公爵ヴァシイリの老女の話聞いて居る様子は不承々々で又殆ど無禮で、五月蠅さうでさへあつたけれども、老女はそれでも機嫌を取るやうな優しい笑顔を向けて、公爵の腕を押さへて、放さ無かつた。

「陛下に一言申し上げてくださいるのは貴下には何でも無いことぢやありませんか、さうすれば、彼の子

は直ぐに近衛に入れますわね」と、老女は云ひ足した。

「私に能きるだけはやりますとも、公爵夫人」と、公爵ヴァシイリは答へて、「けれども、陛下に願ふのは辛い、公爵ガリツインの手からクリミアアンツォフに當つて貰つては何うです。それが巧妙なやり方でしょうぜ」

老女は公爵夫人ゾルベエツコイで、露西亞の一番良い家柄の一人であつたのだが、貧乏であつたので、長いこと交際社會を遠ざかつて居て、昔の縁故を失つて了まつた。公爵夫人は今その一人子息を近衛に入れて貰はうと都へ出て来たのであつた。で、唯だ公爵ヴァシイリに逢ふ爲ばかりに、アンナ・バアヴロヴナの案内に應じて夜會へ來、唯だその爲めばかりに、子爵の物語を聞いて居た。が、公爵の言葉でギョツとした、昔は美しくかつたその顔に當惑の色が表はれた、けれども、それは唯だ瞬間であつた。もう一度微笑んで、一層強く公爵ヴァシイリの腕を握り締めた。

「ねえ、公爵」と、云つて「従來貴下に願つた事と云つては何一つ有ませんし、此事限でこの先決して何も願ひはしませんよ。私は一度だつても父が貴下とお心安くしたからなど、申したことは無いぢやアございませんか。ですがねえ、此度ばかりは、後生ですから子息の爲めに此れだけ爲てやつて下さいませよ、一生ご恩に着ますからさ」、口疾に斯う云ひ足した、「腹をお立ちなすつちやア厭ですよ、怒らずにこれだけ引き受けて下さいませよ。ガリツインには頼みました、でも、斷られました。貴下昔のやうに親切にして下さいよ」と、涙を眼に持ちながら、強て微笑まうとした。

「父上様、後かれてよ、」戸口で待つて居た公爵嬢エレンは斯う云つて、クラシックな肩の上へ美しい顔を振り向けた。

さて、社會に於ける勢力は、それが盡きて了まは無いやうに儉約し無ければならぬ資本なのだ。公爵ヴァシイリはこれを解して居た、誰彼無しに、自分に縋つて來る人の爲めにその都度他へ頼みに行つて居た日には、直きに自分自身のことを頼みに行くのが利か無くなつて了ふといふ結論に一たび達してからは、彼は容易なことでは自分の勢力を働かせ無かつた。けれども、公爵夫人ゾルベエツコイのこの最後の哀願は、彼に良心の刺戟と云つたやうなものを感じさせた。夫人は彼が夫人の父親のお蔭で出世の門出をしたといふ事實を彼に憶ひ起こさせた。その上に、彼は、夫人の様子から、夫人は、一たび或る考を頭に持つたが最後、思ひが通るまでは金輪際後へ退かず、若し反對されば、何處までも責付き、それでも先方が聽か無ければ、何時喧嘩面で來るか知れぬといふ種類の女ども、殊に母親どもの一人なのだを見た。この後の考が彼に對して衡量を引つくり返した。

「親愛なアンナ・ミハアイロヴナ」と、公爵は、何時もの心安さうな様子ではありながら、聲は不機嫌な調子で、云つて「貴女の望みを叶へるなア私には到底能きん事ですな、けれども、私が何れ程貴女が好だか、又何れ程貴女の父親を尊敬して居るか、それを此際ご覽に入れる爲めに、その不可能なことをやつて見ます、ご子息は近衛に入らせて見せます、さア確に受け合ひましたぞ。これで宜いですか」

「あア貴下、貴下は私どもの恩人でございますよ。私は貴下なら必然斯様して下さると心頼にして居ましたんですわね——貴下が親切な方なことを承知して居たんですもの」——公爵は一足踏み出した——「あ、一寸、もう一言……彼が入れましたら——夫人は躊躇つた。「貴下はミハアイル・イラアリオノヴィイチ・クツウゾフと云ふ信友ですわねえ、あの方の副官にボオリスを取り持つて下さいませんか。さうすれば、眞個に有り難いんですがねえ、で、それから……」

公爵ヴァシイリは微笑んだ。

「それは受け合ひませんぞ。總司令官に任せられてからといふもの、クツウゾフが何れ程人に取り圍かれて居るか、それはく一寸と想像が付かん位ですよ。彼の男の口づから、莫斯科のあらゆる婦人がその子息を皆副官に薦めて来たと聞いた程なんですぞ」

「いゝえ、何うしても受け合つて下さい。放しませんよ、貴下、私の信友、恩人……」

「父上様、美人エレンは同じ調子で、依然さう云つて、『後くれてよ』

「では、何れそのうち、左様なら。ねえ？」

「では、明日陛下に申しあげて下さいませぬ？」

「相違無く、けれども、クツウゾフの方は約束できませんぞ」

「いゝえ、でも、約束して下さい、約束して下さいよ、バシイル」と、アンナ・ミハアローヴナは媚びるやうな態澤山の笑顔で、云ひ張つた、この笑顔は、過ぎ去つた長い昔には好く適應つたものであつたかも知れぬが、今の變れ切つた顔には如何にもうつら無かつた。夫人は何うも自分の年齢のことを忘れられしかつた、で、自然に女らしい昔の術に信賴するのが癖になつて居たのであつた。が、公爵が行つてしまふや否や、顔が再先のやうに装つた落着いた満足の表情を執つた。公爵がまたその時物語を爲て居た集團の所へ返つて、目的が最早達して見れば、暇乞をすべき時の來るのが只管に待たれはするものゝ、聞き入つて居るやうな装をして居たのであつた。

「けれども、ミランの聖油の總てこの最後の喜劇を貴下がたは何うお思ひですの」と、アンナ・バアヴロヰナは尋いて「それに、ゼノアとルッカの人民が、帝座に就いて國民の臣禮を受けて居るモシユウ・ボナバル

トの所へ臣禮を行なひに來るといふ喜劇は如何でしょう。あゝ、眞個に面白いぢやアありませんか。いゝえそれは、笑ひ所ぢやア無い、誰でも聞くと直ぐ氣がヘンになる位怪しから無いことなんですわ。全然世界ぢうが氣でも狂つて了まつたやうな世の中ね」

公爵アンドレーは女主人の顔を凝乎と見詰めて、そして、微笑んだ。

「神が此王冠を予に與へた、これに觸るゝものは覺悟せよ」と、彼は、戴冠式の時のボナバルトの言辭を引いて云つた。「この言葉を云つた時の彼の姿は實に美しかつたといふことです」と、云ひ足して、そして、その言辭を伊太利語で繰り返した。「ディオ・ミイ・ラ・ドナ、グアイ・ア・キイ・ラ・トッカ」

「これぢやア」と、アンナ・バアヴロヰナは追掛けて云つて、「もうく餘まりといふものぢやアありませんか。帝王たちは危險此上無い彼の男を最早打捨てはお置きなされ無いのでしようわ」

「帝王？。露西亞は別なのですよ」と、公爵は、丁寧であるが絶望した聲調で云つて、「帝王と仰やいますか、夫人？。彼等帝王はルイ十八世の爲めに、女王の爲めに、マダム・エリザベットの爲めに、何を爲て呉れましたか。何にも爲て呉れ無い、だんく勢ひ込んで來て斯う云ひ足した。」それで、ご覽なさい、彼等はボルボン家を裏切つた罰を今思ひ知つて居るのです。帝王？。彼等は斯の篡奪者に國使を送くつて居りますぜ」

侮蔑の意を強く斯う漏らして、公爵は再度身體の方向を變へた。眼鏡越しに公爵を始めから見詰めて居た公爵イボリイトは、其所まで來ると、不意にグルリと振り向いて、小さい公爵夫人の方へ顔を曲けて、針を貸せと云ひ、そして、その針で卓子へコンデエ家の紋印を刻み付けて、夫人に見せ始めた。夫人の方から頼みでもしたかのやうに、彼は如何にも一生懸命な風付で、その紋印を説明した。「節杖、ギユウル樞、空色のギ

ユウルで縁を取つた——コンデエ家」と、云つた。小さい公爵夫人は微笑みながら聞いて居た。

『ボナバルトがもう一年佛蘭西の王位に居らうものなら、子爵は、その問題に自分程善く通曉して居るものは無いと自信して居るので、他人の説などには耳も假さずに、自分の考への續きばかりを逐つて行く人のやうな風で、斯う、又話して、『事態は全く飛んでも無い方へ進むことになりましょう。奸計と横暴で以つて、追放と處刑で以つて、佛蘭西の社會は——勿論上流社會を云ふのですが——全く永久に破壊されてしまひます、さうするといふと……』

子爵は肩を縮めて、絶望の手眞似を爲た。ビエールは何か云はうとした——この談話に對して興味を覺えたのだ——、けれども、ビエールに始終用心して居たアンナ・バアヴロヴナが、口を挾れた。

『アレクサアンドル皇帝陛下は』と、帝室のことを話す場合には何時でも出す例の感動的な調子で、アンナ・バアヴロヴナは云つて、『自分たちの政體を何う撰まうとも、それは佛蘭西國民自身の勝手に任すといふ思召を御發表遊ばされましたのです。それで、佛蘭西の全國民は、篡奪者の手から救はれ、ば、必然正當な王様の御手へ直ぐにお縋り申すやうになると私は思ひますわ』と、その脱走者で王黨の子爵に調子を合はせやうとして、云つた。

『必らず左様とは云へますまいぜ』と、公爵アンドレエーは云つて、『子爵が事態が現下では進み過ぎて居ると考へられたのは全く御道理です。最早舊制度に戻るのには容易なことではありますまいよ』

『僕の聞いた所だけでは』と、ビエールは顔を赤くして、再度口を挾れて、『貴族の殆ど全體がボナバルトの方へ行つて了つたといふんです』

『それはボナバルト派の云つて居ることなんです』と、子爵はビエールの方を見ずに云つて、『現下では、

佛蘭西の輿論が何處にあるといふことを突き留めるのは困難なことですからなア』

『ボナバルトが左様云ひましたよ』と、皮肉な笑顔で公爵アンドレエーが云つた。彼が子爵を好か無かつたのは明白であつた、で、彼は、子爵の方は見無かつたけれども、その言語が子爵に向けられたものであることは、それと見て取り得られた。

『予は榮譽の路を彼等に示したり、彼等はそを取るを肯ぜざりき』と、公爵は、少時黙まつて居てから、又ナポレオンの言葉を引いて、『予は予の應接室を彼等に對して開きたり、彼等はそれに群がり來れり』……、私は、彼が左様云ひ得る權利を何れ程の度合まで持つて居るか知らんけれども』

『寸毫も持つて居りません』、子爵は斯うやり返して、『公の虐殺以來は、ナポレオンの最も熱心な加擔者どもさへナポレオンを大人物とは仰がなくなりました。尤も、或る徒輩は、新たに彼を大人物に爲たかも知れません』と、アンナ・バアヴロヴナに話し掛け、『公の虐殺で、天には一人殉難者が増へ、地では一人大人物が減つた譯ですから』

アンナ・バアヴロヴナとその他の連中が子爵の言葉に感服の意を笑顔で示さ無いうちに、ビエールが又口を挾れた、アンナ・バアヴロヴナは、ビエールが何か不遠慮なことを云ひはし無いかと蟲が知らせて居は居ながら、此度は、彼を止めることが能き無かつた。

『ダンギャン公の處刑は』と、ビエールは云つて、『政治上の必要でした。で、その全責任を自分一身に負ふのに躊躇し無かつた所がナポレオンの腹の大きい證據だと僕は思ふ』

『まア。まア随分』と、アンナ・バアヴロヴナは、慄然としたといふやうな調子の低聲で、呻いた。

『エッ。モシユウ・ビエール。貴下は暗殺をやるのが腹の大きいことだと云ふんですか』

と、小さい公爵夫人が、微笑んで、仕事を身近く引き寄せながら、云つた。

「あゝ。おゝ」と、いろいろな聲が叫んだ。

「面白い」と、公爵イポリイトは英吉利語で云つて、膝を叩き初めた。子爵は唯だ肩を揺つたばかりであつた。

ビエールは嚴肅な顔付で、眼鏡越しに聞き人を見渡した。

「僕が左様云ふのは」と、ビエールは我無しやりに、前からの論旨を逐つて、「斯ういふ理由なんです、ボルボン家の人々は、革命を恐がつて逃げて了つて、人民が無政府の状態の餌食になるのを見返ら無かつたのだ。所で、革命の意義を解し、それを征服することが能きたのは唯ナポレオンあるのみであつた、だから、公共の利益の爲めには一人の生命を犠牲にするのに躊躇する譯には行か無かつた」

「この卓子へお出なさら無いか」と、アンナ・パヴロヴナは云つた。が、ビエールは、それには返答を爲すに、言葉を續けた。

「左様」と、ますます熱心になつて、云つて、「ナポレオンの偉大である所以は、彼が革命の波瀾の上に超越して居て、革命のさまざまの悪傾向を鎮壓し、善良な分子ばかりを保存した所にある——即ち、すべての公民の同権、言論、出版の自由がそれだ、この目的を達せんが爲めのみに彼は自ら進んで最高の権力を掌握したんです。」

「左様、彼が若し、その権力を用ゐて虐殺を行ふやうなことを爲すに、その権力を正統の君主に引渡したのであつたら」と、子爵は云つて、「それならば、私は彼を偉人と呼びましたでしょう」

「彼は左様は能き無かつたんです。人民はボルボン家を振り捨て、了まひ度いばかりに彼にその権力を與

へたんです、で、それは全く、人民が彼を偉人だと思つたからなんです。革命は壯大な事實なんだ、斯う論じ進んだビエールは、その我無しやらな不適切な喧嘩腰の論調で、彼自身のまだ非常に若いこと、彼が何でも思つて居ることを洗ひ浚ひ言つて了まひ度い心持なことを、我にもあらず洩らしたのであつた。

「革命と弑逆が壯大な事實ですつて……その次は何でしょう……まア、この卓子へお出なさいよ」と、アンナ・パヴロヴナは重ねて云つた。

「民約」と、子爵はホヤ／＼微笑ながら云つた。

「弑逆のことを云つて居るんぢやありません。その思想の話なんです」

「掠奪、虐殺、及び弑逆の思想ですか」と、皮肉な聲が來た。

「それは極端です、勿論、けれども、革命の眞意義はさういふ物のなかにあるんぢや無い、それは人間の權利だの、習俗的思想からの解放だの、人間の平等だのにあるんです、さういふ物に悉皆ナポレオンはその全効力を保たせるやうに爲たんです」

「自由と平等ですか」と、子爵は、いよくその壯漢の主張の愚劣であることを本氣に彼に見せてやらうと決心したかのやうに、忌々しげに云つて、「非常に音は大袈裟な言葉だが、意味は餘程昔から下落して居ります。自由と平等を愛さ無い者が何處にあります。既に、われ／＼の救世主基督が自由と平等を唱へられました。人間は革命以來前よりか寸毫でも幸福になりましたでしょうか。イヤ、實際は、その反對です。われわれは自由を欲した、けれども、ボナパルトが自由を押し潰して了まつたんです」

公爵アンドレーは、微笑みながら、最初はビエールを見、次ぎには子爵を見、それから女主人を見た。始めのうち少時は、アンナ・パヴロヴナは、その交際の熟練に拘はらず、ビエールの激越な調子に聽

を冷した、けれども、子爵はビエールの不謹慎な言葉を存外平靜にあいしらつて居るのではあるし、又ビエールの言葉を押へ付けて了まふことは到底能きることでは無いと、見切つて了まつたので、アンナ・ペアヴロヴナは、自分の全力を糾合して、その若い辯論家を攻撃しやうと、子爵に合體した。

『けれども、私の親愛なモシユウ・ビエール』と、アンナ・ペアヴロヴナは云つて、『公——でも誰でも人間一人——罪の無い者を裁判も開かずに殺して了まふなんていふことの能きる偉人といふのは、何ういふんでしようね』

『私は何ひ度いね』と、子爵は云つて、『革命曆第二月の十八日の事件を何う説明なさるか。彼れは詐欺では無いですか』

『彼れは、手品のやうな策略で、偉人の行爲らしい所は全然ありません』

『それから、負傷者を阿弗利加では殺しました』と、小さい公爵夫人はさう云つて、『眞個に慄然としますわ』で、夫人は肩を縮めた。

『畢竟、彼は平民だ』と、公爵イポリイトが云つた。

ビエールは何れに答へて宜いか分から無くなつた。彼は皆を見渡して、微笑んだ。彼の微笑は他の皆の半微笑とは全く違つたものであつた。彼が微笑むといふと、不意に、乍ち、彼の生眞面目な、イヤ寧ろ不機嫌さうなと云つて宜い位の顔が、何處へか消えて無くなつて了まふ、そして、小兒々々した、人の好さうな、寧ろ間の抜けた、人の勘辨を請ふやうな、全然異つた顔が現はれた。此晩が彼との初対面であつた子爵は、この革命主義者は決してその口ほど恐ろしくは無いと見て取つた。誰も黙まつて了まつた。

『何うしたつて、一度で悉皆に返答の能きつことがあるものかね』と、公爵アンドレーエは云つて、『その上』

に、政治家の行動を見る場合には、私人としての行爲と、將帥とか皇帝としての行爲とを區別して見無ければなら無い。私はまア左様思ふんですが』

『左様、左様、勿論』と、旨く出て来て呉れた援助が嬉しくつて、ビエールは、斯う言語を挾れた。

『誰でも認め無ければならんのは』と、公爵アンドレーエは疊み掛けて云つて、『アルコラの橋でのナポレオンと、ジャッファの病院で傳染病者と握手した時の彼とが、實に偉大であつたことなんだ、けれども……けれども、亦辯護の能き憎い行爲はあるにはあります』

ビエールの状態の行き詰まつたのを救はうとしたのであつたらしい公爵アンドレーエは、起ちあがつて、妻に合圖を爲た。

不意に、公爵イポリイトが起つた、そして、両手を振つて皆を止め、手眞似で人々を坐わらせてから、斯う云ひだした——

『え、私は今日莫斯科での話だといふのを聞きました、お慰みにそれをお話し度いんです。ご免ください、子爵、私は露西亞語で話さなければなりません。で無いと、話の味が無くなりますからね』

其所で、公爵イポリイトは、佛蘭西人が露西亞に一年居てから話すやうなチャンボンの露西亞語を使つて、話した。誰も彼も耳を傾けた、公爵イポリイトは、非常に熱心に、非常に手強く、その話に衆皆の注意を喚んだのであつた。

『莫斯科に或る貴婦人がある。で、その婦人は吝嗇なんです。馬車の後に二人従僕を乗せ度いと思つたんです。而も極く背の高い従僕を。先づさういふのがその夫人の望みでした。所で、その婦人はこれも極く背の高い仲働を雇つて居ました。で、その夫人が云ひましたには……』

さう話して来て、公爵イポリイトは、止まつて、考へ込んだ、考を纏めるのに骨が折れるといふやうな様子であつた。

「夫人は云ひました、左様、夫人が云ひましたには「お前」、その仲働にさう云つたんです、「他家をお訪ねするんだから、法被を着て、馬車の後へ乗つてお呉れ」」

其所へ来ると、公爵イポリイトは大きい聲で噴飯した、聞き人の誰もより先きに長いこと笑つて居た、それは、彼に取つて餘まり嬉しく無い印象を人々の胸に起こさせたのであつた。それでも、アンナ・パアヴロヴナと、年の行つた婦人を加へた四五人は、笑顔を見せた。

「夫人は馬車で出た。不意に、烈しい風が吹き出した。娘は帽子を吹き飛ばされて了まひました、で、長い髪がだらりと下がりました……」

此所で、彼は最早堪へて居られ無くなつた、で、烈しく笑ひだして、哄笑のなかで艱然と、「それで、世間ぢうが知つて了まつた……」

それで、物語は終つた。誰にも何故彼がさういふ話を爲たのか、何故彼れが露西亞語で話さうと主張つたのか、その理由は解から無かつたが、それでも、アンナ・パアヴロヴナとその他の四五人は、モシユ・ピエールの厭な不作法な激論をさう心持よく結んで了まつた公爵イポリイトの物慣れた交際振りに感服した。それから後は、談話は、その直ぐ前だの次の舞踏會のことや、芝居のことや、誰それに、何時逢つたとか、何處で逢つたとかいふことなどの、下ら無い一寸々々した談話に割れて了まつた。

(五)

この實に面白かつた夜會の禮をアンナ・パアヴロヴナに云つて、客は追々暇乞を爲始めた。

ピエールは、大きな赤い手で、不恰好で、肥つて、途方も無く背が高かつた、彼は、他家の客室へ入つて行く時の世間並の作法は知ら無かつた上に、尙又其所を出る時の作法、即ち、別れ際に先方の特に氣に入るやうな何言かを何ういふ風に云ふものなのか、其様なことに至つては更に不案内であつた。その上に、彼はほおつとして居た。起ち上がつて、自分のでは無い將官の羽毛の付いて居る三角帽子を手に當つた儘に取り上げて、それを持つて、その持主の將官から返して呉れと云はるゝまで、その羽毛を引張り／＼して居た。が、彼が幾ら放心でも、客室に入る作法を知ら無いでも、其所で他人と話す時に不作法でも、其様な事は、彼の人の好い事と、率直と、遠慮勝な表情とで、十分償はれた。アンナ・パアヴロヴナは彼に振り向き、彼の失態を全く宥免することを表示する耶蘇教的勸忍の顔付で、彼に頷くやうに會釋して、「又近いうちにお目にかゝりませうね、でも、お説だけはお變へなさいませよ、ねえ、ピエールさん」

彼は、何とも返答せず、唯だ頭を下けて、皆に向けて又例の笑顔を見せた、それは宛然斯う云つて居るかのやうであつた、「説が有らうが無からうが、何うです、私は如何にも人の好い男ぢやありませんか」で、アンナ・パアヴロヴナは固より、其他の誰も彼も、我れ知らずさう感じ無い譯には行か無かつた。公爵アンナ・パアヴロヴナは廣室へ出て行つて、彼に外套を掛けやうとする従僕に肩を當てがつて、彼の妻の、又其所へ出て来て居た公爵イポリイトと喋べつて居るのを如何にも無關心な態度で聞き流して居た。公爵イポリイトは、最早直きに母にならうといふ小さい公爵夫人の傍に摺り付くやうに立つて、眼鏡越しに、夫人を眞ともしけしけ見詰て居た。

「裡へお入りなさいよ、アンネット、風を引きますからさ」と、小さい公爵夫人は、アンナ・パアヴロヴ

ナに暇を爲ながら、斯う云つた。「あれは承知して居てよ」と、夫人は低聲で附足した。
アンナ・パヴロヴナは、間を見て、アナトールと公爵夫人の義妹との間の自分が見込んだ縁談に就て、
リザと何うやら斯うやら二言三言話したのであつた。

「貴女に凭るばかりですわ。ねえ」と、アンナ・パヴロヴナも低聲で云つて、「あの子に手紙を遣つて、
その上でお父様が何うお思ひだか聞かしてくださいよ。では何づれ」で、アンナ・パヴロヴナは廣室から
内へ引込んだ。

公爵イポリイトは小さい公爵夫人の所へ来て、摺れくになるまでに顔を下へ曲けて、囁語くやうに夫人
に何か云ひ初めた。

一人は公爵夫人の、も一人は彼れ自身のと、さう二人の従僕が、肩掛と外套を持つて、主人二人の話し終
るのを待つて立つて、自分たちには一向解から無い佛蘭西語の饒舌をば、云つて居ることは善く解かるのだ
が、それを知らせ度く無いのだと云つたやうな顔付で、聞いて居た。公爵夫人は、例の笑顔で話し、笑ひな
がら聞いて居た。

「大使の方へ行か無くつて仕合せでした、公爵イポリイトは斯う云つて居た、「實に下ら無いんです……
愉快な晩でしたなア、は？ 愉快だつた」

「舞踏會は大層面白からうといふ話だつたぢやアありませんか」と、小さい公爵夫人は、柔毛の生えた小
さい唇をピク／＼させながら答へて、「奇麗な婦人方は皆お出なさるつて」

「い、や、決して其様な事はありません、貴女がお出なさる無いんですもの、其様なことはありません」
と、公爵イポリイトは、如何にも嬉れしやうに笑つた、そして、従僕の手から肩掛を引奪くると同時に、従

僕を脇へ押し退けて置いて、それを小さい公爵夫人に着せ初めた。ぶきつてうな爲めか、それとも、故意に
か——誰にも何方だか解から無かつたが——彼は、肩掛が着さつた後でも、その若い女を抱き締めてでも居
るかのやうに、長いこと手を離さ無かつた。

如何にも様子好く、が、尙且微笑みながら、夫人は少し身を後退らせ、グルリと振り向いて、夫を一寸と
見た。公爵アンドレーの眼は閉ぢて居た、如何にも草臥た様子で、そして眠むさうであつた。

「最早宜いかね」と、彼は、妻の眼を避けて、尋いた。

公爵イポリイトは、最新流行形の踵まで下る外套を、大急で着て、裾に躓きながら、昇降段の方へと公爵
夫人の後を追つた、従僕が手を貸して夫人を馬車に乗らせて居る所であつた。

「公爵夫人、何れそのうちに」と、舌も脚と共に纏れて、彼は云つた。

公爵夫人は長上衣を少したくし上げて、馬車の裡の間に坐つた、夫は軍刀を整へて居た、手助けを爲度
がる公爵イポリイトは誰もの邪魔であつた。

「御免、貴下」と、公爵アンドレーは、行く方に立塞がつて居た公爵イポリイトに、露西亞語で素氣無く
不愛想に云つた。

「待つてるぜ、君、ピエール、前と同じ聲が此度は暖かな親しげな調子で呼んだ。
馭者は馬を早足で出し、馬車は轟いて行つて了つた。公爵イポリイトは、短かいクツ／＼といふ笑で噴飯
した、彼は、その家まで送つて行く約束であつた子爵を、昇降段に立つて待つて居たのだ。

「おい、君、君の小さい公爵夫人はなかく、好い器量だね、なかく、好い器量だ、子爵は、イポリイトと
一緒に馬車の裡に坐りながら、斯う云つて、「全く好い器量だ、彼は指の尖に接吻した。」そして、全く佛蘭西

だ」

イポリイトは鼻風を吹いて、噴飯した。

「おい、君はあゝいふ一寸とした無邪氣なやり方で行く所は實に恐しい男だね」と、子爵は續けて、「あの亭主、王様氣取りのあの小僧つこの將校が僕は可愛さうでなら無いね」

イポリイトは又噴飯した、そして、笑聲の真中から、やうく斯う云つた。

「でも、君は露西亞の婦人は佛蘭西のには到底敵は無いと云つたぢやア無いか。彼等を生け捕るにやア又秘訣があるさ」

ビエールは、第一番に行き着いたので、家内の者であるかのやうに、ズン／＼公爵アンドレエーの書齋へ行つて、直ぐと例の通り長椅子の上に横になつて、棚のなかで眼の行つた所に有り合はせた書籍（シイザアの征戦記であつた）を手に取つて、臆で身體を支へて、真中頃を讀み始めた。

「マドモアゼル・シエールを甚くおどかしちやつたぢやア無いか。今頃は餘つ程病氣になつて居ようぜ」と、小さい白い手を擦り合せながら書齋へ入つて来た公爵アンドレエーが云つた。

ビエールはごろりと寢返つて、重量で長椅子をギイ／＼云はせ、公爵アンドレエーに熱心な顔を振り向け、微笑んで、手を振つた。

「あゝ、あの長老は面白かつたね、唯だ彼奴は考へ方が拙いだけなんだ……僕の考ぢやア、永久の平和は出來得ることなんだ、けれども、何うしてと云ふことは解から無い……何うしても、權力の平衡では不可……」

公爵アンドレエーはさういふ抽象的な議論には氣が向か無い様子であつた。

「人は、自分の考へ通りを何處でも云ふといふ譯に行か無いものだよ、君。それよりか、いよ／＼身の振り方を何うとか極めたのかい、まア、それを聞かうぢや無いか。騎兵に入るかね、それとも、外交官かい」と、寸時黙まつて居てから、公爵アンドレエーが尋いた。

ビエールは長椅子の上で脚を組み合せて坐つた。

「君、何うも未だ何うするのが宜いのか自分でも解ら無いんだよ。何方も氣が向か無いんだ」

「でも、何か知らに極め無きやア行けまい。君のお父様がそれをお待ちぢやア無いか」

十歳の時に、ビエールは、或る長老を附添教師にして外國へ教育を受けに遣られ、二十歳になるまで其所に居た。莫斯科へ歸つて來ると、父親はその長老に暇を遣つて、若者のビエールに斯う云つた、「さア、これから彼得堡へ行つて、世間を見て、それから、身の振り方を極めなさい。私は何にも承知する。これが公爵ヴァシイリへの手紙ぢや、これが金ぢや。何でも手紙で云つてよすが宜い、私は何でも相談に乗るからな」。ビエールは最早此處三月仕事を探がして居るのだが、未だ何とも極め兼ねて居るのだ。公爵アンドレエーが、今ビエールに話したのは此の仕事の選擇であつた。ビエールは額を撫でた。

「だが、彼奴は共濟組合員なのに違ひ無い」、その晩逢つた長老のことを指して、彼は斯う云つた。

「其様な下らん事は何うでも宜いぢや無いか」と、公爵アンドレエーは彼を岐路から引き戻して、「本氣な話を爲やうぢや無いか。近衛騎兵へ行つたかい」

「いや、未だ、だが、僕は感じたことがある、それを君に話し度いんだ。此度の戦争はナポレオンに向つてやるんだらう。若し、これが自由の爲めの戦なら、僕にも解ることなんだから、夫れやア第一番に軍隊へ入るさ、けれども、世界で一番偉大な人に楯付いて、英吉利や、奥地利なんかの味方を爲るんぢやア」

「それは善く無いからなア」

公爵アンドレエーは、ピエールの小見らしい言語に對して唯だ肩を縮めたばかりであつた。誰も其様な馬鹿々々しい事に返答は能き無いのだといふかのやうな様子であつた。が、實際はこの率直な疑問に對しては公爵アンドレエーが爲たのより外の返答を見出すのは困難であつた。「誰でもがそれ／＼自分自身の確信の爲めに戦ふばかりであつたら、世の中に戦争といふものは無くなるだらう」と、彼は云つた。

「それで、左様なれば又非常に善いだらうぢやア無いか」と、ピエールは云つた。

公爵アンドレエーは皮肉さうに微笑んだ。「多分それは善い事だらう、けれども、其様なことには決して爲ら無いだらうよ……」

「所で、何の爲に君は戦争に出て行くのかね」、ピエールは斯う尋いた。

「何の爲めつて？ 僕は知らん。唯だ出無きやアならんからなんだ。それに、僕の出るのはね……」、彼は止まつた。「僕の出るのはね、僕が此所でやつて居る生活、この生活が——僕の趣味に合は無いからなんだ」

(六)

次の室で女の衣服の戦ぎが聞えた。公爵アンドレエーは自分を覺醒させるかのやうに、はつとした、そして、彼の顔はアンナ・パヴロヴナの客室でのやうな表情になつた。ピエールは長椅子の下へ脚を落とした。公爵夫人が入つて来た。夫人は長上衣を脱いで了つて、それと同じやうに鮮やかな派手な室内衣を着て居た。公爵アンドレエーは起つて、丁寧に夫人に對して椅子を据ゑた。

「何故でせう、私不思議でなら無いわ」と、忙がしさうにそ／＼と低い椅子に腰を落ち着けながら、

例の如く佛蘭西語で云ひ初めて、「何だつてアンネットが結婚し無いで居るんでせう。彼の人に結婚し無いなんて貴下方殿方は何て間拔なんでせうね。御免なさいませよ、でも、貴下方には眞個に女を見る眼が寸毫も無いことよ。何て議論家なんでせう、貴下は、ピエールさん」

「今も尙且、貴下の旦那と議論を爲て居る所なんです、僕にやア、何だつて貴下の旦那が戦争に出たがらのか、それが解かりません」、ピエールは、若い女に對する若い男の態度には極く普通な氣取た所などは少しも無しに、公爵夫人に話し掛けて、斯う云つた。

公爵夫人は戦慄を爲た。明かに、ピエールの言語は急所に觸れた。

「え、それは私の云つて居る所なんです」と、夫人は云つて、「私には解かりませんわ、何だつて男は戦争無しに暮らせ無いんでせうか、全く解かりませんわ。われ／＼女がさういふ事を好か無いのは何ういふものなんでせうね？ さア、貴下裁判してくださいませよ。私は良人が伯父の副官で、眞個に立派な位地に居ることを、始終良人に左様云つて居るんですよ。良人は何處でも善く知られて居ります、誰にでも認められて居るんですよ。先日もアブラアキシン家で、私は、或る婦人が「では、あれが名高い公爵アンドレエーなの？ まア」と、尋いて居るのを聞いたんです」と、夫人は笑つた。「良人は何處でも左様いふ風に扱はれるのよ。副官長になるのは眞個に譯け無しなんですわ。陛下が良人に眞個に御懇篤な仰せがあつたぢやア有りませんの。アンネットと私とで以てさうするのは眞個に譯の無い事だと何時も云ひ／＼して居るんですよ。貴下何う思つて？」

ピエールは公爵アンドレエーを見た、友はその問題を好ま無いと見て取つたので、返答を爲無かつた。

「何時出發するね」と、彼は尋いた。

「あゝ、その出發のことなんぞ私に云つては厭よ、それを云つては厭ですよ。他人の話すのを聞くのだから堪まら無いんですよ」、公爵夫人は、夜會でイボリトと話したと丁度同じやうな浮はつた剽軽な調子、ビエールが家族の一人であつたやうな夫人自身の家の團圓には全然適合は無い調子で、然様云つた。「私に取つて眞個に貴い關係が悉皆切れてしまふに違ひ無いと思はれた今晚……それに、ねえ、アンドレーエ？」夫人は夫に興味ありけな胸を爲た。「私心配だわ、私心配だわ」と、肩をビク／＼させながら、囁いた。夫は、その間に自分とビエールの外に人がも一人居るのに初めて氣が付いて驚いたかのやうに夫人を見た、そして、冷々とした會釋で、妻に尋ねの言語を掛けた。

「何が心配なのかね、リザ？。私には解から無いんだが」

「男つてもものは皆何て斯う自我主義者なんでせうね、男は皆、皆自我主義者なんだわ。自分一人の考から、自分一人の氣まぐれから、何の理由は無しに、良人は私を振り捨て、田舎へ私一人閉ぢ込めて了ふんですよ」

「父上様と妹と一緒にんだぜ、おい」と、公爵アンドレーエは平然と云つた。

「お友達が無いんですよ、尙且同なじことよ……それで、私の心配は寸毫も察して下さら無いんだもの。夫人の調子は今喧嘩腰になつた、上唇が上がつて、何時もの嬉れしさうな表情では無く、野生の獸、栗鼠のやうな顔付に爲つた。夫人は、ビエールの居る前で、自分のことを云ふのは禮儀で無いと感じたかのやうに、言葉を止めて了つた、その辯眞個の所はビエールが居るからこそ、其様なことを云ひ出すやうになつたのだ。」

「何が心配なのか、尙且私には解からんね」と、公爵アンドレーエは、妻の顔から眼を離さずに、考へ考へ

へ云つた。公爵夫人は、はつと赤くなつて、爲方無ささうに手を振つた。

「いゝえ、アンドレーエ、貴下はまア變つたことねえ、まア變つちまつたことねえ」

「醫者がお前は成るべく早く眠むやうにしろと云つたぢやア無いか」と、公爵アンドレーエは云つて「お前最早眠る時間だぜ」

公爵夫人は何にも云は無かつた、乍ち柔毛のある短い唇が慄るへだした、公爵アンドレーエは起ち上がつて、肩を揺りながら、部屋のなかを行つたり來たりした。

ビエールは如何にも無邪氣な取り繕はぬ驚き顔で、眼鏡越しに、公爵から夫人へと見渡した、そして、自分も起ち上がらうとするかのやうに、そは／＼と身動をさせたが、やがて、思ひ直した。

「ビエールさんが居たつて、私何でも無いことよ」と、小さい公爵夫人は不意に云つた、可愛らしい顔がべそを掻くやうな澁面に歪められた。「私は、アンドレーエ、最早餘つ程前から貴下に、貴下が此様な變はつちまつた譯を聞かう／＼と思つて居たんですわ。私が貴下に何んなことを爲しました？ 貴下は戦争に出ておしまひなされる、私のことなんか何とも思つてくださら無いのね。何故なんですよ」

「リザ」と、公爵アンドレーエはさう云つただけであつた、が、その一語のうちには、頼みもあれば、威嚇もあり、尙それよりも強く、夫人はさういふことを言つたのを自分で後悔する時が必然來るぞと言ひ聞かせ、心持が、明らかに含まれて居た、けれども、夫人は口ばやに言語を續けた。

「貴下は私を病人か小兒かなんぞのやうに扱ふのねえ。私は全然解かつてよ。貴下は六月前は斯様ぢやア無かつたのに」

「リザ、頼むから黙まつて呉れ」と、公爵アンドレーエは、更に強く云つた。

ピエールはこの談話のうちに段々落着いて居られ無くなつて、やがて、起ち上がつて、公爵夫人の傍へ行つた。彼は夫人の涙を見ては堪らへ切れ無くなつた、自分までも泣き度くなつたのであつた。

『左様心配し無いで居らつしやい、公爵夫人。貴女の取越苦勞なんだ、それは……大丈夫、私自身も其様な心持の爲たことも有ります……それは……で……あ、御免なさい、他人が出る幕ぢやア無かつた……あ、心配しちやアいけません……左様なら』

公爵アンドレエーはピエールの手を捉まへて、止めた。

『いや、もう少し居て呉れ給へ、ピエール。公爵夫人は親切なんだ、僕が君と愉快に一晚送くるのを邪魔しやうなど、決して思ひはし無いわ』

『あ、自分のことばかり考へて居るのねえ』と、口惜し涙を堰き止めやうとせず、公爵夫人は、聲を高くして云つた。

『リザ』と、公爵アンドレエーは、最早勘忍し切れ無くなつたことを見せるやうな高さに聲を揚げて、素氣無く云つた。

乍ち、公爵夫人の可愛らしい小さい顔に今まで出て居た怒つて栗鼠のやうな表情が、同情を喚び起すやうな恐怖の人を引き付ける顔付に變つた。可愛らしい眼で眉の下から夫の顔を盗むやうに見た夫人の顔には、犬が、悪るい事を爲たと自分でも思つて後尾をおづく、と然かし速くチョコロ、振る時のやうな臆病な詫びるやうな様子が出た。

『まア、まア』と、公爵夫人は呟いた、そして、片手で長上衣を掛けて、夫の所へ行つて、額に接吻した。

『お休み、リザ』と、公爵アンドレエーは云つて、起ち上り、宛然他人にでも爲るかのやうに、丁寧に夫

人の手に接吻した。

友同士は黙つて居た。何方からも話を始め無かつた。ピエールは公爵アンドレエーを見た。公爵アンドレエーは小さい手で額を擦すつた。

『行つて、晩食にしよう』と、公爵は溜息して云つて、起ち上つて、そして、戸口へ行つた。

二人は、新しい雅致のある道具を十分に備へてある食堂へ行つた。口拭布から銀器、陶器、硝子器などに至るあるゆる物が、新婚の夫婦の家の道具に見られる新らしさのみの特異な外觀を表はして居た。晩食の真中で、公爵アンドレエーは、腕に身を支へて、長いこと何物かを心に持て居て、急にそれを口へ出す決心を爲た人のやうな態度で、ピエールがその友達の様子ではそれ迄に決して見たことも無いやうな神経的な焦ら立つた表情で話し始めた。

『決して、決して結婚しちやアいかんぜ、君、僕の忠告はこれだ、君がやることの能きことを悉皆爲悉して了まつたといふことを事實上で確に認めるまでは、そして又、君が擇んだ女を愛し無くなるまでは、君がその女を瞭然と見ることが能きるまでは、決して結婚してはいかん、さうで無いと、取り返しの付か無い残酷な失策をやるものなんだ。年を取つて了まつて、何の役にも立た無くなつてから結婚し給へ……。さうで無いと、君のなかにある善い高尚なものは悉皆残らず駄目に爲つて了まふだらう。さういふ物が悉皆下ら無い事の爲にチビく、使ひ耗されて無くなつて了まふだらう。左様なんだ、左様なんだ、左様なんだ。左様なに吃驚して僕の顔を見無くつても宜いよ。君が前途に何か希望を持つて居るとすれば、君に取つては最早萬事休したことを一歩毎に君は感じるだらう、其所では君が官中の従僕や愚物なんかと同列に立た無ければ』

ならんやうな客室の外は、何處へ向ふ道も塞がつて了つたことを感じるだらう。……で、それは何故なんだ」

……公爵は力強い手の振り方を爲た。
 ピエールは眼鏡を外づした、すると、顔が變つて、又一層人の好きやうに見えたのだが、彼は吃驚した態で、友の顔を見た。「妻は」と、公爵アンドレーエは重ねて云つた、「非常に善い女なんだ。體面を潰ぶされる心配の斷じて無い、世間にさうザラには無い女の一人なんだ、けれども、あゝ、結婚し無い昔に歸れるなら何様な犠牲だつた僕は拂はうと思ふね。僕が斯様なことを話すのは君が最初で又君つ限りなんだ、僕は君が好きなんだからね」

斯う云つた時の公爵アンドレーエは、アンナ・バアヴロヴナの客室で安樂椅子にダラリと掛けて、眼を半眠りにして、齒の間から濾し出すやうに佛蘭西語を使つたボルコオンスキイとは尙一層別な人に見えた。干涸びた顔の筋肉が悉く神経的な興奮でビリ／＼震へた、前には光も無く生命も無いやうであつた眼が、今は十分な生々した光で煌めいた。平常は勢の無い男だけに、斯ういふ病的に燥ら立つた場合には並外れて勢が烈しく見えるのであるらしかつた。

「何故僕が斯う云ふのか、それは君には解からんだらう」と、彼は續けて、「おい、人一生の物語全體がその裡に籠つて居るんだぜ。君はボナバルトと彼の功業の話を爲たが、彼は斯う云つた、けれども、ピエールはボナバルトのことは何も云ひはし無かつたのだ、君はボナバルトのことを云つたが、彼の目的を眼がけて真直に一步步々向上に路をたどつて居た時のボナバルトは何の羈絆も持つて居無かつた、彼の眼中には目的の外何物も無かつた、で、彼はその目的に達したんだ。けれども、女で縛ばられて見給へ、宛然と繋がれた囚人のやうに、君の自由は悉皆無くなる。君の持つて居るあらゆる希望、あらゆる力は君の邪魔になつて、

後悔で君を苛責むばかりなんだ。客室、無駄話、舞踏、虚榮、輕佻——それが僕の脱出することの能き無い魔法の圈なんだ。僕は今戦争に出て行かうと爲て居る、それは未曾有の大戦なんだ、それで、僕はといふと、何にも知ら無いんだ、僕は何の役にも立たない人間なんだ。僕は極く人附の好いと同時に皮肉なんだ、公爵アンドレーエは斯う言語を續け、「で、アンナ・バアヴロヴナの所では、誰も彼も僕の話面白がるんだ。所で、僕の妻の生活には缺くことの能き無いこの空馬鹿どもの交際社會、それから、彼様いふ女ども……。彼様いふ所謂交際社會の女どもが何様なものか知つて見給へ、それこそ實に、で、尤も、それは女は大抵さうなんだがね。僕の親父の考は道理だ。自我主義、虚榮、愚劣、何事に於てもこせ／＼して居ること——それが、正體の表はれる時の女なんだ。交際社會での彼等を見て、人は彼等には何物かがあるやうな氣がする、けれども、彼等には何も無い、何も無い、何も無いんだ。いや、結婚しちやアいかん、君、結婚しちやアいかんよ、公爵アンドレーエは斯う結論した。
 「僕は無茶だと思ふね」と、ピエールは云つて、「君、君が自分を失敗だと思ひ、君の生涯が破船だと思ふのは。君は何でも持つて居るし、君は將來に於てもあらゆる物を持つて居るぢやア無いか。それで居て、君は……」

ピエールは「何故君は」とは云は無かつた、が、彼の調子は、彼が何れ程その友を重んじて居たか、その友の將來に就て何れ程期待して居たかを表はした。
 「何うして彼様なことが云へるのだらう、ピエールは斯う思つた。
 ピエールは公爵アンドレーエを何の點に於ても完全である人の模範だと思つて居た、それは、公爵アンドレーエが、ピエールに缺けて居たさま／＼な長所の丁度その結合、意志の力とでも云つたら先づ近い意味に

ならうかと思はれるさういふ結合を、最高の度合に於て持つて居たからであつた。ピエールは何時も、何んな種類の人間に對しても何處までも平然として應對する公爵アンドレーエの能力、その異常な記憶力、その該博な知識、(公爵は、何でも読んで居た、何でも知つて居た、何物に就ても何等かの意見を持つて居た)それから、取り分け、仕事や學問に對する公爵の力量に驚嘆して居た。若し、ピエールにして、空想に耽つたり、哲理を持ち出し勝であつたりする(ピエール自身は左様いふことが極く好きであつた)さういふ力が公爵アンドレーエに缺けて居ることに度々氣が付いたに於て、彼はそれを缺點とはせず、反つて強所と思つて居た。極く暖かな、友情の厚い、率直な間柄でも、丁度、車輪を滑らかに廻はらせるには油がいるやうに、世辭か、賞讃かがあるものなのだ。

「僕は萬事休した人間なんだ」と、公爵アンドレーエは云つて、「自分のことを何故云ふんだ。君のことを話さうぢや無いか」彼は、一寸と黙まつて居た後で、自ら慰められたその考に對して微笑みながら、斯う云つた。その微笑は直ぐにピエールの顔から反射した。

「いや、僕のこと話すことが何があるものか」と、呑氣な、嬉しさうな微笑に顔を緩ませながら、ピエールは云つた。「僕は何だ。私生兒なんだ」で、彼は乍ち顔を眞赤にした。これを云ふのが彼に取つては非常に思ひ切つたことであつたらしかつた。「名も無ければ、財産も無し……で、畢竟、實際……」彼は云ひ切つて了まは無かつた。「その代り、僕は自由なんだ、それで、満足して居る。唯だ、何をやり出したものなのか寸毫も分から無いんだ。本氣に君の意見を聞いて見度かつたんだ」

公爵アンドレーエは親切な眼付でピエールを見た。が、その眼付は親切で親しげではありながら、それでも尙、公爵自身がピエールより優勝な位置に居るといふ自覺がその眼のうちに籠もつて居た。

「君はわれ／＼の交際社會ぢうでの唯だ一人の生きた人間なんだから全くその爲に、僕の好きな人なんだ君は仕合せだ。君の氣の向いたことを何でも擇み給へ、何れも同なじなんだ。君は何時でも大丈夫だらう、けれども、こゝに一つ面白く無い事がある、クラアギンの連中と一緒に今やうな生活をやることは廢しちまひ給へ。君に取つて決して善いことぢや無いよ、彼様いふ放埒な生活、散財、などは悉皆……」

「爲方が無からうぢや無いか、ねえ君」と、ピエールは肩を揺つて「女、ねえ君、女なんだ」

「解からんね」と、アンドレーエは答へた。「身分のある婦人、それは別なんだ、けれども、クラアギンの女、女と酒、僕には何うも解から無いなア」

ピエールは公爵ヴァシイリ・クラアギンの家に宿まつて居た、で、其所の子息のアナトオル、即ち、締まらせる爲めに公爵アンドレーエの妹を配せやうといふ話の持ちあがつて居た子息の放埒な生活にピエールも誘ひ込まれて居たのであつた。

「ねえ、君」と、旨い考が思ひ掛け無く心に浮かんだかのやうに、ピエールは云つて、「眞實なんだがね、僕は、最早餘程前から左様考へて居たんだ。今のやうな生活を爲て居たんぢやア、僕は何の決心も能きず、又物をチャンと考へることも能き無いんだ。頭は痛む、錢は無くなつて了まふんだ。奴今夜僕を誘つたんだ、だが、僕は斷じて行か無い」

「行くことを思ひ切ることを君の名譽に掛けて誓つて呉れ給へ」
「名譽に掛けて誓つた」

ビエールが友の家を出たのは、一時を過ぎて居た。雲の無い夜、彼得堡の特色である夏の夜であつた。ビエールは家へ歸る積りで、借馬車に乗つた。家へ近くなればなる程、夕方が朝早くかと云つた方が宜い位の此様な夜寢床へ入ることは到底能き無いといふ氣がますます募るのであつた。人の居無い街路をすつと遠くまで見渡せるだけの明るさであつた。路々、ビエールは、何時もの賭博を爲る連中が悉皆その晩若クラアギンの家へ揃ふ筈であつたことを憶ひ出した、其所では、賭博がしまふと、大抵何時でも飲み競が始まつて、その果はビエールの好きな慰みの一つまで行つてしまふのであつた。

「クラアギンの所へ行つたら面白からうなア」と、彼は思つた。が、直ぐに、最早決して行か無いと公爵アンドレーエーに約束したことを憶ひ出した。

けれども、所謂の弱い品性の人間の常で、彼は直ぐに、殆ど習慣になつてしまつて居た左様いふ放埒の生活をもう唯つた一遍味はひ度いといふ居ても立つても居られ無いやうな熱烈な欲望に打ち勝たれてしまつて、到頭行かうと決心した。それに、彼は乍ち斯ういふことが胸に浮んで来た、それは、彼はアンドレーエーに約束する前に公爵アナトオルに行くといふ約束を爲したのだから、アンドレーエーとの約束は無効のものだといふのであつた。果は、彼は、總べて左様いふ種類の約束は單に關係的の性質のもので、動かし難い意義といふやうなものを決して持つて居る譯では無く、更に又、明日になつたら、自分が死ぬかも知れ無いとか、或は、名譽と不名譽との間の區別が無くなつてしまふかも知れ無いといふことなどを考へに入れ、ば、殊に、左様なのだと思ひ廻ぐらした、一體ビエールには斯ういふ考が度々浮んで来て、それが爲に、彼の決心や所期などが悉皆全然打ち消されてしまふのであつた。彼はアナトオルの宿へと向かつた。

アナトオルの住んで居た近衛騎兵の兵營のなかの大きい家の昇降段まで乗り付けて、ビエールは、燈光の

附いて居た昇降段から階段を駆け上がり、開いて居た戸口から入つて行つた。控へ室には誰も居無かつた、空き堀、外套、靴などが幾つもゴチャ／＼に横たはつて居た、酒類の強い香がして居た、遠くの方で話し聲と叫聲が聞えた。

骨牌の勝負も、晩食も終まつたのだが、連中は未だ別れ無かつた。ビエールは擲り付けるやうに外套を脱ぎ捨て、取つ着の部屋へ入つた、其所には、晩食の残物があつて、一人の従僕が、誰も見ては居無いと思つて、竊然半分飲みさしの杯を飲み干して居た、三番目の部屋では大笑ひの聲、喚めいて居る聞き慣れた聲々、熊の唸る聲がして居た。若い男が八人開いた窓の所で事ありけな顔で集まつて居た。もう三人は熊の子にからかつて居て、そのうちの一人が鎖でそれを引摺つて他の者を威かして居た。

「俺はステイヴンスに百賭けるぞ」と、一人が叫んだ。

「何にもつかまら無いやうにさせ無くつちやア」と、も一人が喚いた。

「俺はドロオホフの方だ」と、又今一人が叫んだ。「賭を始めろ、クラアギン」

「おい、ミシカを打捨れよ、賭をやりだしたんだから」

「一遍にだぞ、で無きやア賭は無効になるんだぞ」と、又一人が叫んだ。

「ヤコフ、壘を呉れ、おいヤコフ」と、アナトオル自身が叫んだ、背の高い奇麗な男で、胸の所で開けた薄い襯衣一枚で、部屋の中央に立つて居た。「待て、諸君。ペツルウシヤが来た、俺の好きな」と、彼はビエールに振り向いた。

酔拂ひの喚きのなかで素面のやうに見えるので殊に眼に付く中背の、鋭い碧い眼の男が、窓から叫んだ、「此所へ来いよ。俺が賭の説明を爲てやるから」。これがドロオホフであつた、セメエノフ聯隊の將校で、賭

博と決闘が上手なので名高く、今はアナトオルと同じ家に居るのであつた。ビエールは莞爾して、面白さうに四邊を見廻した。

「解から無いね。一體何ういふんだい」

「少時待て、まだ酔つて居無い。壘を此所へ」と、アナトオルは云つた、そして、卓子から杯を取つて、ビエールの所へ行つた。

「何より先きに、飲ま無きやアいかん」

ビエールは、又窓の所へ集つて来て二人の談話を聞いて居た酔漢連中を肩の下から見、彼等の話を聞きながら、續けざまに杯を重ねた。アナトオルはビエールの杯に酒を注ぎ續け、そして、ドロオホフが其所に宿まつて居た英吉利の海軍士官のステイヴンスとの賭で、三階の窓に腰掛け、兩脚とも外へぶら下げたまゝで、ラムを一壘飲むのだと、ビエールに話して聞かせた。

「さア、これで一壘おつもりだ」と、アナトオルはビエールに最後の杯を突き付けながら、「飲んぢまは無ければ、放さんぞ」

「いや、最早いらん」と、アナトオルを突き退けて、ビエールは窓の所へ行つた。

ドロオホフは、英吉利人の手を捉まへて、重にアナトオルとビエールに話し掛けながら、賭の條件を瞭然と説明して居た。

ドロオホフは、髪を縮れた、涼しい碧い眼の、中背の男であつた。二十五歳であつた。總べての歩兵將校のやうに、口髭を生やして居無かつた、で、彼の顔の最も著しい特徴であつた口が隠されて居無かつた。その口の線は非常に華奢に刻まれて居た。上唇は堅固した下唇の上に鋭い楔形に強く閉ぢて居た、そして、

兩隅で口は何時も、一つの側に一つ宛、二つの微笑を形造つて居た、で、さういふのが一緒になつて、殊に彼の凜然とした、人を人とも思はぬやうな、食へ無い眼付を一緒にすると、誰でも彼の顔に氣が付かずに居ることは到底能き無いやうな印象を他人に起こさせるのであつた。

ドロオホフは金錢の無い、引援の無い男であつた。それでも、アナトオルは年十萬を費うのであつたけれども、ドロオホフはそれと一緒に暮らしながら自分の位地を實に巧く整へて行つて、アナトオルから尊敬せられたのみで無く、二人を知つて居る總べての人からアナトオルより以上の尊敬を得るまでになつた。ドロオホフは何な種類の勝負事でもやつて、大抵何時でも勝つた。何れほど飲んでも、彼の頭は明晰を失なはなかつた。クラアギン、ドロオホフ、二人とも其時分彼得堡の常習的放埒社會の立て物であつた。

ラムの壘が持つて來られた、窓の外縁に人が坐わるのに邪魔になる窓框は、周圍の紳士の叫びや指圖に少なからず怖ぢ狼狽たらしい二人の従僕の手で壞はされた。

アナトオルは反り返つてノサノと窓の所へ行つた。何か壞はし度くつて堪ら無かつたのだ。従僕を押し退けて、窓框を引張た、けれども、框は外れ無かつた。彼は窓硝子を叩き碎いた。

「さア、君は力が強い」と、彼はビエールを顧みた。ビエールは十字になつて居る木を捉まへて、ウンと引き、メリ／＼と櫛材の框を捻ぢ外した。

「悉皆取つちまへ、で無いと、俺がつかまつてると思ふから」と、ドロオホフが云つた。

「英吉利人の奴め大口を叩いて居やアがる……素的な藝當だな……え、と、アナトオルが云つた。

「素的だ」と、ビエールは云つて、壘を手にとって窓へ上つたドロオホフを見た、其所からは、空の明るみ、朝と夕方が混り合ふ明るみが見えるのであつた。ドロオホフは、手にラムの壘を握つて、窓縁へ跳びあがつ

た。「皆聞け」と、窓縁に立つて、眞正面に部屋に向いて、彼は叫んだ。皆黙まつた。

「俺は賭に應じた」「ドロオホフは英吉利人に解かるやうにと、拙いながら佛蘭西語で云つた)……「俺は五十帝國貨の賭を爲したんだ——百に増す氣無いですか」と、彼は、英吉利人に向いて、云ひ足した。

「いゝえ、五十です」と、英吉利人は云つた。

「宜しい、五十帝國貨で、俺はラム一壘口から一遍も離さずに飲み干してしまふんだ。窓の外側に坐つてこれを飲むんだ、此の所で「彼は身體を屈めて、窓の外の壁の傾斜に突き出して居る所を指し爲た)……「何にもつかまらずに……宜しいか」

「宜しい」と、英吉利人が云つた。

アナトオルは英吉利人に振り向き、上衣のボタンの所を捉まへて、彼を見下して、(英吉利人は小男であつた)英吉利語で賭の條件を繰返へし始めた。

「寸時待て」と、注意を呼ぶ爲めに窓を堰で叩いて、ドロオホフが云つた。「寸時待て、クラアギン、お聞き、誰でも俺と同じ事をやるものがあれば、俺はそれに百帝國貨拂つて遣る。皆解かつたか」

英吉利人はその賭に應ずる積りなのか何うなのか、何方とも付かず唯だ頷いた。

アナトオルは尙且英吉利人を放さ無かつた、そして、後者が、頷づいて、悉皆解つたと知らせたに拘はらず、ドロオホフの言葉を英吉利語に譯して聞かせた。その晩骨牌に負け續けて居た瘦せた若い騎兵將校が窓へ登ほつて行つて、頭を突き出して、下を見た。

「おー、……おー……おー……」と、彼は窓から下の敷石を眺めて、叫んだ。

「黙れ」と、ドロオホフは叫んだ、そして、その將校を突き飛ばしたので、彼は自分の拍車に墮づいて、

部屋へ無態に飛んで歸つた。手近な所にあるやうにと、窓縁に堰を置いて、ドロオホフは徐々と氣を付けて窓へと登つた。兩脚を外へ下ろし、窓の出張りの上へ兩手を擴げて、身體の位地を試めし、坐つて、手放しになり、右へ少し動き、それから、又左へ少し寄り、で、堰を取つた。アナトオルが蠟燭を二本取つて来て、窓の出張りに置いたので、其所は非常に明るかつた。ドロオホフの白襯衣の背部と縮毛の頭が兩側から照らされた、衆皆窓の周圍に群がった。英吉利人は正面に立つた。ピエールは微笑んで、何も云は無かつた。連中の一人、中での少し年上の男が、不意に、怖ぢけた怒つた顔で前へ出て、ドロオホフの襯衣を攫まうと爲た。

「諸君、これは餘まり馬鹿なことぢやア無いか、この男は死んぢまふ」と、他のものより正氣なその男が云つた。

アナトオルはその男を止めた。

「觸はつちやアいかん、驚ろかすと、落ちるかも知れ無いちやア無いか、えゝ……さうすれば何うする、おこ」

ドロオホフは振り向き、身體の平衡を取つて、そして、再兩手を廣げた。

「誰でも此度又俺をつかまへる奴があれば」と、緊切結んだ薄い唇の間から言語を一つく落とすやうにして、云つて、「此所から投げ落しちまふぞ。さア……」

「さア」と、云つて、彼は再向き直り、兩手を落して、堰を取り、唇に當てがつて、頭を後へ曲け、平衡を取る爲めに放した片手を上へ揚げた。破れた硝子を掃除して居た従僕は、身體を屈めたまゝで立ち止まつて、窓とドロオホフの背部を見詰めて居た。アナトオルは眼を能きるだけ見張つて、眞直に立つた。英

吉利人は側の方から、口を緊然と結んで、見詰て居た。止めやうと爲た男は部室の隅へ引込んで、壁へ顔を向けて、長椅子に臥た。ビエールは顔を手で隠した、恐怖にぞけ立つた顔でありながら、尙且遺すれたやうに微笑が其所にさまよつて居た。誰も聲を出す者は無かつた。ビエールは眼から手を取つた、ドロオホフは依然同じ位地に坐わつて居た、唯だ、頭が縮れた髪が襯衣の襟に觸る程まで仰向けられて居て、壁を持つた手が、如何にも骨が折れるらしく振へながら、だんく高くあがつて居た。確に壁は殆ど空になつて居た、で、頭を仰向け、ますます高く傾むけられたのであつた。「何故此様なに長いんだらう」と、ビエールは思つた。半時間の餘も経つたやうな氣が爲たのだ、不意に、ドロオホフは背部をグツと反り返らせた、そして、腕が神経的に振へた、彼は傾斜の出張りに坐わつて居たのだから、この身體の動きは、平衡を失はせるに十分であつた。實際彼は身體がずれたで、平衡を回復しようとする骨折るものだから、全身、腕も頭も、尙一層烈しく振へた。片手が窓の出張りへ攫まりさうに上がつた、けれども、再落ちた。ビエールは又眼を閉ぶつた、そして、決してもう何時までも開くまいと自ら誓つた。乍ち、周圍に全體のさめきが起つたのに氣が付いた。ヒヨイと見あけると、ドロオホフは窓の出張りに立つて居た、彼の顔は蒼かつたが、如何にも愉快らしかつた。

「空だ」

英吉利人に壁を擲ると、彼はそれを巧く受け取つた。ドロオホフは窓から跳び下りた。彼はラムの臭氣がブンくした。

「豪いぞ『萬歳』真個に賭らしい賭だな『貴様は恐ろしい奴だな』など、八方から叫聲が來た。

英吉利人は錢入れを取り出し。金錢を數へて出した。ドロオホフは顔を擧めて、何とも云は無かつた。ビ

エールは窓へ飛んで行つた。

「諸君。誰か俺と賭を爲る者は無いか。俺は同じ事をやるんだ」と、彼は不意に叫んだ。「なに、賭なんぞ何うでも宜い、おゝい、壁を持つて來るやうにさう云つて呉れ。俺はやるぞ……持つて來させて呉れ」

「やらせろ、やらせろ」と、微笑みながらドロオホフが云つた。

「おい、貴様氣が狂つたか。誰も貴様にはやらせんど。おい、貴様は階下へ行くにだつて眼が眩るぢやア無いか」と、幾人か制めた。

「俺は飲んだい、ラムの壺を呉れ」と、酔拂つた斷乎とした手付で卓子を叩いて、ビエールはたけつた、そして窓へと登ほつた。皆は彼の腕を攫んだ、けれども、彼の強さは非常で、傍へ寄つた者は誰彼無しに遠くの方へ突き飛ばされて了まふのであつた。

「いゝや、其様な事ぢやア奴は扱かへ無い」と、アナトオルは云つて「少し待て、俺が欺ましちまうから……。おゝい、俺が賭を行くよ、だが、明日にしよう、今夜は衆皆でこれから行く所があるんだ、それは……」

「うん、一緒に來い」と、ビエールは叫んで「一緒に來い……それから、ミシカも連れてかう」……。で彼は、熊を捉まへて、それを抱き上げて、それと一緒に部室のなかをワルツを踊つて廻りだした。

(一八)

公爵ヴァシイリは、アンナ・バヴロヴナの夜會で一人子息のボリイスのことを彼に頼んで公爵夫人ヅルベエツコイに對して爲た約束を違がへ無かつた。ボリイスの件は皇帝の前に置かれた、で、餘程異例ではあつ

だが、彼は近衛のセメエノフ聯隊の少尉の命を受けた。けれども、クツウゾフの副官、若くはアッタッセエの位地は、アンナ・ミハイロヴナのあらゆる骨折りと泣き付きに拘はらず、ポリニスに得てやる事ができ無かつた。アンナ・バアヴロヴナの家の集會から間も無く、アンナ・ミハイロヴナは莫斯科の金持の親類ロストオフの所へ歸つて行つた。ミハイロヴナが莫斯科に居る時は何時でもその家に泊るのであつた。それから、ホンの此頃普通師團の聯隊に入つたばかりで、今直ぐ少尉として近衛に移つされた秘藏子のボリンカが子供の時分から教育され、そして、何年も暮らして居たのは、その親類の所であつた。近衛は最早八月の十日に彼得堡を出發した、で、支度の都合で莫斯科に残つて居たミハイロヴナの子息は、ラヂイヴィロフへの路で追つ付く筈であつた。

ロストオフ家は、母親と若い娘、兩方共ナタアリヤといふの、祝ひ日をやつて居た。朝からずつと續いて、六頭馬車が幾つも引切無しに、莫斯科ぢうに知れ渡つて居たボヴァルスキーの伯爵夫人ロストオフの大きな家へ來たり去つたりした。伯爵夫人と奇麗な上の娘は、その年を老つた方の婦人に祝ひを云ふ爲めに立ち代り入り代り續々詰め掛けた客たちと共に、客室で坐つて居た。

伯爵夫人は顔の東洋だちの、年齢四十五歳の、幾度も産で疲れ切つたさまの陽はな女であつた。起ち居ると話の落着てゆつくりして居るのは、身體の弱い故であつたのだが、それが尊敬を起させる威のある様子を夫人に與へた。公爵夫人アンナ・ミハイロヴナ・ツルベエツコイは、家族の極く心安い友達として、二人と共に坐つて、客に接したり持てなしたりする助を爲て居た。家の若い連中は客に接する仲間にならぬに及ば無いといふので、奥の部屋に居た。伯爵は客を迎へ、戸口まで案内し、衆皆を食事に招いた。「何うも實に有り難う」と、相手が自分より高い位地の人だらうが何うだらうが一向構はず、誰彼無しに、

極く親しい調子で云つて「祝の當人二人は勿論、私に取つては實に有り難いことで。是非食事にお來ください。お來が無くば、私は怒りますぞ。家内一同から呉々もお願ひします。圓々とした刺り付けた機嫌の好い顔の誰に對しても同じな表情と、誰に對しても同じな親しい握手の爲方と、幾度も繰り返す軽い點頭とで、伯爵は斯ういふ言葉を、誰彼無しに何な客にも掛けたのであつた。彼は廣室へ客を送り出すと、直ぐに、まだ客室に居る男か女かの客の所へ引き返した。椅子を前へ動かして、實際社會が好きで、それに慣れ切つた人の風で、坐つて、脚を樂々と開き、膝に手を置き、品格好く身體を揺りながら、或時は露西亞語で、或る時は拙い佛蘭西語を如何にも平氣で使かつて、天氣の豫想、身體の養生の助言などをし、それから、又起ちあがり、大分飽きては居るが然し自分の義務は何處までも盡くすと決心した人の風で、頭の禿の上へ白髪を手で梳き掛けながら、歸る客を送り出して行つて、又前のやうに食事は是非來て呉れと頼むのであつた。時には、廣室からの歸りがけに、貯藏室と料理頭の部屋を通つて、八十人前の食卓の支度が出来かゝつて居る大理石の床の大きい部屋へ行つた、そして、銀器や、陶器を持つて來たり、食卓を列らべたり、ガラスカス織の食卓掛を廣げたりして居る給仕達を見て、その家で執事の務を爲て居るデミツリ・ヴァシリ・エヴィーチといふ善い所生の若者を傍へ呼んで、「さア、ミイテンカ、手落の無いやうにやつて呉れよ。うん、左様だ、左様だ」と云ひ、それから、大きい食卓の一杯に使はれて居るのを快さうに見廻して、「御馳走が大事なんだからなア。左様だ、左様だ」と、云つた、で、伯爵は満足息をホツと漏しながら再客室へと返るのであつた。

「マリヤ・ルヴゾヴァ・カラアギンとお嬢様」と、伯爵夫人の大きい従僕が客室の入口で、深い濁聲で通じた。伯爵夫人は寸時考へ込んだ、そして、夫の肖像が蓋に付いて居る金の嗅煙草函から一摘取つた。

「お客は最早堪まら無いね」と、夫人は云つて、「でも、此の方だけにはお目に掛からうよ。太く澄ました人なんだもの、ご案内をしてお呉れ」と、夫人は、「最早宜しい、何うにでも止めを刺して呉れ」と、云つても居るやうな元氣の無い調子で云つた。

背の高い、肥つた、ツンとしたやうな態の婦人と、圓い笑顔の娘が袴の戦を高くさせて客室へ歩み込んだ。

「奥様、眞個にお久し振りですわねえ、……可愛さうに、此兒がズツと臥つて了つたものですからね」

「ラズモウフスキイの舞踏會で」——伯爵夫人アブラアキシン——「眞個に嬉しいんですよ」——女の聲が、互に遮り合ひ、袴の戦と、椅子の床を擦る音に混じり合つて、口速にベチャクチャ云つた。それから始つた談話は、それが一寸と途切れるが最期客は直に起あがり、袴を戦がせ、「眞個に嬉しいんですよ、……母親が健康で……それから、伯爵夫人アブラアキシン……」などと、呟やきながら、又同じやうな戦ぎを爲せて、廣室へ出て、外套を引掛けて、馬車へ入る段取りまでのホンの繋ぎにやる種類のものであつた。談話は、市の重な事件の噂であつた、カザリン女皇の時代に男振りの好いので名高かつた大金持の伯爵ベズウホイの病氣と、その老人の庶子で、アンナ・バアヴロヴナの夜會で太い不作法な舉動の有つたピエールの話が出た。「伯爵は眞個にお氣の毒ですわねえ」と、客は云つた。「身體も彼様な油断の無い有様だし、今度は又子息さんの事で心配を爲せられるし、これぢやア彼の方も最早長いことはありませんわ」

「何様な事なんです」、伯爵夫人は客の云つて居るのは何な事だか一向知ら無いと云つたやうな顔付で斯う尋ねたのだが、實は、伯爵ベズウホイの心痛の原因は最早五十度も聞いて居たのだ。

「それと云ふも悉皆現今の教育の爲方から來ることなんですわ。外國へ出すなんて」と、客の婦人は續け

た。「若いのに、彼地で擲りつ放しにされて居たんでしよう、だもんですから、此方へ歸つても、此頃彼得堡で眞個に慄然とするやうな身持になつて了まつて、到頭巡査が付いて、彼市を追ひ拂はれたといふ噂なんですわ」

「眞實なですか」

「悪い友達をこしらへたんですよ」と、公爵夫人アンナ・ミハイロヴナが口を挾れた。「公爵ヴァシイリの子息と……そのピエールと、それから、ドロオホフといふ若者とさう三人で以つて、何とも謂ひやうの無いヒドい事を爲て居たといふ噂なんですよ。で、そのうち二人はその應報を受けたんださうです。ドロオホフは普通の兵卒に貶されて了まひ、ベズウホフの子息は莫斯科へ追放されたと云ひます。アナトオル・クラアギンの方は……父親が何うにか抹み消して了まつたんです。けれども、尙且彼得堡からは出されませんでした」

「へえー、何様なことを爲たんですね」

「全然惡黨なんでしたつて、中でも、ドロオホフが一番」と、客は云つた。「ご存でしよう、彼のチャンとした婦人のマリヤ・イワノヴナ・ドロオホフの子息なんですがねえ、貴女。眞個に呆れ返るぢやアありませんか、三人で何處からか熊を捉まへて來て、馬車のなかへ一緒に乗せて、或る女役者の家へ行く途中だつたさうです。巡査が止めに駆け付けました。すると、その巡査を捉まへて、熊の背部へ縛り着けて、熊をモイカ川へ追ひ込みました、熊は巡査を背負つたなりで泳いだんださうです」

「面白い風だつたらうね、その巡査は」と、伯爵は、可笑さを堪らへ切れずに、叫んだ。

「お、眞個に慄然とする。笑ひごとなもんですかよ、伯爵」

が、さう云つた婦人連自身笑はずには居られ無かつた。

「やうくの事でその可愛さうな巡査は助かつたんです」と、客は續けた。「これが、伯爵キリイル・ヴラディミロヴィチ・ベズウホイの子息の爲る高尚な慰みだといひますんではねえ、客は斯う云ひ足した。」それで居て、良い教育を受けた、なか／＼伶俐な男だと云ふことぢやありませんか。外國教育の結果といふのは先づ斯様なものなんですわ。何れ程金持だつて、此地では誰も交際ふ人は無いでしょうよ。私には紹介しやうと云つた人がありました。私は斷然斷つて了まひましたんですわ、娘が有るんですものね。」

「何うして金持だとおつしやるの」と、伯爵夫人は娘達の方から振り向いて、尋ねた、娘達は直ぐ夫人のそれからの話は聞いて居無いやうな顔をした。「伯爵は庶子ばかりぢやありませんか。何うも……ピエールも庶子ですわ。」

客は手を振つた。「彼の人は左様いふのが随分澤山なんでしよう。」

伯爵夫人アンナ・ミハイロヴナが、自分の知り合ひの多いこと、世間の何様な細かいことでも好く知つて居ることを見せ度いと思つたのらしく、口を挾れた。

「それは斯様なんです」と、意味ありげに、囁くやうに云つた。「伯爵キリイル・ヴラディミロヴィチの評判は誰だつて知ら無いものは有りませんわ……。子供の数は自分でも覚えて居無い程なんですわ、けれど、ピエールは秘藏子だつたんです。」

「彼の老人は眞個に奇麗でしたね」と、伯爵夫人は云つた。「ホンの去年まではねえ。彼様な奇麗な人は私未だ見たことはありませんですよ。」

「此頃は最早全然變つて了まひました」と、アンナ・ミハイロヴナは云つた。「あ、それでねえ」と、

言葉をついで、「財産全部の直接の相續人は、奥様の方の縁で、公爵ヴァシイリなんです、でも、伯爵はピエールが可愛くて堪まら無いんで、その教育に骨を折つたんです、そして、陛下にも書面で願ひを上げたんです……ですもの、若し伯爵が亡くなれば（最早何時左様なるか分から無い程疾いんです、國手ロオレエンが彼得堡から来た位なんですわ）、ですから、その曉は、彼の大身代がピエールの物になるか、公爵ヴァシイリの物になるか、何方になるか、分かつたものぢやありませんわ。四萬の耕奴、何百萬と云つてあるお金なんですもの。公爵ヴァシイリが自分で話したことなんですから、これは眞個なんです。それで、實はキリイル・ヴラディミロヴィチは、私の母方の三番目の従兄なんです、そして、又ボリスの名付親なんですよ、公爵夫人は、さういふ類縁に少しも重きを置いて居無いやうな態度で、斯う云ひ足した。

「公爵ヴァシイリは昨日莫斯科へ着きました。何か事業の視察に來られたんださうですよ」と、客は云つた。

「左様、これは此所だけのお話ですがねえ」と、公爵夫人は云つて、「それはホンの世間で、實は、公爵キリイル・ヴラディミロヴィチが重體だと云ふんで、唯だ公爵に逢ふ爲めに來たんですわね。」

「何にしても、貴女、それは實に面白い惡戯でしたなア」と、伯爵は云つた、で、年取つた婦人には聞え無かつたのを見て、若い方の連中に振り向いた。「その巡査は嚙ぞ面白い態度でしたらうね。實に眼で見るやうだ。」

で、巡査が腕を振つた様子を身振りで見せて、伯爵は、何時も善く喰ひ、又それより尙一層善く飲む人々の笑ふやうに、賑かな濁聲の笑で噴飯して、腹の兩脇を揺すらせた。「其所で、何卒、食事にいらしつてください」と、云つた。

(九)

沈黙が次いだ。伯爵夫人は客を見て、愛想の好い笑顔を見せて居た、けれども、若し客が起ちあがつて、行つて了まつても、別に悪くは思はないといふ事實を隠くさうとは爲て居無かつた。娘は最早長上衣の装をまさぐつて、母親の方を促がすやうに見て居た。と、乍ち、次の室で、二三人の娘や、男の兒の戸口へ駈けて来る音と、突き倒された椅子の床を擦る音がした、と思ふと、十三歳位の女の兒が、短かい綿紗の袴のなかに何物か隠くして、駈け込んで来て、部室の真中でビタリと止まつた。娘は逃げ出した勢に止度を失なつてツイ此所まで、跳び込んで了まつたのらしかつた。と、同時に、戸口に、襟の上に緋の襟飾を巻いた學生と、近衛の若い將校と、十五歳位の娘と、小兒の外衣を着た肥つた薔薇色の頬をした男の兒が現はれた。伯爵は跳びあがつた、そして、身體を右左に揺らせながら、小さい娘の周圍に廣く兩手を廻した。

「やア、來たな」と、伯爵は、笑ひながら叫んだ。「祝ひ日だ、祝ひ日だ」

「お前、今日は平日とは違ひますよ」と、伯爵夫人は、峻しさを装つて、云つた。「貴下、何時でも甘くばかりなさるのね、エリイ、夫は斯う云ひ足した。」

「今日は、お嬢さん、お目出度う」と、客が云つた。「善いお子さんねえ」と、母親に振り向いて、云ひ足した。

黒眼の、大きい口の、その小さい娘は、善い器量では無かつたが、如何にも生々して居た、一生懸命に駈けたので、露出の肩が上下に揺れ喘いで居た、黒い髪が後へゴチャ／＼になつて投げ掛けられて居た。腕は細くて、露出であつた、小さい脚にはレエスで縁取つた股引と爪先ばかりの半靴を穿て居た。娘は今、最早

小兒では無いが、と云つて、未だ若い娘には成り切つて居無いといふその可愛らしい年頃であつたのだ。父親の手から挽き離れて、娘は、母親の所へ駈けて行つた、そして、母親の厳しい言葉は一向耳に止め無かつた態で、母親のレエス付の手巾の裡へ上氣した顔を隠くして、笑ひだした。そして、袴の裡から覗き出して居た人形のことを笑聲で途切れ／＼になる言葉で云つた。

「ねえ……私の人形……ねえ……」で、ナタアシャはその上には何にも云へ無かつた、何でも彼でも可笑しくつて堪まら無かつたのだ。母親の膝に突伏して、恐ろしく高い聲で笑ひだして了まつたので、澄まし切つて居た客さへ誘はれて笑はずには居られ無かつた。

「さア、彼方へおいで、馬鹿々々しい事は彼方でなさいよ」と、母親は、怒つた態を爲て娘を押し退けやうと爲た。「これは二番目の娘で」と、母親は客に云つた。ナタアシャは母親のレエス付きの手巾から少時顔を出して、笑ひの涙の裡から、母親の顔を覗いて、又顔を隠した。

斯ういふ家内の睦ましい様子に感じずには居られ無かつた客は、自分もその裡には加はるのが然るべきことだと思つた。

「ねえ、貴女」と、ナタアシャに話し掛けて、「貴女のミ、を何處から連れて居らしたの？ 貴女のお娘さんなんぞでせう、ねえ」

ナタアシャは、客が自分に話し掛けた、態々小兒らしいことを云つた、見下したやうな調子を好ま無かつた。返答を爲すに、客を嚴づかしい顔付で見詰めた。

そのうちに、若い連中全體、アンナ・ミハイイロヴナの子息の將校のポリリス、伯爵の長男の學生のニコライ、伯爵の姪のソオニヤ、二男の小さいベエティヤが、客室の裡でズラリと列んで、各自の顔に淫れて

居た大騒の可笑しさを、客前では抑へ付けて、チャンとして居やうと骨折つて居る様子であつた。彼等が今の先勢、好く飛び出した奥の間での談話は、客室での市の噂や、天気や、伯爵夫人アブラアキシンなどの下ら無い話より、愈然面白かつたに違ひ無い。彼等は一寸々々顔を見合はせて、噴飯すのを堪らへ兼ねた。

若者二人、學生と將校は、小兒からの朋友で、同年齢であつて、兩方とも奇麗であつた、けれども、互に似た所は寸毫も無かつた。ポリイスは、華奢な整然とした道具立の奇麗な顔に沈着な様子で居る背の高い赤つ毛の若者であつた。ニコライイは、背の高く無い、率直な表情の縮毛の若者であつた。上唇には最早黒い鬚の生て来た徴があり、顔全體が向ふ行きの強いこと、熱烈な性質を表はして居た。彼は客室へ入いつて来るとカツと赤く爲つた。確に何か云ふ事を思ひ付かうと骨折つて居ながら、何にも思ひ付け無つたのだ。ポリイスは、それには引き代へ、直ぐに落着いて了まつて、その……人形のことを平気で面白さうに云つて、鼻が缺け無いうちからそれを知つて居たのだが、それと近附になつた五年以來それが段々年を取つて了まつたことや、頭の鉢が横にバクリと龜裂がして了まつた譯などを話した。彼は其様なことを云ひながら、ナタアシヤを見た。ナタアシヤは、クルツと横を向いて、弟を見た。その弟は先刻から聲に出さ無い可笑しさに震へながら睨めるやうな顔をして居たが到頭堪へ切れ無くなつて居たのであつた。ナタアシヤは跳ねあがつて、小さい迅い脚の續く限りの速さで部室から飛び出して行つた。ポリイスは笑は無かつた。

「出るんですか、母上、え、馬車が入るでせう」と、笑顔に向けて母親に云つた。

「左様ですよ、行つて支度を爲るやうに言ひ付けてください」と、母親も微笑みながら云つた。ポリイスは、徐かに戸口へと歩いて行つて、やがて、ナタアシヤの後を追つた。肥つた男の兒は、遊戯が中途で妨げ

られたのに怒つたかのやうに、憤然と爲つて二人の後を追つて駈け出した。

(十)

若い連中では、伯爵夫人の一番上の娘（これは、妹とは四つ違ひで、最早全然成人のやうに舉動つて居た）と、若い方の女客を除けると、客室には、ニコライイと、伯爵の姪のソオニヤが残つた。ソオニヤは、細つそりした小さい體の棕面女で、優しい眼が長い睫毛で被はれ、濃い黒い毛が頭の周圍に二巻に束ねられ、肌膚の少し褐色が、つたのが、殊に、露出の瘦て居たが、形の好い、筋肉の締まつた腕と頸の所で目立つて居た。體の運動の滑らかなこと、小さい手脚の和かで撓やかなこと、それから、その舉動に何と無くコソコソした處と包ましけな處があるのなどが、直きに奇麗な猫にならうとして居る未だ十分には育つて居無い可愛い仔猫を思ひ寄せさせた。娘は、衆皆の談話に興味を持つて居るやうに見せて、微笑むのが禮儀だと思つたらしかつた。が、ともすれば、その眼が、濃い長い睫毛の下から、直きに軍隊に入らうとして居た從兄の方へ向くのであつた、そして、その眼付には、娘らしい熱烈な非常な敬愛の心持が籠つて居たので、娘の笑顔の意味は少時でも誰をも欺むことは能き無かつた、仔猫は、二人がポリイスとナタアシヤのやうに客室を出られ次第、直ぐに、前よりも一層勢好く飛び跳ねて從兄と遊ばうと思ふばかりに其處に踞まつて居るのだといふことは見え透いて居た。

「左様、貴女」と、老伯爵は、客に話し掛けて、ニコライイを指し、「これの信友のポリイスが今度將校に任命されたですが、伴は好きな友達に置いて行かれるのが厭だといふので、大學も退し、頼る所の無い年寄りの父親を捨て、軍隊に入らうと云ふのです、貴女。けれども、記録局に全然口が出来て居るのですに

なア。何うです豪い友情ぢやアござんせんか」と、伯爵は、尋ねるやうに云つた。

「ですが、戦争がいよゝく始まるといふではございせんか、ねえ」と、客は云つた。

「餘程前から左様云つて居ます」と、伯爵は云つた。「これからも幾度云ふことでせうか、けれども、何時までも唯だそれだけでせうよ。友情ですなア、貴女」と、伯爵は再云つて、「倅は驃騎兵に入らうと爲て居ります」

客は何と云つて宜いか解から無かつたので、唯だ頭を振つた。

「決して友情ぢやアありません」と、ニコライは、カツと上氣せて、何か恥辱になる言ひ掛りを否定するとても云ふやうな態度で答へた。「何で友情なもんですか、唯だ軍隊へ引き付けられるからなんです」

彼は従妹から若い女客へと見廻した、二人とも道理だといふ笑顔を見せた。

「驃騎兵のバアヴログラドスキー聯隊の大佐シウベルトが今晚食事に来て呉れるのです。今賜暇で此方へ來られたのでしてな、歸りに倅を伴れて行つて呉れやうと云ふのですわい。最早何うにも爲方が無い」と、伯爵は肩を揺つて、自分の随分當惑したらしい事柄を戯言のやうな口調で話した。

「僕は前にお話し爲たちやありませんか、父上様」と、子息は云つて「僕を手放すのがお厭なんなら、僕は止しますつて。けれども、僕は軍隊より外では全く駄目な人間なのは自分で善く知つて居るんです。僕は外交官には向か無い、普通の文官も駄目ですよ。自分の感情を偽はることが下手なんです」と、ニコライは、奇麗な若い男の媚を装つて、ソオニヤと若い方の女客とを、幾度もジロリ／＼見た。

ニコライの上眼を釘付けにしたやうな仔猫は、今にも踊りだして、猫の本性を見せさうであつた。

「ま、まア、最早宜い」と、老伯爵は云つて、「何時も直きに激してしまふ。ナポレオンで誰も彼も氣違ひ

だ、悉皆ナポレオンが中尉から皇帝まで登つた経路を夢みて居るのだね。左様さ、又其様なことにでも爲つて貰らへれば、結構だが」と、客の皮肉な笑顔には氣が付かずに、云ひ足した。

年寄り連がナポレオンの話を爲だすと、カラアギン夫人の娘のジュリイは、若いロストオフに振り向いた。

「木曜にアルハアロフさんへ入らつしやら無かつたのは眞個に残念ね。貴下が入らつしやら無いんで私何様に面白く無かつたでせう」と、親しげな笑顔を向けて、娘は云つた。

若者は、その言語が太く嬉しくつて、媚びた笑顔を見せて、椅子を娘の方へ近々と寄せて行つて、そして、自分の我れ知らずの微笑の爲めにソオニヤが嫉妬に胸を強く刺されて、眞赤になりながら無理やりに笑顔を装つて居たのは氣が付かずに、莞爾して居るジュリイとばかり話を爲だした。が、その談話最中に、彼は一寸とソオニヤの方を見た。ソオニヤは彼に向いて宛然攫み掛りでも爲さうな顔付を爲た、そして、唇にはそれでも無理に微笑を持たせながら、涙を抑さへ兼ねた様子で、起ちあがつて、部屋を出て行つた。ニコライの生氣は全然消えた。談話の最初の切れ目を待ち兼ねた態度で、如何にも困じた顔で、ソオニヤを探がしにと部屋を出た。

「若いうちは誰しも胸裡を包め無いものさねえ」と、アンナ・ミハイロヴナは、ニコライの後姿を指さして、云つて、「従兄妹同士、油断がならぬ近い同士」と、(佛蘭西語で)云ひ足した。

「左様ですよ」と、若い連中が客室へ持つて來た陽氣な明るさが消えて了まつた時に、伯爵夫人が云つた。夫人は、誰から持ち出されたのでも無いが、唯だ何時も自分の胸にあつた問題に自答するとてもいふ態度で、「若い者を仕合せにしてやらうといふには、一通りの苦痛や氣苦勞ではありませんね。今でさへ、若い者の

ことぢやア嬉しいと思ふよりかハラ／＼思ふことの方が全く多いんですものねえ。何時もハラ／＼してばかり居りますんですよ。別けても、此頃のやうに男の子にも女の子にもホントに油断も隙もならぬ世の中でしてはねえ」

「全く仕付け次第のものなんですよ」と、客は云つた。

「え、仰しやる通りです」と、伯爵夫人は續けた。「今までの所では、有り難いことに、私は家の子供の眞個の友達になつて、何様な事でも私に打明けて呉れ無きことは無いんです」伯爵夫人は、自分の知らぬ秘密は自分の子供には無いと思つて居る世間の多くの親の考慮違ひを又自分も繰り返して、斯う云つた。「子供は何時にも私に一番に打明けますわ、で、ニコライも、向ふ行きの強い性質ですもの、何か悪戯をするかも知れませんが、(男の子は矢張男の子ですからねえ)、それにしても、お話しの彼得堡の若い方々のやうなことは無いと思つて居りますよ」

「うん、素的な子供だ、素的な子供だ」と伯爵は頷いた。伯爵は面倒な問題に遭遇ふと何時でも唯だ素的だと断じて解決を付けてしまふ人なのであつた。「何うです、驃騎兵に爲らうと思ふなんて。けれども、何う爲るものですか、貴女」

「年下のお嬢様は眞個に可愛いお子ねえ」と、客は云つた。「飛んだ陽氣な」

「え、左様です」と、伯爵は云つた。「私に似たのですな、聲がなかく、好いのです、自分の娘のことを斯う云つては可笑しいですが、これは眞實ですぞ、サロミニの生れ代りといふ歌謠者になりませう。教師に伊太利人を頼みましたですよ」

「少し早過ぎませんか。あのお年齢からだ、聲を傷めてしまふといふ話ぢやアござんせん」

「い、や、何うして。早過ぎる所ですか」と、伯爵は云つた。「なアに、われ／＼の母の代にやア、女の子が大抵十二か十三で結婚したのですからなア」

「もし、彼女は最早ボリスに戀して居るんですよ。何うでせう」と、伯爵夫人は優しい笑顔でボリスの母親を見た。それから、何時も胸に有つた問題に答へるらしい態度で、言語を續けて「ねえ、私が彼の娘に厳しくして、全然制止してしまつたら、何うでしたらう……それこそ、内所で何様な事だつて爲兼ねるものぢやアありませんわ」(伯爵夫人のさう云つた意味では、二人が接吻でも爲ては大變だといふのであつた)「ですが、私のやり方が斯ういふ風だもんですから、彼の娘の言葉一言だつて私の知らぬ事はありませんですよ。彼の娘は、今晚も私の所へ来て、何でも話してしまひます。そりやア甘く爲るのかも知れませんが、これが一番良いやり方だと私は眞個に思つて居るのですわ。でも、上の娘はもつと厳しく育てました」

「左様です、私の方は全然違つた育て方でした、上の娘、器量の好い公爵嬢ヴェーラが、斯う云つて、そして、微笑んだ。が、微笑はヴェーラの顔を可慕くは爲無かつた、反つて、顔が不自然に見え、従つて、厭な風になつた。ヴェーラは好い器量であつた、鈍い性質では無く課業の覚えも好く、立派に教育された娘であつた、聲も聞いて、快く、云つたことは道理でチャンとして居た。けれども、不思議と、誰も——客も、伯爵夫人も——何故ヴェーラが其様なことを云つたらうか不思議でならぬといふやうな態度で、娘を見た、そして、座が一寸と白けた。

「何方も自分の上の子供の仕付には種々な工夫をなさるものですよ、世間に無いやうなエライ事を爲やうと骨折るものなんです」客が斯う云つた。

「左様いふ失策では我々の方も實は、同様なのでな、貴女。この伯爵夫人もヴェーラの仕付には工夫が過ぎました」と、伯爵は云つた。「だが、それは構はんです、それでも、大體は、素的な成功ですからなア」伯爵は斯う云ひ足して、ヴェーラに向いて、是認の胸を爲た。

客二人は起つて、食事には來ると約束して、歸つて行つた。

「何といふ不仕付だらう。何時までもく居坐わつて」と、伯爵夫人は、客を送り出してしまつてから、云つた。

(十一)

ナタアシヤは客間を駆け出はしたが、温室までしきや行か無かつた。で、其所で止まつて、客室の談話を聞きながら、ボリスの出で來るのを待つた。やがて、焦れだして、脚踏を爲、ボリスが直ぐ來無いのに最早泣き出すばかりに爲つて居た、と、緩徐過ぎもせず急速過ぎもせず、唯だ靜づかに來る若者の足音が聞こえた。ナタアシヤは素早く植木鉢の間へ跳び込んで隠れた。

ボリスは部室の中央で、バツタリ止まつて、四邊を見廻し、軍服の袖から塵の塊を拂ひ落とし、姿鏡の所へ行つて自分の奇麗な顔を見て居た。ナタアシヤは竊然と隠れ場所から覗いてボリスが何うするか待つて居た。ボリスは少時姿鏡の前に立つて、自分の姿を見て微笑んで、前方の入り口の方へと歩き出した。ナタアシヤはそれを呼び止めさうに爲て、又思ひ直した。「探がさして遣れ」と、娘は自分に向かつて云つた。ボリスが艱つと出たばかりの所で、一つの入口から、ソオニヤが、赤くなつて、涙の間に何か咬きながら、入つて來た。ナタアシヤは傍へ駆け寄り、最初の衝動を抑制へた、そして、隠れ場所を冠

ぶつて居るかのやうに、隠れ場所に潜んで、何う爲つて來るだらうと覗がつて居た。心のなかには今まで覚え無い變な面白さを感じだした。ソオニヤは客室の戸の方を見返り、何か口の裡で云つて居た。戸が開いた、そして、ニコライが入つて來た。

「ソオニヤ。何う爲たんだい。何うして彼様な？」傍へ駆け寄りながらニコライが云つた。

「何でも有りませんよ、何でも有りませんよ、打捨つといってくださいよ」と、ソオニヤはしやくり上げて居た。

「いゝえ、僕は解つてるよ」

「それぢやア宜いわよ、解つてるの、尙結構よ、彼の女の方へいらつしやい」

「ソ……オ……オニヤ。お聞きよ。勘繰ばかりで僕を苦め、自分も厭な思を爲るなんて？」ニコライは斯う云つて、娘の手を撃つた。ソオニヤは手を引つ込め無かつた、泣くのも止めた。

ナタアシヤは、動きも爲す、宛然息も爲すに、隠れ場所から眼を輝らせて見て居た。「何うなるんだらう」と、ナタアシヤは思つた。

「ソオニヤ。僕は此の世の中なんぞ何うなつたつて構は無いなだ。唯だお前さへ有れば僕はそれで宜いんだ」と、ニコライは云つた。「僕は證據を見せる」

「其様なことを云つちやア厭よ」

「うん、ぢやア云は無い、さア、勘忍してお呉れよ、ソオニヤ」ニコライは娘を引き寄せて、接吻した。

「あゝ、面白い」と、ナタアシヤは思つた、そして、ソオニヤとニコライが部室を出ると、自分もその

後へ随て出て、ボリスを呼んだ。

「ボリス、おいでよ」と、何か事あり氣なコソくした顔付で云つた。「話し度いことがあるのよ。此方、此方」と、云つて、そして、温室へ入り、自分が前に隠れて居た鉢の間へとボリスを伴れ込んだ、ボリスは、微笑みながら随て行つた。

「話し度いことつて一體何だい」と、ボリスは尋ねた。ナタアシヤは少しモヂくした、四邊を見廻はし、そして、鉢の裡に投げ込んであつた人形を見て、それを拾ひ上げた。

「人形に接吻してよ」と、云つた。ボリスはナタアシヤの熱心な顔を何事でも見落さ無い眼に愛情を籠めて見遣つて、何とも返答し無かつた。「厭？ あゝ、ぢやア、此所へいらつしやい」と、ナタアシヤは樹の間へ、もつと奥深く入つて行つた、人形を抛り出した。「もつと傍よ、もつと傍よ」と囁いた。若い將校の腕の袖口の上の所を捉まへた、赤くなつた娘の顔には嚴肅と畏怖の様子が表はれた。

「私に接吻して呉れ無い？」と、眼瞼の下からボリスを見上げ、微笑み、そして、上氣で泣きさうになつた顔で、宛然聞き兼ねるやうな聲で、囁いた。

ボリスは赤くなつた。「何て馬鹿な、ナタアシヤの方へ顔を下げ、又一層赤くなつて、斯う云つたが、それでも、何とも爲すに、次に來ることを待つて居た。不意に、娘は鉢の上へ跳びあがつた、それで、自分の顔がボリスのよりも高く爲つたので、細い露出の兩腕をボリスの頸の周圍へ掛けて抱き締め、頭を一振りして、髪を後へ投げ落とし、ボリスの唇に眞正面に接吻した。

やがて、他の側の鉢の間へ滑り下りて、頭を垂額れて立つた。

「ナタアシヤ」と、ボリスは云つて、「僕がお前を愛してゐるなア、解つてゐるだらう、けれども……」

「貴下は私を愛してよ」と、ナタアシヤは口を抉れた。

「左様なんだ、けれども、ねえ、斯様なことは爲つて無しにしやうぢや無いか……。もう四年すれば……」

さうしたらば結婚を申し込むからね」

ナタアシヤは寸時考へ込んだ。

「十三、十四、十五、十六……」と、小さい細い指で數へた。

「あゝ、左様なんだよ。ぢやア、宜いかね？ 約束したことにして」と、娘の上氣した顔に嬉しさと安堵の微笑が輝き出た。

「約束したよ」と、ボリスは云つた。

「何時までも」と、小さい娘は云つた。「死ぬまで」で、ボリスの腕を攀つて、嬉しさうな顔で男に引添つて徐に次の室へ歩み出た。

(十二)

伯爵夫人は客に逢ふので疲れ切つて了まつたので、最早誰が來ても逢は無いと言ひ付けた、取次の瑞西人が、それから祝ひに來た客は誰でも食事に案内しろと言ひ付けた。伯爵夫人は、幼時友達のアンナ・ミハイロヴナが彼得堡から歸つて來て以來、未だ落々話したことが無かつたので、此所で、差向の打明け談話を爲度かつたのだ。アンナ・ミハイロヴナは、涙に濡れては居るがそれでも何處か愛嬌のある顔を擧げて、伯爵夫人の脇掛椅子へ近々と摺り寄つた。

「貴女には私何んな事でも全然打ち明けますわ」と、アンナ・ミハイロヴナは云つた。「往時からのお友

達で今残つてるのは最早幾等も有りませんわねえ。ですもの、貴女が斯うやつて近しくしてくださるのが一層嬉しく無くつて何うしませう」

アンナ・ミハイロヴナはヴェーラを見て、言葉を止めた。伯爵夫人はその友達の手を握り締めた。

「ヴェーラ」と、伯爵夫人は、確に秘蔵子では無い長女に云つて、「お前さんは何だつてさう物の思ひ遣りといふのが無いだらうね。最早此所に居るには及ば無いことに気が付か無いの。妹の方へ行くか、それで無ければ……」

奇麗な伯爵嬢は、一向平氣な態で、意地悪るさうに微笑んだ。

「左様云つてくだされば、母上様、私最早夙くに行つてたことよ」と、云つて、そして、自分の部室の方へと出て行つた。が、喫煙室を通り抜けやうとすると、二つの窓に二人宛對になつて坐つて居るのが見えた。ヴェーラは止まつて、輕侮みの微笑を漏らした。ソオニヤは、彼の始めて作つた詩を書いて遣つて居るニコラアイの傍へピツタリ寄り添つて坐つて居た。ボリスとナタアシャは一つの窓に坐つて、ヴェーラが入つて行つた時には、黙まつて居た。ソオニヤとナタアシャは恥かしさうな、嬉しさうな顔で、ヴェーラを見た。

さういふ戀を爲して居る少娘を見るのは面白い可愛いもののだが、それを見ても、ヴェーラの胸には寸毫も快い心持は起ら無かつた。「これで幾度云ふんだらう」と、ヴェーラは云つて、「私の物を使つちやア不可つてことをさ。各自の部室が有るぢやア無いの」。ヴェーラはニコラアイからインキ壺を取りあげた。

「もう寸時、もう少時」と、ニコラアイは、ペンを浸けながら、云つた。

「貴方がたは何でも飛んだ時ばかりし擇つて爲るのねえ」と、ヴェーラは云つた。「先づ第一客室へ荒れ込ん

で来るんですもの、お蔭で私どもは何れだけ恥かしい思ひを爲たか知れやし無い」その言葉は全く道理であつたけれども、いや、全く道理であつた爲めなのかも知れぬが、誰も返答を爲なかつた、四人とも唯だ互に顔を見合はせたばかりであつた。ヴェーラは、インキ壺を手につつたなりで、佇立んだ。「貴方たち、ボリスとナタアシャ、それから後の二人位の年齢で全體何様な秘密が有りますかよ——眞個に馬鹿々々しいつたら無いわ」

「ねえ、それが貴女に取つて何うなんですか、ヴェーラ」と、ナタアシャが、極く優しい聲で、辯解した。確に、ナタアシャは、その日は、誰に向いても何時もより機嫌好く優しくかつたのだ。

「馬鹿々々しいわ、眞個に」と、ヴェーラは云つて、「私までお蔭で恥かしいわ。何んな秘密……」

「誰にだつて秘密は有つてよ。私たちは貴女とベルグのことに口を挟めは爲無いことよ」、ナタアシャは少し熱して、斯う云つた。

「左様ねえ、口は挟め無かつたやうねえ」と、ヴェーラは云つて、「私の行爲には後暗いことは寸毫だつて有りやアし無いんですもの。けども、私貴女のボリスに對する行爲は母上様に話すことにするわ」

「ナタアシャ・イリイニシナの私に對する行爲は大變宜しい」と、ボリスは云つた。「私に不足は決してありません」

「お止しなさい、ボリス、貴下はなか／＼外交家ねえ」(外交家といふ言葉が特別な意味に取られて若い連中の間で流行つて居たのだ)——「あ、厭だ、眞個に」と、困じた震へ聲で、ナタアシャは云つて、「何だつて私にばかり突つ掛かるんだらう」

「貴女には何うしたつて解ら無くつてよ」と、ヴェーラに向いて云つて、「貴女は誰のことと思つて居無い

んですもの、貴女は情無しよ、全くマダム・ド・ジャンリスよ（これは、極く厭な意味で、ニコライアイがヴェーラに付けた綽名であつた）だもんで、貴女は他人を困らせるのが一等楽しみなのよ。貴女は、思入れベルグと悪戯するが宜いわ、ナターシャは、斯う口速に云つた。

「え、私はね、お客の前で若い男を追つ掛け廻すことは爲ますまいよ……」

「おい、彼奴は最早目的を達したぢやア無いか」と、ニコライアイは口を挟んで、「各自にヒドいことを云つて、衆皆困まらしやアがつた。此方は小兒部屋へ行かうや」

四人とも、怖ぢけた鳥の群のやうに、起つて、部屋を出た。

「お前たちの方が私にヒドい事を云つて、私は誰にも何にも云はなかつたぢやア無いの」と、ヴェーラは云つた。

「マダム・ド・ジャンリス。マダム・ド・ジャンリス」と、戸の彼方から笑ふ聲々が叫んだ。

誰にも其様なチリ／＼させる不快な心持を起こさせた奇麗な娘は微笑んだ、そして、衆皆から云はれたことなどは全然何とも無いらしい態度で、姿鏡の所へ行つて、襟飾を直し、髪を撫で付けた。自分の奇麗な顔の寫つて居るのを見て、娘はますます冷然と落着いて了まふやうであつた。

客室では話が未だ續いて居た。

「おえ、貴女」と、伯爵夫人は云つて、「私の身の上だつて善い事づくめぢやア有りませんよ。今の様子ぢやア、家の財産も長くは無いといふことが私に解から無いで居ると思つていらつしやるの、悉皆俱樂部だの、彼の人のお人好しのお蔭なんですわ。田舎に居た時分だつて、閑氣になんぞ寸時の間も構へちやア居られ無

かつたんですわ、——やれ、演劇だは、やれ、獵の會だは、何だは彼だはつてね。あ、さう／＼、私の話を爲るんぢやアありませんでしたね。さア、貴女が何ういふ風に爲ていらつたのか、それを話してくださいよ。私何時も貴女には感心して居るの、アンネット、貴女がその年齢でさ、莫斯科だは、彼得堡だは、大臣の所だは、豪い人の所だはと、四方八方駆け廻つて、衆皆を巧く承知させて来る所がねえ。實に貴女感心ですわねえ。まア一體何ういふ風にしてやるものなの？ あ、私なんぞに到底能きることぢやア無い」

「ねえ、貴女」と、公爵夫人アンナ・ミハイロヴナは答へて、「眼の無いほど可愛い子を抱へた、誰一人頼る者の無い寡婦になんぞ爲るもんぢやアありませんわ、でも、何でも慣れるですわねえ」と、幾等か得意な態で、「裁判のお蔭で全然世間に慣れて了まひました。誰でも豪い人に逢つて貰はうと思ひますとね、手紙を遣るんですよ、公爵夫人これ／＼は、何某にお目にかゝり度い」と、書いたのをさ、で、私は借り馬車で獨りて二遍でも三遍でも——で不可ければ四遍だつても——此方の志望が徹るまでは何遍でも推し掛けるんですわ。先方が何と思はうが彼と思はうが此方は一向お構ひ無しさ」

「ねえ、で、ボリインカの事件で、貴女誰に逢つたんですか」と、伯爵夫人は尋ねた。「貴女のお息さんは最早近衛の將校なのに、家のニコライインカは準將校にしきや爲れ無いんですわ。中間に立つて口をきいて呉れる人が誰も有りませんものね。貴女は誰に頼みました？」

「公爵ヴァシイリに。それは／＼親切に爲て呉れました。直ぐ何處までもやつて遣るつて引受けて、陛下に直接に願つて呉れたんですよ、公爵夫人アンナ・ミハイロヴナは斯う熱中の調子で云つた、自分の目的を達する爲めに後いだ種々の屈辱は最早全然忘れて了まつたのだ。

「彼の方は此頃何うなんです？ だん／＼年を取るばかりか？、公爵ヴァシイリは」と、伯爵夫人は尋ねた。

「ルミヤアソフ家の演劇の催から此方一遍もお目に掛りませんよ。私なんぞのことは最早全然お忘れかも知れ無い。その癖、随分私を付廻したもんだけども」と、伯爵夫人は往時を思ひ出て、微笑んだ。

「寸毫も變はりませんよ」と、アンナ・ミハイロヴナは答へて、「それはく愛想の好さと云つたら、宛然溢れ出すやう。彼れ程の出世でも寸毫も高ぶつてなぞ居無いんですよ。十分なお世話と云つては能きますまいが、公爵夫人」と、私に左様云つて、「貴女のお頼みなら何でもやりませう」と、云ふのでしたよ。え、眞個に善い人ねえ、親類に極く親切な。だけれども、ナタリイ、私彼の子が可愛くつて堪まら無いでせう。彼子の仕合せになると云ふんなら、私何んな事だつて爲て見せますよ。でも、家の物と云つてはそれはく少許」と、悲しさうに聲を低くして續け、「最早お話にも何にも爲ら無い状態ですわね。何時かからの彼の飛んでも無い訴訟沙汰に根こそけ注ぎ込ませられてしまつて、それで居て、一向抄と云つては行くのぢや無いしさ。私はねえ、何うです、全くの所、自分の物と云つては銅錢一枚だつて有りませんよ、ですから、ボリスの準備にやア私眞個に思案に餘まつてしまひました」、公爵夫人は、手巾を出して涙を流した。「何うしても五百ルウブル入用だけれども、懐中にと云つては唯つた二十五ルウブル一枚限りなんぢやアありませんか。私はまア斯様な状態ですわね……。今ぢやア、唯つた一つ頼みに爲て居るのはキリイル・ヴラディミイロヴィチ・ベズウホイのことなんですよ。彼の人でも、自分の神子だといふんで——彼の人がボリスの神父なんですものね——彼子を助けに出て呉れて、ボリスの身の立ち行だけ幾干か出して呉れるんでも無いとすると、私の今までの辛苦は全く水の泡ですわ、彼の子の準備に費ふ物はまるく無いことになるんですよ」

伯爵夫人は涙ぐんで黙まつて考へ込んだ。

「私はね、屢斯う思ひますの——罪の深いことかも知れ無いけども」と、公爵夫人は云つて——「ですが私は屢思ふんですよ、此に伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィチ・ベズウホイといふ人が唯つた一人で生きて居る……それはく太した財産で……でも、彼人は此の世に何の生き甲斐があるのだらう？ なぞとね、彼の人の爲めには此の世は重荷なんだから、自分でも最早未練は無いでせうけども、ボリスの方は、今が世の中への眞個の始めなんぢや有りませんか」

「そりやア、ボリスにと云つて何か遺して置いて呉れますわね」と、伯爵夫人が云つた。

「何うですかしらねえ。世間の大金持などといふものは皆身勝手なものでさアね。でも、それはそれとして置いて、私ボリスと今此れから直ぐ行つて、私どもの身の上を有りやうに話して見ます。他人は何とでも思ふが宜ござんす、何が構ふもんですか、此方は大事な子息の運命の分れ目なんですもの」。公爵夫人は起ちあがつた。「今二時です、それで、お宅の食事は四時でせう。行つて返る間は有りますわ」

で、事務に慣れた、時間の使ひ方の巧妙な、彼得堡婦人の態で、アンナ・ミハイロヴナは子息を呼びに遣つて、一緒に廣室へと出て行つた。

「では、行つて來ますよ」と、戸口まで送つて出た伯爵夫人に云つた。「運の向くやうに祈つて下さい」、子息には聞え無いやうに、斯う囁いた。

「伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィチへ行くんですか、貴女」と、伯爵は食堂から廣室へと出て來て、云つた。「少しでも快いやうであつたら、食事に來るやうにビエールを案内してください、前には來たことがあります。屢く子供と踊つたものです。屹度忘れずに案内してくださいよ。さア、此方へ來て、タラスが今迄に無い腕を振るつた所を見て遣つて呉れ、流星の伯爵オルロフでも今日のやうな御馳走は爲たことが無い

と、奴は云つて居るよ」

(十三)

「ねえ、ボリスや」と、伯爵夫人ロストオフから借りた馬車が薬を敷いた街路を駈け、伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィチ・ベズウホイの邸の廣庭へ乗り付けた時に、アンナ・ミハイロヴナが云つた。「ねえ、ボリスや」母親は古ぼけた外套の下から出した手をおつかかなびつくり愛撫すやうな手付きで、子息の手に上に掛けて、斯う云つて、「溫和しく、善く氣を付けてくださいよ。伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィチは右に左貴下の神父ですよ、そして、貴下の將來の運は此人次第で開けるんですよ。宜うござんすか、ねえ、貴下の上手なお愛想を善くしてね……」

「恥づ掻きにさへ爲らずに濟めばですがねえ」と、子息は冷然と答へた。「ですが、承知しました、貴女がさう仰しやるんなら、やりませう」

馬車は入口に立つて居たけれども、立關番の瑞西人は、親子の風體をジロく見、二人は名を通じさせずに、壁龕に入つた塑像の兩側に列んで居る間の硝子戸を通つて、ツカく入つて行つたのだ。古外套を心得顔に見やつて、誰に逢ふといふのか、伯爵嬢たちか伯爵か、何方なのか、尋ねた、そして、伯爵に逢ひ度いのだと聞いて、閣下は今日は餘程お病重いので、誰にもお逢ひになれ無いのだと云つた。

「此の儘歸つたつて宜いではありませんか」と、子息は佛蘭西語で云つた。
「ね、ねえ」と、母親は、身體に觸つて遣りさへすれば、子息の心が落ち着き、勢が付くと思つたかのやうに、再ボリスの手に觸つて、懇願する聲で云つた。ボリスは、それ限り何とも云は無かつた、けれど

も、外套は脱がずに、不審さうに、母親の顔を見て居た。

「お前ね」と、アンナ・ミハイロヴナは、立關番に向いて機嫌を取るやうな聲で云つて、「伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィチの太くお病重いことは承知して居るんですよ……參堂つたのわね……私親類なんです……伯爵のお邪魔を爲はしませんよ、ね、お前……。伯爵ヴァシイリ・セルゲーヴィチにお目に掛かれ、ば宜いんですよ、此方に来てお出ですわね。取り次いでくださいね」

立關番は、不承々々、二階で鳴るやうになつて居る呼鈴の綱を引いた。
「伯爵ヴァシイリ・セルゲーヴィチのお客、伯爵夫人ゾルベエツコイ」と、上から駈け降りて来て、階段の角から見下した、フロックを着た、半袴の、上靴の從僕に向いて、呼ばはつた。

母親は、染絹の長上衣の皺を直ほし、等身のヴェニス姿鏡に自分を寫して見て、それから、見すほらしいクシヤくに爲つた靴で、平氣で階段の絨氈の上を昇つて行つた。

「お前さん、承知なんだねえ」と、腕に觸つて勵ましなから、再度子息を顧みた。子息は、床に眼を向け、溫和しく後から隨いて行つた。

二人は、伯爵ヴァシイリに宛てられた部室と戸口一つで續いて居る大きい部室へと入つた。親子が部室の中央まで行つて、二人の入るのを見て跳び出して来た年寄りの從僕に道を尋かうとして居たその途端に、戸の一つの青銅の把手が轉つた、そして、勳章を一つ着けた天鷲絨の室内衣を着た伯爵ヴァシイリが奇麗な黒髪の男と一緒に出て来た。此の男が名高い彼得堡の醫者、ロオレーンであつた。

「確ですな、では」と、伯爵が云つた。
「伯爵、Errare est humanum、けれども……」と、醫者は、羅句語(やり損なひは人間の常といふ意味の)

を佛蘭西訛りで、舌纏れに發音して、云つた。

「成る程、成る程……」

アンナ・ミハイロヴナ親子をそれと見て、公爵ヴァシイリは目禮で醫者を歸し、そして、何にも云はずに不審さうな、顔付で、二人を迎へにと進んで來た。子息は、非常な哀痛の表情が倏然と母親の眼に出たのに氣が付いた、で、彼は微弱に微笑んだ。

「まア眞個に、何といふ悲しい場合に又お眼に掛かることでせうね、公爵……。病人は何うなんです、え、」母親は、自分の上に凝乎と向けられて居る冷々とした心持の悪い眼には氣が付かぬやうな態付で、斯う云つた。公爵ヴァシイリは母親を見詰め、それから今度は、當惑と云つても宜い位の不審さうな顔付で、ボリスを見詰めた。ボリスは丁寧な點頭を爲した。公爵ヴァシイリはその目禮には答へずに、アンナ・ミハイロヴナに振り向いた、そして、その間に對して、頭と唇の動かし方だけで、病人は到底駄目だらうといふ心持を知らせた。

「へえ、まア」と、アンナ・ミハイロヴナは聲を高くして、「まア、眞個に大變だ。考へるだけでも眞個に情無い……これが、偉です」と、ボリスを指して、云ひ足した。「自身お目にかゝつてお禮を申し度いと云ふものですから」

ボリスはもう一遍丁寧な點頭を爲した。

「ねえ、公爵、子を持つた母親の心は、貴下が私どもの爲めに爲てくださつたことを、決して忘れは致しませんよ」

「少しでも何かお爲になることが能きたのは喜ばしいです、親愛なアンナ・ミハイロヴナ」と、公爵ヴァ

シイリは、自分の衣服のレエスの縁飾りを引張り直しながら、云つた、その聲と様子は、此所莫斯科では、自分に恩を受けて居るアンナ・ミハイロヴナの前では、彼得堡で、アンナ・バアヴロヴナの夜會でよりも尙一層勿體を付けたものであつた。

「善く任務を盡くすやうになさい、職を辱かしめんやうにな」と、嚴つかしい顔でボリスに振り向いて、云ひ足した。「喜ばしいのは……貴下は今賜暇で此方においでかね、表情の無い眼で、斯う尋いた。

「命令が参り次第、今度の聯隊に加はります等なであります、閣下」と、答へたボリスは、公爵の素氣無い態に腹立つた氣色は寸毫も見せず、と、云つて、談話を始め度いといふ氣色も無かつたが、言葉が如何にも謹んで落着て居たので、公爵がつくつくとその顔を見て居た。

「母堂と一緒に暮しかね」

「私は伯爵夫人ロストオフの所に居ります、ボリスは再度「閣下」を添へた。

「ナタリイ・シインシンの嫁ついた彼のイリヤ・ロストオフですよ」と、アンナ・ミハイロヴナが云つた。

「左様、左様」と、公爵ヴァシイリは單調な聲で云つた。「何うしてまア、ナタリイ・シインシンが彼様な母熊に舐められ無い熊（開けぬ我殺者といふ意味）に嫁つく氣に爲つたものかなア、私には一向了見が解からん。實に抜けた可笑しい男だ。それに、又賭博を打つ、といふ話さ」

「ですけれども、眞個にチャンとした人なんですよ、公爵」と、アンナ・ミハイロヴナは、自分も伯爵ロストオフは斯う貶批されても爲方が無い譯なのを認めはするが、それでも、彼の感然さうな老人を左様酷く云はずに置いて呉れと頼むとでも云ひさうに、悲し氣な笑顔で、口を挾れた。「お醫者たちは何う云ひますの」と、少時間を置いて、公爵夫人は尋いた、そして、再度深い心痛の表情が涙に濡れた顔に現て來た、

「何うも覺束無いですな」と、公爵が云つた。

「で、私は是非伯父さんに逢つて、私やボリスがいろいろお世話に爲つたお禮を申し度いんですがねえ。此子は伯爵の神子なんです」と、公爵夫人は公爵ヴァシイリが左様と聞いたら嚙ぞ嬉しがるだらうと云はぬばかりの調子で、云ひ足した。

公爵ヴァシイリは考へ込んで顔を曇めた。アンナ・ミハイロヴナは、公爵は自分が他日伯爵ベズウホイの遺産分配の場合に公爵自身に對し競争者と爲るやうなことがあつてはと困つて居るのだと見て取つた。で直ぐに安心させにと掛かつた。「私が心から愛し、尊敬して居る大切な伯父さんのことですからねえ」と、如何にも當然だらうと云は無いばかりの平氣な調子でその「伯父さん」といふ言葉を發音して、「伯父さんのご氣象は私善く存じて居ります、——胸量のお廣い、廉直な、ですけれどもねえ、お傍にはお嬢様がたばかりでせう……未だホンの若いかたゝちではありませんか……」。公爵夫人は頭を垂けて、囁語で斯う云ひ足した。「伯父さんは末期の勤行は最早お濟ましなんでしょうか、公爵。又この末期程凡そ大切なものは無いんでさアね。最早餘つ程お危篤んでせう、覺悟させてあげなければ何うしてもいけませんよ、眞個に夫れ程お宜しく無いんなら。女はねえ、公爵、優しい笑顔になつて、『斯様いふことは巧く爲遂せるものなんです。私は是非伯父さんにお目に掛からなければなりませんわ、もう眞個に辛いのは辛いんだけど、爲方ありませんわ、散々辛い目に逢つて來た私なんですもの』」

公爵は勿論解かつた、そして又、既にアンナ・バヴロヴナの家での近い例もあるので、アンナ・ミハイロヴナを逐拂ふのは一通りなことで無いのも解かつた。

「此の會見が伯爵の苦痛を増すことに爲りはし無いでせうか、ねえ、アンナ・ミハイロヴナ」と、公爵

は云つた。「晩まで待つては何うでせう、醫者どもは直ぐだとは云つて居らんのだから」

「待つなんて飛んでも無いことですよ、公爵、それは時によりけりですアね。もし、彼の方の靈魂を救はうといふ大切の問題なんぢやアありませんか。あゝ、何といふ辛さなんだらうね、教徒の義務は」

奥の部室の戸が開いた、そして、伯爵の姪の一人、冷然として無愛想な顔で、脚の短かいのに對し不釣合に胸の長いのが入つて來た。

公爵ヴァシイリはそれに振り向いた。「えゝ、何んな模様だね？」

「矢張同なじよ、此所で斯う騒がしく爲て居ちやア、何うしたつて……」、姪は斯う云つて、アンナ・ミハイロヴナを見ず知らずの人かなんぞのやうにジロく見た。

「おや、まア、私全然お見それ申しましたよ」と、アンナ・ミハイロヴナは、さも嬉しさうな笑顔で、云つて、姪の傍へチヨコくと駆け寄つた。「私今來た所なんです、伯父さんのお看病のお手傳ひにね。貴女随分情け無かつたでせう、お察し爲ますわ」と、如何にも同情するといふ態に上眼使ひをして、云ひ足した。

姪は、何とも返答せず、微笑みさへも爲すに、ブイと引込んで了まつた。アンナ・ミハイロヴナは手套を脱り、そして、塹壕に據るとでも云ひさうに、肘掛椅子に陣取つて、公爵ヴァシイリを招いて側に坐わらせた。

「ボリス」と、公爵夫人は子息に云つて、そして、笑顔を向け、「私はね、伯爵、伯父さんの所へ行くんですよ、それでね、お前さんは、その間に、ねえ、ピエールに逢つておいで、そして、忘れずにロストオフ家の招待のことを云ふんですよ。食事の案内なんですがねえ。行きませんか」と、公爵を顧みた。

「いや、何うして、何うして」と、公爵は如何にもウンザリした様子で、云つて、「彼の若者を連れ出してくださるば、實に有り難いですよ……彼奴は此所にへバリ付いて居て困る。伯爵は一度も彼は傍へ呼んだことが無いのですぜ」

公爵は肩を揺つた。従僕が客の若者を階下へ下ろし、それから、又外の階段を昇らせて、ピョートル・キリイロヴィーチの部室へ案内した。

(十四)

ピエールは、到頭彼得堡で職を極め得無かつた、そして、實際不品行の爲めに莫斯科へ追放されたのであつた。伯爵ロストオフの所で出たピエールの話は眞實であつた。ピエールも熊に巡查を縛る手傳ひを爲たのだ。彼は、ホンの二三日前に歸り着いて、例の通り父親の家に落ち着いた。自分の噂は夙くに莫斯科でも知れ渡つたらうから、父親の身近くに居る、さ無きだに前々から自分の味方では無かつた女連は、得たり賢しで、伯爵を突つ突くに違ひ無いとは思つたもの、彼は歸つた直ぐその日に父親の部室へ行つた、公爵嬢連が何時も居る客室へ入つて行つて、女連に挨拶した、二人刺繍臺に寄つて居て、一人聲高に物を讀んで居た、女連は三人であつたのだ。一番年上のは、キチンとした、胸の長い、無愛嬌な顔の處女であつたが——アンナ・ミハイロヴナのの前へ出て來たのが此女であつたが——それが物を讀んで居た。年下の二人は、兩方とも薄桃色の可愛い顔で、違ふ所と云つたら、唯だ一人の方が顔に小さい黒子があるので、その爲めに、愛嬌が餘程深いといふことばかりであつた。此の二人が、刺繍をやつて居たのだ。ピエールは、死より甦へつた人か、災殃を以て撃たれた人で、もあるやうな風に迎へられた、年上の公爵嬢が讀むのを止めて、黙まつて、

慄然とした眼付で、彼を見詰めた、次のは前のと全く同なじの表情に爲つた、一番年下の、黒子のあるのは——一體陽氣な善く笑ふ性質であつたが——これは、刺繍の框の上へ突つ伏さ無いばかりに爲て、笑顔を隠した、可笑しいことが直ぐ始まると見て取つて、笑はずには居られ無かつたのであらう。縫ひ糸を下から引き出し、模様を好く見やうとでもするやうに、頭を垂けて、艱然のことで、噴飯すのを堪へて居た。

「お早う」と、ピエールが云つた。「僕を忘れたのかい」

「能く知つてよ、全く知り過てるわ」

「伯爵は何んな案配かね。逢ひに行つて宜いかい」と、ピエールは、例の通り、モチくして云つた、でも、ドギマギは爲て居無かつた。

「伯爵は肉體もお苦しければ、心も惱んでおいでなんですよ。貴下は、能るだけの苦しみを伯爵にさせやうとばかり骨折つて居らつしやるやうなのねえ」

「伯爵に逢ひに行つて宜いかい」と、ピエールは繰り返した。

「ふん……伯爵が死んでも宜い、直ぐ死んでも宜いと思ふんなら、行つてお逢ひなさいよ。オルガ、伯父さんのお粥が出來てるか行つて見といで——最早やがて入用時分なんだからね」と、娘は云ひ足した、これは、自分たちは忙がしいのだ、そして、ピエールが伯爵に心配させるやうさせるやうと仕向けてばかり居るのには引き代へ、自分たちの方は寸時の間も油断無く伯爵に心持好くさせやうさせやうと氣に掛けて居るのだといふことを、見せ付けやう爲めであつたのだ。

オルガは出て行つた。ピエールは寸時ヂツと立つて居て、姉妹を見て、頭を下けて、斯う云つた。「では、部室へ行つて居ます。宜い時分が來たら知らしてください」。彼は出て行つた、そして、黒子のある妹娘のさ

う高く無くハア／＼笑ひ出した聲を後に聞いた。
 その翌日、公爵ヴァシイリが来て、伯爵家に落着いた。彼はビエールを呼びよこして、ビエールに斯う云つた。「おい、君、此地でも彼得堡のやうな身持ちだと、いよく飛んでも無いことになりませんが、私の云つて置くことはこれだけなんだ。伯爵は太く、全く太く病重いんだ、君は決して逢つては不可んよ」
 それから以降、ビエールは全たく打捨つて置かれた、彼は、二階の自分の部屋で終日一人暮らして居た。ボリスが入つて来た時には、部屋の裡を彼方此方と歩いて居た、時々隅々で止まり、槍で誰か見え無い敵を突くとも云ひさうに、壁に向いて恐しい権幕の身振りを爲、やがて、眼鏡越しに如何にも嚴づかしい顔で前方を見詰め、やがて又、彼方此方と歩き出して、何かブツ／＼呟き、肩を揺つて、手眞似をするのであつた。

『英吉利の國威は最早地に墮ちた』と、額で睨めて、誰かに指し爲た。『モシユウ・ピットを、國民及び公法の叛逆者として、此に宣告する理由は……』自分自身を最早ナポレオンにしてしまひ、危険なドヴァー海峡を越え遂せ、一舉に倫敦を陥れて了つた氣になつて、斯うピットの宣告を爲かけて居る所へ、品の好い奇麗な若い將校が入つて来た。ビエールはビタリと止まつた。ビエールはボリスの十四歳の時逢つた限りなので、最早顔を寸毫も覚えて居無かつた。が、それでも、彼は、持前の忙だしい懇ろな風でボリスの手を握り、そして、慕かし氣な笑顔を見せた。

『覚えて居ますか』と、ボリスは快よく微笑んで、落着いて云つた。『母に伴れられて伯爵にお目に掛りに来ました、ですが、少しお宜しく無いやうですね』

『左様、何うも宜く無いやうですよ。種々な奴に取り巻かれて弱つて居るんです』ビエールは、斯う答へ

て、この若者は誰であつたか憶起さうと骨折つた。

ボリスは、ビエールが自分が誰だか知らずに居るのだと見て取つた、けれども、自分の方から名乗るのもヘンだと思つたので、落着拂つてヂツと先方の顔を見て居た。

『伯爵ロストオフが食事に貴下をご案内します』と、ビエールに取ては手持無沙汰な少し長い沈黙の後でボリスは云つた。

『あゝ、伯爵ロストオフ』と、ビエールは嬉しさに、云ひ始めた。『では、貴下はその息子さんのイリヤなんですか。イヤ何うも、今まで全然忘れて居ましたよ。覚えて居ますか、二人でマダム・ジャッコオと一緒に雀山でよく滑つて遊んだものですね……随分長いことだが』

『違ひます』と、ボリスは大膽な、寧ろ皮肉な笑顔で云つた。『私は公爵夫人アンナ・ミハイイロヴナ・ツルベエツコイの息子のボリスです。イリヤといふのはロストオフ家の親父の方で、息子はニコライなんです。それに、私はマダム・ジャッコオなどいふ人を一向知りません』

ビエールは、蠅か蜂でも周圍に群れて居るとも云ひさうに、両手と頭を振つた。

『いやア、何うしたことだ。全然ゴツチャにしてしまつた。莫斯科には何だつて斯うシコタマ親類ばかり居るんだらう。貴下はボリス……左様だ。あゝ。最早全然解かりました。ねえ、君、ブウロオニユから出る英國征伐を何う思ひますかね。ナポレオンが海峡を越れば、英吉利はメチャ／＼でせうなア、僕はこの征伐は必然あると信じますね。唯だヴィルヌヴが下手をやら無きやア宜いんだがなア』

ボリスは、ブウロオニユから出る征討軍の話などは一向知ら無かつた、それから、ヴィルヌヴといふ名は此所で初めて聞いたのであつた。

「莫斯科では、誰も彼も、政治のことなんか其方除けて、唯だ、夜會とか他人の噂話ばかりに憂身を窶して居るんです」と、ボリスは落着き拂つた皮肉な調子で云つた。「僕は其様な下ら無いことは寸毫も知ら無いし、又寸毫も考へも爲無い。莫斯科位他人の噂を大騒やる所はありませんな、斯う續けた。此頃は何處も彼所も、貴下のこと、伯爵のことで持ち切つて居ます」

ビエールは、客が自分で後悔するやうなことを何か知ら云ひは爲まいかと、客自身の身に代つて心配するとても云ひさうに、持ち前の人の好い笑顔を見せた。が、ボリスは、ビエールの顔を真正面に見詰めながら、瞭然とした、遠慮の無い言葉で話した。

「莫斯科の人間は他人の噂話を爲るより外何にも爲無いんです、斯う續けた。誰も彼も、伯爵が誰に遺産を繼がせるかそればかり一生懸命に知り度がつて居るんです、怪しからんですな、伯爵の方がわれ々總體よりもズツと後まで生きて居られるか知れもし無いに、いや、私は左様あることを眞底から祝るんですがね」

「左様、實に怪しからんですな」と、ビエールは口を挾れて、「實に怪しからん」。ビエールは尙且、この將校が折悪く彼のギョツトするやうなことを云ひはしまいかと心配した。

「それで、貴下には必然」と、ボリスは、ホンの寸許顔を赤くしたばかりで、聲も態度も寸毫も變へずに、「貴下には必然、誰も彼も、伯爵から何かしら貰うことばかり考へて居るやうに見えませう」

「あゝ、到頭それだ」と、ビエールは思つた。
 「それで、これだけは是非、貴下の誤解を避ける爲めに、申して置き度いんですが、私母子が前に云つたやうな仲間だと思ひなされると、飛んだお考慮違なんですぞ。私どもは太く貧乏して居るには居ます、けれ

ども、私は——兎に角私自身だけは——ご親父がお金持でお有りなさるだけそれだけ、私はご親父の親類だと私自身を考へません 又私にしても、母にしても、ご親父に何一つ頂き度いとお願ひ申すことなどは断じて致しません」

ビエールは、ボリスが何んで左様いふ事を云ひ出したのか、暫時の間、解し兼ねた、が、やつと解けるといふと、長椅子から跳びあがつて、持ち前の速さと武骨とでボリスの手を攫んだ、そして、ボリスよりも兎然赤くなつて、慚愧と迷惑の混じりあつた感じで、話し初めた。

「うん、こりやア變だ。君は思ふんですか、僕が……何うして君は其様な……僕は善く知つて居る……」
 が、ボリスは又ビエールの言葉を途中で抑さへた。

「私は貴下に全然有りやうにお話してしまつたんで、大きに安心です。貴下にはこれがお厭かも知れ無い、左様なら何うぞ勘辨してください、ボリスは、ビエールに安心させられるのでは無くて、反つてビエールを安心させやうと骨折りがつて、斯う云つた。でも、貴下の立腹なさるやうなことは私は云は無かつたらうと思ふんです。私は率直に何でも云つて了まふのを主義にして居るんです……所で、先方へ何と返答させうね。ロストオフ家の晩餐にお出なさいますか」で、ボリスは、厭な義務を果して了まつても安心したといふ態で、その苦しい位地から脱出して、自分より以外の何人かをさういふ位地に置いて了まつて全然元の快活に返つた。

「いや、僕の話聞いて呉れ給へ」と、落着を恢復して、ビエールが云つた。「貴下は實に豪い人だ。貴下の今云つたことは實に立派だ、實に立派だ。貴下に私が何んな人間だか解かつて居無いのは無理は無い、お互に逢つて居たのは随分往時のことなんだもの……お互に小兒だつた……貴下が何う思つても……僕は解

つた、全然解りました。僕にやア貴下のやうにやアやれ無かつたらう、いや、僕にやア左様いふ勇氣が無かつたでせう、だが、實に立派だ。僕は貴下とお近付になつたのが、非常に嬉しい。可笑しな風な人間だ』と、彼は云つて、止まつて、微笑んで、『貴下は僕を思つたものだなア』。ビエールは笑つた。『けれども、其様なことは何うでも宜い。もつとお心安くして、お互に十分氣心を知り合ふやうになりませう、ねえ』。彼はボリスの手を握り締めた。『僕は一度も伯爵に逢は無いんですからねえ。僕を呼びによこさないんです……人間として、僕は伯爵は實に氣の毒だと思つて居ます……。だが、僕には何うにも爲やうが無い』

『所で、貴下は、ナポレオンが軍隊を英國へ上陸させ得るとお思ひですか』と、ボリスは微笑みながら、尋ねた。

ビエールは、ボリスが話題を更へやうと力めて居るのを見た、で、彼は、アウロオニユ軍の利益な諸點と、困難な諸點を説明しだした。

従僕が公爵夫人からだと言つてボリスを呼びにと入つて来た。公爵夫人は歸るといふのだ。ビエールは、ボリスともつと心安くならうと思つて、晚餐に行く約束した、そして、別れ際に、ボリスの手を親しげに握り締めて、その顔を眼鏡越しに慕かしさうに覗き込んだ。

ボリスが行つて了まふと、ビエールは、暫時部室を彼方此方と歩いた、最早見えざる敵を突くのでは無く、その如何にも愛嬌のある、伶俐な、氣象の堅固した若者を憶ひ出して微笑んで居た。

若い人々、殊にそれが孤獨の位置にある人たちだと、屢ある通りに、ビエールはこの若者が何といふこと無しに太く慕かしかつた、で、彼は、それと信友にならうと斷乎と決心した。

公爵ヴァシイリは廣室まで公爵夫人を送つて行つた。公爵夫人は眼へ手巾を當て居て、顔には涙が流れて

居た。

『悲しい辛いことですね、眞個に辛らうござんすよ』と、公爵夫人は云つた。『ですが、何んなに苦くつても、私は私の義務を盡くします。今晚一晩ご看病に参りますよ。彼の方をこの儘に打捨つては置けませんわ。眞個に一分を争ふ場合なんですからねえ。何だつてお姪ごたちは、それを延ばしておいでなうでせうねえ。多分神様が彼の方に支度させる道を開いてくださいますでせう。左様なら、公爵、お氣をお付けなすつて……』

『左様なら、奥様』と、公爵は答へて、引返した。

『あ、彼の人はそれはく大變な容體なんです』と、母親は、二人又馬車の中に坐つた時に、子息に云つた。『誰の顔も大抵最早識別が付か無くなつて居るの』

『ビエールに對する伯爵の態度が私には寸毫も解かりませぬ、母上』

『遺言狀でそれも全然解かるでせうよ、お前、私共の運命も全くそれ次第で極まるんですよ……』

『ですが、何かわれくにも遺して行つて呉れるたア、何うして思へるんですか』

『あ、お前。彼の人は大變な身代で、私どもの方は此様に貧乏なんだもの』

『さア、それだけでは十分な理由とは何うも云へますまいよ、母上』

『あ、ツ、それはく病重んだもの、それはく病重んだもの』と、母親は叫んだ。

(十五)

アンナ・ミハイロヴナが子息を伴れて伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィーチ・ベズウホイの所へと馬車

を走らせた後で、伯爵夫人ロストオフは、手巾で眼を抑へて、長いこと獨り坐わつて居た。到頭夫人は鈴を鳴らした。

『何う爲たんだね』と、夫人は自分を三分待たした女中に、腹立たしげに云つた、『家で使はれるのが、お前さん、厭なのかえ、え？。何んなら、他で口を探がして上げませうかね』

伯爵夫人は友達の心痛と哀れな恥辱とに心を亂されて居たので、機嫌が悪かつた、それは、女中に、他人行儀の丁寧なヴィー（貴女）とか、ミーリーヤ（お前さん）とかいふやうな言葉で話し掛けたのでも知れるのだ。

『まことに相濟ません』と、女中が云つた。

伯爵にいらして下下さいと申し上げてお呉れ』

伯爵は、例の通り、何だかオドクしたやうな顔付で、妻の所へ、ヨタ／＼入つて来た。

『ねえ、可愛い伯爵夫人や。素的な山鳥とマデエラのシチュウが喫れるんだぜ。私は一寸試めしに味を見た、タラスを千留で雇つて實に宜いことを爲たよ。奴にやアその價値が十分有りますわい』

彼は、妻の側に坐わつて、脰を形好く膝に置き、白髪の手で梳き立たせた。『お前の命令は何だね、可愛い伯爵夫人や』

『それは斯うなんです、ねえ、郎君、——あら、そのベツタリ附着てるものは何んですね』と、夫人は、夫の直衣を指しながら、云つた。『シチュウですね、多分』と、微笑みながら、云ひ足した。『それは斯うなんです、郎君、ねえ、私お金が欲しいんですわ』夫人の顔が陰鬱になつた。

『あ、可愛い伯爵夫人や……』で、伯爵は、紙入れを引張り出しながら、モチ／＼した。

『恐ろしく多額欲しいんですよ、伯爵。五百留欲しいんですよ』伯爵夫人は、白麻の手巾を出して、夫の直衣を拭いた。

『即刻、即刻。お、い、誰か居るか』と、伯爵は、自分に呼ばれた者どもは直ぐ驀地に飛んで来ると確信して居る人のみが叫ぶやうな聲で、叫んだ。『ミイテンカを呼んで来いよ』

貴族の出生で、伯爵の家で育てあけられ、今では伯爵の金銭の出納を受け合つて居たミイテンカが、部屋へ靜に歩み込んだ。

『おい、お前』謹んで寄つて来た若者に、伯爵は斯う云つた。『持つて来て呉れ』、寸時考へて、『左様、七百留、左様だ。で、宜いか、この前のやうな彼様な裂けた汚れた札は不可ぞ、好い綺麗な奴を、伯爵夫人の所へ』

『左様な、ミイテンカ、綺麗なのを、ね』と伯爵夫人は、銷沈つた嘆息を爲て、云つた。

『閣下、何時までに持つて参れば宜いのですか』と、ミイテンカは云つた。『貴下も御存じの筈ですが……いや、宜しうございます』と、ミイテンカは、伯爵が、何時も直に怒り出す前觸れの、忙はしい深い呼吸を爲だしたのを見て、斯う云ひ足した。『いや、忘れて居りました……唯今持つて来いと仰つしやるので？』

『左様だ、左様だ、うん、それなんだ、持つて来い。伯爵夫人に上げて呉れ。彼のミイテンカは實にわれわれの財寶だなア』と、若者が行つて了まふと、微笑みながら、伯爵が云ひ足した。『彼奴は、出来無いといふことは何ういふことなのか知らんだ。私はその出来無いなどいふことは大嫌なんだ。何んなことでも出来るものだ』

『あ、お金なんて、伯爵、お金なんて、眞個にいろ／＼な悲みを世の中に拵らへるものですわねえ』と

伯爵夫人が云つた。『その癖、このお金は私にやア何うしても無きやアなら無いんですもの』

『お前は恐ろしい費ひ人だよ、可愛い伯爵夫人や、誰も皆知つて居るんだ』と、伯爵は、云つて、そして、妻の手に接吻して、再自分の部屋へ行つて了まつた。

アンナ・ミハイロヴナがベズウホフ家から歸つて来た時には、その金銭は、最早、悉皆新しい札で、伯爵夫人の小さい卓子の上に、手巾で隠されて、載つて居た。アンナ・ミハイロヴナは伯爵夫人が何と無くソハくして居るのに気が付いた。

『え、貴女？』と、伯爵夫人が尋ねた。

『あ、それはく〜ヒドい容體よ。平常の相好は全然無くなつて居ます、病重い事つたら、病重いことつたら、眞個に大變なの、私唯つた二分程居たばかりです、一言と云ひませんよ』

『アンネット、何うぞ、辭退なすつちやア厭ですよ』と、伯爵夫人は、手巾の下から金銭を取り出して、年取つた、瘠せた、威のある顔にはへんに適應無い赤らめた顔で、不意に云つた。アンナ・ミハイロヴナは、直ぐに、伯爵夫人の云つた意味を攫んだ、そして、時を計つて伯爵夫人を抱擁しやうと、最早身體を前へ乗しかけて居た。

『これは、ボリースの爲めに、私から、支度料として……』

アンナ・ミハイロヴナは、最早先方を抱擁して、そして、泣いて居た。伯爵夫人も泣いた。二人は泣いた——二人が信友であつたが故に、優しい心であつたが故に、そして、若い時分に信友であつた自分二人が、今は金銭といふやうな其様な卑しい物のことを考へ無ければならなくなつたが爲めに、それから、自分等の若い日が全く過ぎて了まつたが爲めに……。が、雙方の涙は各自に取つて好い心持であつたのだ。

(十六)

伯爵夫人ロオストフは、自分の娘たちを伴れて、客の大部分と一緒に、客室に坐つて居た。伯爵は、男客の連中を、自分の部屋へ伴れて行つて、珍らしい土耳其烟管の集めたのを見せた。それから一寸々出て行つては、『彼の人は未だか』と、尋ねた。人々は、交際社會で『恐ろしい龍』といふ綽名のある、マリヤ・ヅミイツリエヴナ・アフロオシイモフを待つて居たのだ、この女の名高かつたのは、金があるとか位が高いとか云ふのでは無くつて、その正直なこと、率直な、因襲に泥ま無い行狀との爲めであつた。マリヤ・ヅミイツリエヴナは皇室でも知つて居られる女であつた、莫斯科でも、彼得堡でも、名高かつた、で、兩方の市の人々は、この女に驚嘆して居ながらも、その不遠慮な行狀を、誰も竊然笑つて居た、けれども、この女を尊敬したり恐れたりするのは、誰も異りは無かつた。

烟の濛々とした伯爵の部屋では、丁度其頃、勅諭で公けにされた開戦と、軍隊の徵募の話が出て居た。勅諭は誰も讀んだ者は無かつた。けれども、誰もその出たことは知つて居た。伯爵は大榻の上で、烟草を吹かしながら話し合つて居る二人の男の中に挟まつて坐つて居た。伯爵自身は、烟草を吹かさず話も爲無いで、唯だ、頭を彼方此方と振り向けて、烟草を吹かして居る二人をさも満足さうに見詰め、自分がその兩側の人の間に起こさせた議論に聞入つて居た。

そのうちの一人は、瘠せた、皺の多い、短氣さうな、奇麗に剃り切けた顔の平人で、流行を追ふ若者のやうな隙か無い服装ではあつたが、最早中年を越した男であつた。全然打寛ろいだ體で、大榻の上へ片脚上げ、口の角へ琥珀の吸口を啣へて、顔を擧めながら、時々急に烟を吹き出して居た。これは、老獨身者のサイン

シンといふ、伯爵夫人の従弟で、如何にも皮肉な警句を吐くので、莫斯科の客室では名高い男であつた。彼は、今、その相手の、抜け目無く、身體を濯ひ、毛掃を掛け、扣鈕を掛けた近衛の若々しい、顔の蔷薇色の將校に對して、如何にも倨傲に舉動つて居た。將校の方は、口の中央に烟管を啣へ、少しづつ烟を吸ひ込んで、それを赤い形の好い唇から輪にして吹き出して居た。これが、ボリスを伴れて行つて呉れる筈の、又ナタアシャが、ヴェーラに戀人たと云つて擲擲つた、セメエノフスキ聯隊の將校、中尉ベルグであつた。伯爵はさういふ二人の間に挟まつて、その談話をヂツと聞き澄まして居た。伯爵の好きなことは、一番好きなボストンの次ぎには、談話——殊に、自分が二人の話好きな友達の間で議論を初めさすのに成功した場合の——その人々の談論を傍で聞いて居ることであつた。

「もし、旦那、わが最も尊敬するアルフォンス・カアルリイチ」と、クス／＼笑ひながら云つたシンシンの言葉は、極く平易な露西亞の口語と、全く擇り抜きの佛蘭西語の混合であつたのだが、これが、この男の言葉の特徴であつた。「君は、政府から俸給を受けることになつて居ながら、尙その上に君の隊からも何かしら利益を得る氣で居るのかね」

「いえ、ピョートル・ニコラアイイチ、私は唯だ、騎兵では、利益が、歩兵に比らべて餘程少ないことを知らせ度いばかりなんです。先づ、例へば、私の地位をご覽なさい、ピョートル・ニコラアイイチ。ベルグはキチン／＼と、極く靜かに、そして、丁寧に談話を爲る男であつた。彼の話は何時でも自分自身に關することばかりであつた。彼は、何時でも、自分自身に直接何の關係も無い問題が論ぜられるやうな場合には、全然沈黙を守るのであつた。で、彼は、さういふ風にして何時間も唯だヂツと坐わつた切りで居ても、自分が手持無沙汰になら無いのは元よりのこと、他人にも寸毫も氣の毒とは思はせ無かつた。けれども、談話が彼

に直接關係するやうに爲つて來るが最期、彼はドシ／＼如何にも満足さうに話したのであつた。

「私の地位をご覽なさい、ピョートル・ニコラアイイチ、若し、私が騎兵に居たとすると、中尉であつても、四月目毎に二百留貫らへる切りなんです、所が、今私は二百三十留貫らへるんですよ。ベルグは、如何にも嬉し／＼な親し氣な笑顔で斯う説明して、彼自身の出世が何時でも誰でも希望の主な目的であるに違ひ無いのだと云はぬばかりの顔付で、シンシンと伯爵を見た。それに、ピョートル・ニコラアイイチ、近衛に變りますとね、一層昇進が早いです」と、ベルグは言葉を繼いで、「缺員が歩兵の場合よりは尙然度々出來ます。夫に、私は此二百三十留でなかく巧くやつて行くんですからなア。何うです、そのうちを幾らか残して、親父にも送りますぜ」と、又續け、烟の輪を吹き出した。

「違つたものだなア、獨逸人は、斧の頭からでも小麦を打穀すと、露西亞の俚諺にあるぜ」、シンシンは斯う云つて、口の他の隅へ烟管を移し、そして、伯爵に胸を爲た。

伯爵は噴飯した。他の客たちも、シンシンが話したと見て、聞きに集まつて來た。ベルグは、その連中の冷嘲すやうな顔付や、身を入れて聞いて呉れ無い様子などは、眼に入らずに、やがて、近衛に變つたお蔭で、彼は最早既に、普通師團に居る前の同僚より一步進んだ地步を占めたことを説明した。戦時には隊長は屢戦死するものだから、その直ぐ次の地位に居る自分は極く譯無くその缺位を繼ぐことが能きといふことだの、聯隊で自分は誰にも好れて居ることだの、親父が彼のことをヒドク喜んで居る話だの、先づさういふことを長々と話した。ベルグが左様な話を爲て居る態様といふのは如何にも嬉し／＼で、他人は誰でもそれ／＼自分々々の利害關係を持つて居るものなど、は、全然念頭に浮ば無いといふ態であつた。が、彼の云ひやうが如何にも心持好く、如何にも熱心で、彼の若者らしい自我主義の率直さが如何にも顯然

であつたので、聞き人は誰一人心持を悪くは爲無かつた。

「おい、若衆、君は、歩兵に居やうが、騎兵に居やうが、何時でも旨く行くよ、僕は今から保証つて置くぜ」、シインシンは斯う云つて、ベルグの肩を叩き、そして、大榻から脚を下ろした。ベルグは如何にも嬉しさに微笑んだ。伯爵を真先に、客たちはその後から随いて、客室へと行つた。

それは、集まつた客が、最早やがて食堂へ呼び込まれさうなものと思つて、長くなる談話は始めやうと爲無いが、と云つて、卓子に就くの待ち遠しがつて居るやうに見えてはならぬと、成るべく動き廻はつて、全然黙まつては居無いやうに爲無ければならぬ、晚餐の始まる前には屢ある丁度さういふ間時であつた。亭主夫婦は戸の方を見ては、一寸々々顔を見合はせた。客は、二人の眼付で、誰を、若くは何を待つて居るのか、判じやうと骨折つた。親類の身分の高い誰か、後れたのか、それとも、料理のうちに出来上ら無い品でもあるのかと。

ピエールは、丁度晚餐の始まる時分に來た、そして、一番近くに有り合はせた安樂椅子に、それが部室の眞中央で、誰の通路にも邪魔になるのも構はず、窮屈さうに掛けた。伯爵夫人は彼に話を爲せやうと力めた。が、彼は、誰か探すがあるとでも云ひさうに、如何にも無邪氣な顔付で眼鏡越しに四邊を見廻はして、伯爵夫人が何を尋ねても、唯だ一言か二言の答を爲るばかりであつた。それが爲めに、座が大分白けて來た、が、彼一人それに気が付か無かつた。客は孰れも大抵、熊の話を聞いて居たので、この大きい、肥つた、毒の無さうな男を不思議さうに見て、此様な元氣の無い落着いた男が何うして彼様いふ悪戯を爲たものかと、不思議がつて居た。

「ホンの近頃お歸りなんですな？」と、伯爵夫人が、彼に尋ねた。

「左様です、奥様」

「宅にお逢ひなさいませんでしたね？」

「いえ、奥様。彼は、場合外れに、微笑んだ。

「此頃まで巴里においでましたのね。なか／＼面白い所でせうね」

「なか／＼面白いんです」

伯爵夫人はチラとアンナ・ミハイロヴナと眼を見合はせた。アンナ・ミハイロヴナは、ピエールを引受るといふのだと氣取つた、で、彼の側に坐つて、彼の父親のことを話した。が、彼はそれにも伯爵夫人同様ホンの一言二言で成り立つた返答しきや爲無かつた。他の客は悉皆一さい幾つもの集團になつて忙しさに話し合つて居た。「ラズモオフスキ家」——「まア眞個に善いこと」——「まア親切ですわねえ」——「伯爵夫人アブラアキシン」——斯ういふ切々の聲が方々から聞えて來た。伯爵夫人は起ちあがつて、次の室へ出た。

「マリヤ・ヅミイツリエヴナは？」と、尋いて居る伯爵夫人の聲が聞えた。

「私ですよ」と、荒つほい聲が返答として聞こえた、そして、直ぐその後、マリヤ・ヅミイツリエヴナが部室へ入つて來た。娘連中は勿論、年配の女連中も、極く年寄りの外は、悉皆起ちあがつた。五十歳の肥つた女のマリヤ・ヅミイツリエヴナは戸口で止まつて、白髪交りの捲毛のある頭を眞直にして、客を眼下に見渡し、それから、袖口をたくしあけるやうに爲て、緩々と長上衣の廣い袖の形を整した。マリヤ・ヅミイツリエヴナは、何時でも露西亞語しきや使は無いのであつた。

「今日のお祝ひの主の奥様とお子さん方のご健康とお幸福を祝ります」と、他の音を悉皆壓して了さふや

うな高い量の多い聲で云つた。「さアお前さん、年老つた罪人」、その手に接吻して居た伯爵に振り向いて、「莫斯科には飽ましたらう——犬を伴れて出る所が何處も無い？ 左様、お前さん、何うも仕方が無い。斯ういふ雛鳥どもが大きくなるんだから……」と、娘たちを指した。「厭でも應でも、貴下は、彼等に若い男を見付て遣ら無きやアなりません」

「これ、私の哥薩克兵？」（マリヤ・ヅミイツリエヴナはナタアシャを何時も哥薩克兵と呼んで居た）、平氣で笑ひながら手を接吻しに出て来たナタアシャの手を撫でながら、斯う云つた。「お前は眞個に不可い娘だねえ、でも、私はお前が好きさ」

圖抜けた大きな合切袋から、垂下物の付いた琥珀の耳輪を出して、ナタアシャに遣つた、ナタアシャの嬉しさうな祝日の顔がボオツと赤くなつた、マリヤ・ヅミイツリエヴナは直ぐ振り向いて、ビエールに聲を掛けた。

「もし、もし、此所へおいでなさい、貴下」と、故意と穩和に優しくした聲で云つた。「此所へおいでなさい、貴下……」そして、事ありけな權幕で、袖をグツと高くたくし上げた。

ビエールは、眼鏡越しに無邪氣に先方の顔を見ながら、傍へ行つた。

「ズツと此方へ、ズツと此方へ、貴下。貴下の御親父が羽振りの好かつた眞最中に遠慮會釋無しに眞實の事を云つたのはこの私だけさ、だから、貴下にもさうするのが私の神聖の義務なんでさアね」マリヤ・ヅミイツリエヴナは言葉を止めた。誰も、これはホンの前置だと思つたので、その後を黙まつて待つて居た。「面白い男さね、眞個に、面白い男さね。……現在の父親が知死期の床に居るのに、散々ばら騒ぎ廻つて、熊の上へ巡査を跨らせるなんてんだもの。情無いことだね、貴下、情無いことだね。お前さんは戦争に行つた方

が宜いんだよ」

マリヤ・ヅミイツリエヴナは振り向いた、そして、艱然のことで噴飯すのを堪へ切つた伯爵に手を預けた。

「もし、御馳走のお準備は最早出来たでせうねえ、え、マリヤ・ヅミイツリエヴナは云つた。伯爵が、ヅミイツリエヴナの手を引いて先立ちをして、直ぐ其後に、伯爵夫人が、ニコライを聯隊へ伴れて行つて呉れる筈になつて居たので、重なる客として扱はれた騎兵の大佐に扶けられて續き、その次が、アンナ・ミハイロヴナとシインシン。ベルグはヴェーラに腕を貸し、ジュリイ・カラアギンは微笑みながらニコライと歩いた、で、その後へ續いた一對宛の行列は、廣室を横切つてズツと列んだ、その最詰に、家庭教師や保母に附添はれた、小兒連が、一人づゝ歩いて行つた。給仕人はバサ／＼と歩き廻り、椅子の軋る音が爲、客が席に就きだすと、奏樂團が奏しだした。やがて、伯爵の家のその樂隊の音樂が、肉刀や肉叉のカチャ／＼いふ音、客の語聲、給仕人の急ぎ足の音などに、没せられて了まつた。伯爵夫人が卓子の一端を主宰した。右側はマリヤ・ヅミイツリエヴナ、左側はアンナ・ミハイロヴナで、それから、他の女客がズツと列んで居た。他の一端には、伯爵が、驃騎兵の聯隊長を左にし、シインシン及び他の男客を右にして、坐つた。大きい卓子の片一方の側に、若い連中のなかの大きい方が坐つた、ベルグの側にヴェーラ、ボリスの側にビエールと云ふ風に。も一つの側には、家庭教師や保母に付き添はれた小兒たちが居た。伯爵は、上硝子の壺や果實皿の間から、水色リボンで飾つた白い帽子を冠つた妻の顔を覗き、精出して、隣りの人々に酒を注いで遣りながら、自分の分を忘れは爲無かつた。伯爵夫人も亦、亭主としての義務には十分氣を付けて居ながら、鳳梨の間から夫を意味ある眼付で一寸々々見遣つたのだが、夫の顔が、禿頭が白髪に對照されて一層赤く見えるやうに思つた。女客の側には談話の調子の好い吹きが有つたが、卓子の他の側では、

男の聲々がだん／＼と高くなつた。就中、驃騎兵の聯隊長の聲が一段高く聞えた。聯隊長は、だん／＼赤くなつた。到頭伯爵が彼を模範として皆に示めすやうになつた位にまで、飽まで喰ひ、飽くまで飲んだのであつた。ベルグは優しい笑顔で、戀愛は此世のものでは無く天の感情だと話して聞かして居た。ボリスは新たに友達になつたピエールに、客の名を教へて居ながら、眞向に居たナターシャと一寸々々眼を見合はせた。ピエールは餘り談話を爲無いで、知ら無い人々の顔を見廻し、そして、多量喰つた。スープ二種のうちで彼はトルチユウを擇んだ、それから、魚バスチイから山鶏までの間のいろ／＼な料理で、一皿も斷つたのは無かつた、そして、膳部掛が、隣の人の肩の上から口拭巾に纏んだ塚を神祕なものやうに突き出して「生マデイラ」とか、「ハンガリー」とか、「ライン酒」とか呟ぶやいて、勧める酒を、何んな種類のも適がさず引受けた。何の客の前にも置いてあつた伯爵の紋を刻んだ四つの上硝子の杯のなか／＼、手當り放題に酒杯を取つて、酒を味はひ／＼飲んだのだが、客を見詰める彼の顔は宴會が進むに随つてますます愛嬌深くなつて行つた。眞向に坐つて居たナターシャは、十三歳の娘が、ホンの少し前に接吻を取り換した、自分の甚く愛して居る男の子を見詰めるやうに、ボリスを見詰めた。その見詰める視線は時々ピエールの顔へと遣よつた、そして、小さい娘の可笑しさうな、上氣した顔を見ると、彼は、何故とも知れず自分も笑らひ度くつて堪まら無い氣が爲たのであつた。

ニコライは、ソオニヤとは餘程離れて、ジュリイ・カラアギンの側に坐つて、矢張り前のやうな我知らずの笑顔で、その娘と話して居た。ソオニヤはお付合ひの微笑を含んで居た、が、嫉妬に悶へて居るのが見え透て居た。乍ら蒼くなると思はれるうちに、直ぐ、赤くなつた、そして、その全力が、ニコライとジュリイが何を話して居るのか、聞き取らうと爲るのに集中されて居た。保母は、受持の小兒たちを少しでも侮どる

やうな眞似を爲るものが有つたら直ぐ喰つて掛るぞと云はぬばかりの顔付で、四邊をキョト／＼見廻して居た。家庭教師の獨逸人は、料理や、後附や、酒の種類を悉皆覚えて置て、後で、故郷の獨逸の知人どもに詳しい手紙を遣る積りで居たので、口拭巾に纏るんだ塚を持つた膳部掛が自分の所へは塚を出さずに通り過つたのが、甚く癢に觸つた。獨逸人は肩を擧げて、自分はその酒を受ける氣は無いのだと見せやうと力めて居たもの、自分が、その酒が欲しいのは、それで渴きを止めやう爲めでも無く、又唯だの慾張りからでも無く、全く何んなものか知つて置き度いといふ綿密な知識欲からに外ならぬのを、誰も察して呉れるものはあるまいと思つて、心を惱ませたのであつた。

(十七)

男連中の居た卓子の側では、だん／＼談話に身が入りだして居た。聯隊長は、宣戦の布告が最早彼得堡で出て居て、自分は現に、其の日總司令官の所へ急使が持つて来た分を見たと言つて居た。

「何だ筈棒な、ボナバルトと戦を始めるなんて、其様な馬鹿なことを誰が思ひ付いたんだい？」と、シンンが云つた。「奴は最早既に塊地利を凹まして了まつたぢやア無いか。今度は、此方の順番に爲ら無きやア宜いと思つて居るんだに」

聯隊長は、肥つて、背の高い、多血質の獨逸人であつたが、それでも、何處までも軍人で、愛國者であつた。彼はシンンシンの言辭が癢に觸はつた。

「何故かといふ理由は、貴下」と、獨逸訛の多い言語で云つて、「陛下が貴下の今仰つしやつた事態を善く御承知であればこそですぞ。布告のなかには、露西亞の上には、迫り来る危険、帝國の安康、その國威及び、そ

の同盟の神聖を危くするが如き事態を坐視遊ばさるゝことは能きぬと、仰せられてあります。彼は、布告全體の意味の中心が唯だその一語の上に懸つて居るとでも云ひさうに、『同盟』といふ語を甚く力を入れて云つた。それから、この男の特質の、公務上の事柄に對する綿密な記憶力で、布告の前提の言詞を繰返した。『此に於て、皇帝の唯一の動かすべからざる企圖、即ち確乎たる基礎の上に平和を建てんとする所期は、彼をして、國外に兵師の一部を派し、以て、この新企畫の遂行に力むるに、決せしめた。これが開戦の理由です。貴下』彼は斯う結んで、勿體振つた態度で酒盃を一息に仰飲つて、賛同を求めらるやうに伯爵の方を見

た。

「貴下は『エレマ、エレマ、家に引込んで、自分の鑊に氣を付けろ』といふ俚諺をご存じかね」と、シンシンは、顔を顰め、直ぐ又微笑みながら云つた。それが、髪一本の差違も無くわれれに適合まるんです。ねえ、スヴェーローフでさへへたくと敗ぶれて了まつたぢやありませんか、現代のスヴェーローフは今何處に居ますかね？。伺ひ度いものですか？」露西亞語かと思へば、乍ち佛蘭西語になり、直ぐ又元へ返へる、始終さういふ言葉使で、斯う云つた。

「われれは、われれの血が一滴でも残つて居るうちは戦闘を止てはならん」と、聯隊長は卓子をドンと云はせて、云つた。『大君の爲めに死なんければならん、さうすれば、何も云ふことは無いんぢや。そして、議論はなるべく少く、又伯爵に振り向き、成る可くといふ語を引張つて云つて、斯う結んだ。』われれ、老驥騎兵は事態を斯う見ます、われれの云ふべきことは唯だそれだけぢや。君は何う思ふね、其所な若い人、若い驃騎兵』と、戦争の議論が始まつたと見て取つて、ジュリイとの談話をバツタリ止めて、聯隊長の顔ばかり見詰めて耳を引立て、居たニコライに向いて、云ひ足した。

「全く御同意です」と、ニコライは、クワツと赤くなつて答へて、現に今非常な危険な位地にでも居るかのやうな必死を極めた顔付になつて、血を捻り廻したり、酒盃の位置を更たり爲た。『露西亞人の覺悟は、勝つか、で無くば、死ぬかの二つ一つだと確信して居ります』と、彼は云つた。が、彼自身も、さう云つて了まつた後では、其場の他の人々と同じやうに、餘りに場外れの熱心で云ひ過ぎたと氣が付いたので、後は何と無くモヂくして居た。

「貴下の今云つたことは、立派な言辭よ」と、側に居たジュリイが、熱心に云つた。ソオニヤは、ニコライが物を云つて居るうちは、身體ぢう慄へ、耳、耳の後、それから、頸から肩へ掛けて眞赤に爲つた。ピエールは、聯隊長の言辭をヂツと聞いて居て、賛成さうに、頭を頷かせた。

「立派な考だ」と、彼は云つた。

「君は眞の驃騎兵ぢや、若者」と、聯隊長は再卓子をドンと云はせて、叫んだ。

「其所ぢやア何事で其様な騒ぎを爲て居るんだね」と、卓子の向側から尋くマリヤ・ヅミイツリエヴナの濁聲が不意に聞えた。『何の爲めに、卓子をドンと云はせるんですか』と、聯隊長に言葉を掛けた。『誰に向いて、さう憤然となつておいでなさるね？。佛蘭西人が直ぐ其所へ來たやうに思つておいでのやうですね』

「私は眞實を云つて居る所です」と、驃騎兵の聯隊長は、微笑んで、云つた。

「悉皆戦争の談話ですわい」と、伯爵が卓子越しに叫んだ。『家の俸が出ますんです、マリヤ・ヅミイツリエヴナ、ねえ、家の俸が出るんです』

「でも、私は子息を四人軍隊に出してありますよ、けれども、悲しいとは思ひませんよ。世の中のことは悉皆神様の御手にあるのですわね、家の裡でも死ぬものは死にます、戦場だつて、神様のお助がありません

う」と、卓子の向側から有りながら、マリヤ・ヅミイツリエヴナの深い聲は、何の苦も無く此方へ唸り返つた。

「全くです」

で、談話は又元の通り、二つの集團に片寄つて了まつた。一つは婦人の卓子の側、一つは男子の方の側といふ風に。

「貴女に何うして尋けるもんですか」と、小さい弟がナタアシヤに云つて、「貴女は必然尋きやア爲無いや」

「私尋くわ」と、ナタアシヤが答へた。顔が不意に赤くなつて、必死になつたやうな、冷嘲すやうな思ひ切つた表情に爲つた。起ちあがつて、ビエールに聞いて居るといふやうな胸を爲て、母親に聲を掛けた。

「母上様」と、ナタアシヤの小兒らしい胸 聲が、卓子を横断つて響き渡つた。

「何です？」と、伯爵夫人はギョツとして尋いた、が、娘の顔付で何か悪戯だなど見て取つたので、叱り付けるやうな態に頭を動かし、娘の方へ向けて荒々しく手を振つた。

何處の談話もピタリと止んだ。

「よう、母上様。何んなブデンが出るの？」。ナタアシヤの小さい聲が、更に斷乎と落着て響いた。

伯爵夫人は睨めやうとしたが、さう能き無かつた。マリヤ・ヅミイツリエヴナは太い指を振つた。

「哥薩克兵」と、嚇すやうに云つた。

客の大半は、この悪戯を何う爲るだらうと、両親の顔ばかり見て居た。

「今にご覧なさいよ」と、伯爵夫人が云つた。

「母上様。何んなブデンが出るの？」と、最早自分の悪戯は悪戯で通るに違ひ無いと安心して、ナタアシヤは、大膽な無遠慮な笑聲で叫んだ。ソオニヤと肥つた小さいベエチヤは、艱然噴飯すのを堪らへて居た。

「尋いたでせう」と、ナタアシヤは小さい弟とビエールに囁き、再ビエールの顔をヂツと見た。

「アイス・ブデンだよ、けども、お前には遣りません」と、マリヤ・ヅミイツリエヴナが云つた。ナタアシヤは何にも恐いことは無いと見て取つたので、マリヤ・ヅミイツリエヴナをさへ恐がら無かつた。

「マリヤ・ヅミイツリエヴナ。何んなアイス・ブデンなの？。私アイス・クリイムは嫌ひよ」

「カアロフト・アイス」

「いゝえ、何ういふ種類なの、マリヤ・ヅミイツリエヴナ、何ういふ種類なの」と、ナタアシヤは、殆ど絶叫した。「さア教へてください」。マリヤ・ヅミイツリエヴナも伯爵夫人も噴飯した、客もそれと一緒に哄と笑つた。誰も彼も、マリヤ・ヅミイツリエヴナの返答には無く、マリヤ・ヅミイツリエヴナを左様な風に凹ますだけの氣象と頓智を持つて居たその小さい娘の壓伏し難い大膽と氣轉とに笑はせられたのであつた。

ナタアシヤは、鳳梨アイスだと聞かされるまでは止め無かつた。氷の前に、シャンパンが廻はされた。再、樂隊が奏でだした、伯爵は伯爵夫人に接吻した、で、客は卓子から起つて伯爵夫人を祝し、伯爵から始め、次に、小兒たちに對し、それから、相互間といふ順で、卓子越しに酒盃を打合せた。もう一度、給仕人たちが駆け廻り、椅子が床を軋り、といふ前と同じ順序で、赤い顔になつた客は、客室や、伯爵の書齋へと返つた。

骨牌卓子が開かれた、ボストンの組々が出来た、そして、伯爵の客たちは、二つの客室と、喫煙室と、それから、書庫へ、思ひくりに陣取つた。伯爵は、扇形に骨牌を廣げて持ちながら、艱然のことで、何時も晩餐後の假睡に落ち無いで居て、何を見ても、ハアハア笑つて居た。若い連中は、伯爵夫人の發議で、クラビコオドとハアプの周圍に集まつた。一番にジュリイが衆皆に要請まれて、ハアプで變調の有る曲を一つ弾いた。それから、他の若い婦人連中と一緒になつて、樂才があるといふ評判の高かつたナタアシヤとニコライに何か歌つて呉れと頼んだ。成人であつたかのやうに誰からも扱はれたナタアシヤは、確にそれが得意らしくも見えたが、又それと共に、羞縮もしたのであつた。

「何を諂うですか」と、尋いた。

「あの「泉」さ」と、ニコライイが答へた。

「左様、では、大急ぎでやら無きやア。ボリリス、おいでなさい」斯うナタアシヤは云つた。『けども、ソオニヤは何處?』ナタアシヤは見廻した、そして、その友達がその部室に居無いのを見て、探がしにと駈け出した。

ソオニヤの部室へ駈け込んでも、其處にも居無かつたので、今度は、小兒部室へ駈け込んだ、ソオニヤは又其所にも居無かつた。ナタアシヤは、ソオニヤが廊下の大箱の上に居るに違ひ無いことを知つた。廊下の大箱は、ロストオブ家の若い女姓連中の愁嘆場所であつた。左様、ソオニヤは箱の上で、桃色薄紗の上衣を、年取つた伽女の汚れた編の羽毛蒲團の上に押し潰すやうにして、突つ伏して居た。顔を指で隠して、ソオニヤは歎息して居て、小さい露出の肩が波を打て居た。終日中嬉しさうで、イキリ立て居たナタアシヤの誕生日顔が倏忽變つた、眼はヂツと据はつたやうになり、それから、太い頸が震へ、そして、唇の隅がダレ下

つた。

「え、ソオニヤ。何なの……。貴女何うしたの。あーあーあ。……」で、ナタアシヤは、大きい口をアングリ開き、太く醜い顔になつて、自分でも何故とも解からず、唯だソオニヤが泣いて居たといふ譯ばかりで、幼兒のやうに泣いた。ソオニヤは頭を擧げて、返答しやうと試みたが、それは能き無いで、ますます突つ伏して了まつた。ナタアシヤは、水色の羽毛寝床の縁に坐り、その友達を抱締めながら、泣いた。ソオニヤは、艱然のことで、起き直つて、涙を干かして、話した。

「ニコリインカが一週間の内に發つたよ……。彼の人の……。命令書が……。來たの……。自分で私にさう云つたの……。でも、私それで泣く積りぢやア無かつたの……。ソオニヤは手に携つて居た紙を見せた、それにはニコライイの詩が書いてあつた。『私泣くんぢやア無かつたの、でも、貴女にだつて……。誰にも解から無い……。何んなに好い心の人なんでせう』

で、再ソオニヤはニコライイの心が何んなに立派だかといふことを考へ出して泣き沈んだ。

「貴女の方は大丈夫よ……。私嫉みは爲無くつてよ……。私ボリリスも貴女も好きなの、少し自分を落着かせて、斯う云つた。『ボリリスは眞個に好い人ねえ……。貴女がたの方は寸毫も難づかしいことは無くつてよ。だけれども、ニコライイは私の従兄でせう……。市總祭自身が……。爲て……。で無ければ、何うしても駄目よ。だもんで、母上様に云へば』(ソオニヤは伯爵夫人を母親と頼み、又現に母親と呼んで居たのだ)『母上様は、私がニコライイの出世を邪魔するんだと仰しやるだらうし、私を人情の無い、恩知らずだと仰しやるでせう、けれども實際は……。神様に誓つて』(ソオニヤは十字を切つた)『私母上様をそれは、大切に爲てるのよ、それから、貴女たち悉皆にだつて左様だわ、唯だヴェーラだけは……。何故でせう? 私何を彼女に爲たでせうね

？私貴女たちの爲めなら、何んな物だつて犠牲に爲やうと思つてる位、貴女たちを有り難く思つて居るんだわ、でも、私何にも持つちやア居無いですもの……」

ソオニヤはそれ以上を云ひ得無かつた、そして、再、両手を當てた顔を羽毛寝床のなかへ埋めて了まつた、ナタアシヤは慰めやうと力めた、けれども、ナタアシヤの顔は、その友達の心配の苦しさを十分に解したことを示めして居た。

「ソオニヤ」と、ナタアシヤは、従姉の心配の眞因を推量し得たとでも云ひさうに、不意に云つて、『ヴェーラが晚餐が始まつてから以來、貴女に何か云つたんでせう、必定？。左様？』

「左様なよ、斯ういふ詩をニコライが書いたのよ、私他のも寫しといたの、するとねえ、彼女が、それが私の机の上にあるを發見けたの、そして、母上様に見せると云ふの、それから、私は思知らずだつて、母上様はニコライに私と結婚することを許るさ無いで、ニコライはジュリイと結婚するんだらうつて、云つたのよ。ねえ、ニコライは今日は始中終ジュリイの傍にばかり寄つてたでせう。……ナタアシヤ。何故でせうね」

で、又ソオニヤは尙一層甚く歎けけた。ナタアシヤはソオニヤを引き起して、抱き締め、そして、涙の間から微笑みながら、慰め始めた。

「ソオニヤ、彼女の云ふことなんぞ眞に受け無くつて可いことよ、ね、眞に受けちやア不可いわ。ニコライアイと、私たち三人で以つて、喫煙室で、晩食の後で話し合つたことを貴女覚えて居て？。え、何うするのが宜いかあの時極めたぢや無いの。何う極めたんだか、私今全然は覺えちや居無いんだけども、貴女覚えて、大丈夫行く筈ぢやア無かつたの。そら、シインシン伯父さんの弟は、第一位従妹に結婚したぢ

やありませんか、私たちの方は第二位従兄姉妹なんでせう。ボリースはそれは造作無くやれちまうと云つてよ。全然彼の人に私話したわ、ね、彼の人とはそれは、恰好で善い人なんですもの」と、ナタアシヤは云つた。……「泣か無いでね、ソオニヤ、可愛い、私の大好きな、大切の大切のソオニヤ」と、笑ひながら、ソオニヤに接吻した。『ヴェーラは意地悪よ、彼奴のことなんぞ氣に掛け無いでね、大丈夫心配することは無くつてよ、ヴェーラは母上様に話しやアし無くつてよ。ニコラインカが自分で母上様に話すわよ、ニコラインカはジュリイのことなんぞ一度も何とも思やアし無くつてよ』

で、ナタアシヤはソオニヤの頭に接吻した。ソオニヤは起き上がった、で、仔猫が甦へつた、眼を煌めかし、尾を振り、和かな前脚で跳びあがり、生れ付きの仔猫の爲方通りに、玉を弄ばうといふやうな心持になつたらしかつた。

「行きませう、さア」

『で、ねえ、私の向ふに坐わつてた彼の肥つたピエールを貴女知つて、眞個に可笑しい人なのよ』と、ナタアシヤは、止まつて、不意に云つた。『あ、眞個に面白いわよ』で、ナタアシヤは、廊下を駈け出した。上衣から羽毛屑を拂ひ落とし、詩を胸衣の、小さい喉と、突き出した胸骨との間の所へ挿し込んで、ソオニヤは、顔を赤くして、軽い足調で、ナタアシヤの後に隨いて、廊下を喫煙室へと駈けた。客の所望に任せて、若い連中は「泉」といふ四部合唱を歌つた、誰も彼もそれを面白がつた、それから、ニコライアイが、此頃覺え

た歌を詠った。

「月のやさしき光の下に、

一人し思ふぞけにこゝちよき。

愛しき人一人尙世にありて、

我をのみ懐ひ、我をのみ夢み、

美し小指今宵もまた往時のごと、

黄金造りの立琴の面にさまよひて、

美しくしき、熱籠もる樂を奏で、

そが傍にと我を呼ぶらん、

明日よ、さなり、幸福は近づきぬと、

されど、あはれ、物皆過ぎ去りぬ、

我が女早世に在らず」

ニコライがこの歌の最後の行を詠ひ切るか切ら無いか、若し連中は、大廣室で舞踏を始める支度を爲だした、そして、樂隊は、奏樂席で、足踏を爲、咳嗽拂ひを爲始めた。

ビエールは客室に坐つて、シインシンが、外國から歸つたばかりの男には面白からうと思つて、話して

呉れて居た時事談を、寸毫も面白く思はぬながらも、聞いて居た。他の五六人が談話に加はつた。奏樂團が奏し出すと、ナタアシヤが客室に入つて来て、顔を赤くして、笑ひながら、ゾカ／＼とビエールの傍へ行つて、「母上様が、貴下に踊つて頂けて云ひました」

「私が入ると全體の型を崩してしまふでせう」と、ビエールは云つた。「ですが、貴女がお師匠さんに爲つてくださるんなら……」で、太い腕を、相手の背に合ふやうにズツと低く下けて、細そりした小さい娘に手を貸した。

踊る連中が立場を極め、樂隊が調子を合はせて居る間、ビエールは小さい相手と一緒に坐つて居た。ナタアシヤは如何にも嬉しさうであつた、自分は、今成人、而かも外國から歸つたばかりの人と踊るのもので、誰にも見える所に坐つて、成人のやうに彼と話して居た。ナタアシヤは、誰か成人の婦人から持つて居て呉れと頼まれた扇を手に携つて居た、で、恐ろしく氣取つた態付（何時何處で覺えたのか）で、扇使を爲しながら、顔全體で微笑みながら、相手と話して居た。

「太した娘さんだね。見て遣つて下さい、見て遣つて下さい」と、大廣室を横断りながら、老伯爵夫人が、ナタアシヤに指し、云つた。ナタアシヤは赤くなつて、笑つた。

「あら、何なの、母上様？。何で笑ふの？。何がヘンなのよ？」

三番目の蘇國振の最中に、伯爵とマリヤ・ヅミイツリエヴナが勝負して居た客室の方では、椅子の動く音がガタ／＼した、そして、自分の好い客や、年取つた連中の大部分は、長く坐つて居た後の伸身を爲て、紙入だの、財布だのを衣囊へ戻して、大廣室の戸口へ出て來た。眞先にマリヤ・ヅミイツリエヴナと伯爵が、

両方とも如何にも晴々しい顔色で来た。伯爵は、バレエの踊子のやうな調態と氣な勿體振つた風で、輪のやうに張つた腕をマリヤ・ヅミイツリエヴナに貸して居た。彼は、身體を眞直に伸ばし、顔はヘンな嬉しさうな心得顔の微笑で輝いた、そして、蘇國振の最後の型が了まふや否や、奏樂團に向けて手を叩き、「セエミイヨン、ダニエル・クウバア」を知つて居るかい」と、第一ヴァイオリンに叫んだ。

それが、伯爵が若い時分に踊つたお箱の舞踏であつたのだ。(ダニエル・クウバアといふのは英國振の一つの型の名であつた)。

「父上様をご覧なさい」と、ナターシャが、部室全體へ叫んだ(自分が成人の相手と踊つて居たことを全然忘れてしまつて)、で、膝に觸れるばかりに、捲髪の頭を潜ぐらせて、廣室の隅々まで響くやうな聲で笑ひ出した。勿論、廣室の人は誰も彼も、浮れ出したその老紳士を面白さうな笑顔で見居た。伯爵は、自分よりも背の高い、如何にも氣高い態の相手のマリヤ・ヅミイツリエヴナの側に立つて、兩腕を輪に曲げ、音樂に合せて、それを揺り、肩を動かし、兩脚を廻して、踵で軽く床を叩き、そして、圓るい顔にホヤ／＼微笑を湛へて、いよ／＼始めるぞといふ態様を見物人に見せた。奏樂團が、輕快な露西亞のツレバアクに何處か似通つたダニエル・クウバアの陽氣な何うしても靜然して居られぬやうな調子を奏しだすや否や、大廣室に通ふ有らゆる戸口は、倏忽、家の耕奴の微笑を含んだ顔で一杯に爲つた——男連は一つの側、女連は他の側といふ風に別れて——彼等は、主人の浮かれるのを見に来たのだ。

「旦那だ、旦那は驚のやうに豪いんだ」と、年取つた乳母が高聲で云つた。

伯爵は舞踏は上手であり、自分でもそれを知つて居た、けれども、彼の相手は寸毫も踊れず、又善く踊らうといふ氣も無かつた。マリヤ・ヅミイツリエヴナの大きい勿體のある身體は、大きい腕を兩側へブラリと

させて、(合切袋は伯爵夫人に預けたのだ)、眞直に立つて居た。踊つて居たのは、その嚴づかし氣な奇麗な顔ばかりであつた。伯爵の身體ぢうに表はれたことが悉皆、マリヤ・ヅミイツリエヴナの方では、だん／＼輝いて来るその顔色とヒク／＼する鼻とで表はされたのであつた。伯爵は精力を益々多く費して、撓やかな脚で人の意表に出るやうな自由自在な趾頭回旋の跳返を行なつて見物人を魅して居る間、マリヤ・ヅミイツリエヴナは、全く無造作に、肩を一寸々動かし、腕を彎けなどしながら、足で音樂に合せて調子を取つて居たのだが、さういふ所が、その婦人の勿體のある體姿と平常の威かつけな起居舉動に對照すると、誰にも甚く面白く思はれて、なか／＼強い印象を人々に與へた。舞踏は益々勢付いて来た。他の舞踏者たちは寸毫も見物人の注意を惹くことは能き無かつたし、又惹かうとも爲無かつた。總ての注意が伯爵とマリヤ・ヅミイツリエヴナの上に吸収された。ナターシャは、四邊に居た誰でも袖や長上衣を引張つて、父親を見させやうと爲て居たが、皆は、それを待つに及ばず、前から二人の舞踏者から眼を離さ無かつた。舞踏の間の間が来ると、伯爵は深い息を吐いて、手を振つて、もつと調子を早めると樂隊に叫んだ。だん／＼速く、だんだん輕る／＼と、今爪頭で廻り、今踵で廻りながら、伯爵はマリヤ・ヅミイツリエヴナの周圍を踊り廻はつた。到頭相手の婦人を元の位置へ廻し戻し、撓やかな脚を後へ蹴上げ、汗みづくになつた頭と笑顔で、點頭を爲、右の腕を廣くグルリと廻して、ナターシャの笑聲が就中一番高く聞えた喝采と笑聲の裡に、踊り納めた。二人の舞踏者は突つ立つたなりで、大きく息を吐きながら亞麻の手巾で顔を拭いた。

「先づ斯ういふ風に前日には踊つたものです、貴女」と、伯爵は云つた。
「ダニエル・クウバア萬歳」と、マリヤ・ヅミイツリエヴナは云つて、袖をたくし上げ、深い長い息を吸つた。

(十九)

ロストオフ家の舞踏室で、人々が六番目の英國振を踊り、樂隊が疲れて来て調子外れを奏し、疲れた従僕や料理人どもが夜食の準備を爲して居たのと丁度同じ時刻に、伯爵ベズウホフは卒中の六度目の發作に襲はれた。醫者たちは、最早回復の望は全く無いと宣告した、病人は不省のうちに、贖罪式と聖禮を受けた。末期の塗膏式を行う爲に、種々準備が爲れて居る最中で、家中、斯ういふ場合の常の、間時の混雜と不安が満ち渡つて居た。戶外では、葬儀商どもが門の内に集まつて、乗り付けて来る馬車から見られ無いやうに氣を付けながら、伯爵の葬式に就て善い注文を受けやうと熱心に待ち設けて居た。伯爵の容體を尋ねに、絶えず副官をよこして居た莫斯科總督が、カザリン朝の名だゝる大身伯爵ベズウホフに最後の訣別を告げる爲めに、その晩自身來たのであつた。

壯麗な應接室は一杯であつた。總督が、病人と差し向ひで半時間居てから、病室から出て來た時には、客は残らず謹んで起ちあがつた。人々の目禮に極く幽に會釋して、彼は、醫者、僧侶、親戚などの目前を能きるだけ速く通れやうと骨折つた。此二三日以來だんく蒼く瘦せて來た伯爵ヴァシイリは、總督を送くつて出た、そして、小聲で何事か二三遍繰り返して彼に云つた。

總督を送つて了まつてから、伯爵ヴァシイリは、唯一人廣室の椅子の上で、片脚を高く重ね膝に腕を置き、そして、兩手で眼を隠して、坐つて居た、暫時左様爲て居てから、起ちあがり、平常よりは速い歩調で、長い廊下を横切り不安な眼付で四邊を見廻しながら、一番上の伯爵嬢の部室をさして、家の奥へと行つた。伯爵が後にした薄朦朧とした明りの應接間——病室の次の室——の人々は、切れぐの囁語で話し合ひ、や

がて、黙まり、そして、末期に近づいて居る人の部室へ通ふ戸が、誰か入るか、出るかで、軋る度毎に、待ち設けるやうな尋ねるやうな顔でその方を見た。

「人間の壽命は」と、何かしら僧職の者だらうと思はれる小男が傍に坐つて自分の話を無邪氣に聞いて居た婦人に云つて、「人間の壽命は極まつて居るものでして、その極り以上に出ることは決してございませぬ」

「末期の塗膏式が間に合ふでせうかねえ」と、その婦人が、相手の職名を云ひながら、この事件には自分

は自分で説を持つて居るのだといふ態で云つた。

「それは神祕です。貴女」と、僧職の男は、丁寧に梳いた半白の髪の毛が少しばかり残つて居る禿頭の上を撫でながら、答へた。

「彼は誰です。總督自身なんですか」と、部室の他の隅では、尋いて居る人々があつた。「何て若く見える人なんでせう」

「あれで、六十歳を越して居るんですぜ。………伯爵は最早誰も分から無く爲つてるといふぢやアありませんか、ねえ？末期の塗膏式を爲る積りなんでせうか」

「私の知つた者で、末期の塗膏式を七度受けたのがありますよ」

二番目の伯爵嬢が涙を眼に溜めて、病室から出て來て、カザリンの肖像の下の卓子に腕を載せて形の好い態様に坐つて居た國手ロオレエンの傍へ坐つた。

「極く好い天氣で、醫者は天氣の間に佛蘭西語で斯う答へた、「極く好い天氣です、伯爵嬢、それに、莫斯科では、宛然田舎に居るやうな好い心持です」

「え、眞個に左様ですね」と、伯爵嬢は、溜息しながら、云つた。「何か飲む物を上げては？」ロオレエ

ンは少時考へた。

「薬は上りましたね？」

「え、」

「医者手控を見た。」

「白湯を一杯に中へ一摘み(華奢な指で一摘みは何れ程だかを見せて)『酒石英をお入れなすつて』

「決して無いことなんぢやが、獨逸人の醫者が、副官に、片語の露西亞語で斯う云つて、『第三の發作以後回復することはね』

「實に強い體質に違ひ無い」と、副官は云つて、『で、この大財産が一體誰の物になるでせうなア?』囁語で斯う云ひ足した。

「候補者が幾人か直に出て来るわい」と、獨逸人は、微笑みながら答へた。誰も彼も再戸の方へ向いた、戸は軋つて、ロオレエンの指圖通りの飲み物を拵へた二番目の公爵嬢が、それを病室へ持つて行つた。獨逸人の醫者は、ロオレエンの所へ行つた。

「明日の朝まで保つちやらうかね」と、滅茶苦茶な佛蘭西語で尋いた。

ロオレエンは、屹と結んだ唇と、嚴ぶかし氣な顔で、鼻の前に指を動かして、否定の意味を知らせた。

「今夜、それよりは保たん、病人の状態を過またず診斷して、それを明言することの能きるのを得意に思ふ落着た笑顔で、低聲に斯う云つて、そして、歩いて行つて了まつた。

其様なことの有つて居る間に、公爵ヴァシイリは公爵嬢の部室の戸を開けた。

部室の裡は薄暗かつた、聖晝の前に唯だ二つの夜燈が點いて、香と花の好い香がして居た。部室は何處も彼處も小形の道具ばかりで、小さい戸棚、小さい本箱、それから小さい卓子といふ風に何でも小さかつた。衝立の蔭には、高い羽毛褥の寢床の白い被褥が見えた。小さい犬が吠えた。

「あ、貴下でしたか」

公爵嬢は席を起つて、髪を撫で付けた、この嬢の髪は、何時でも——今でさへ——頭と續いた一つ物であり、そして、假漆でも塗つてあるかのやうに、非常に滑つくく見えるのであつた。

「何か有りましたか」と、公爵嬢は尋いて、『私始終氣が氣で無いんですよ』

「何でも無い、何も變りは有りません。唯だ少許話し度い用件があるので來たんです、カチイシ」と、公爵嬢は云つて、公爵嬢が今離れたばかりの低い椅子にさも草臥た態で、坐つた、『此所は實に暖かだね、でも』と、彼は云つた、『さア、此所へお坐わりなさい、それで話しませう』

「何か有つたのかと思つたもんですから、公爵嬢は斯う云つて、石のやうな嚴ぶかしさうな表情は寸毫も變へずに、公爵の向ふに坐わつて、聞く心構を爲た。少許でも眠て置かうと爲たけれども、全然駄目でしたよ』

「ねえ、貴女」と、公爵ヴァシイリは云つて公爵嬢の手を摺り、持ち前通りに、それを下へ曲させた。

この「ねえ?」が、この二人が雙方とも言詞に出さずに了解したさまぐなことを指すもので有つたことは明白であつた。

胸が不釣合に長い、瘠せた眞直な體姿の公爵嬢は、飛び出した灰色の眼に何の感情の表徴も見せず、唯だドイツと公爵を見た。頭を振つて、そして、溜息しながら、聖晝の方を見た。公爵嬢の身振りは、悲哀と

諦めの表情とも、又疲勞から速く通れ度いといふ望みの表情とも、孰らとも解せられるのであつた。公爵ヴァシイリは、それを疲勞の方と取つた。

「で、私の方が少しでも楽だと思つて居ますか」と、公爵は云つた。「宛然驛遞馬のやうに疲れて居るんです。今は非貴女と話し合は無ければならん事があるが、カチイシ、極く大切な事でね」

公爵ヴァシイリは、止まつた、頬部が兩方更りがはりに痙攣つて、此の人が何處のでも客室に居る時の顔の上では決して見ることに能き無かつたやうな不愉快な表情を出した。眼も平常とは違つて居た、今倨傲な調戯けた態で見詰めるかと思へば、乍ち、コソノと見廻すのであつた。

公爵嬢は、瘠せた萎びた手で、膝へ犬を引上げて、公爵ヴァシイリの眼を凝乎と見詰めて居た、が、其儘朝まで黙まつて坐わつて居るやうとも、公爵嬢の方から口を切る氣遣ひの無いことは明白であつた。

「ねえ、私と仲好しのカテリイナ・セミーノヴァ」と、公爵は、云はうと思ふことを何うでも斯うでも云つて了まはうとアガいて居るやうな態様で、言葉を續けて「今のやうな斯ういふ場合には、有らゆることを考へて置か無ければならんものですぞ。將來のことを考へて置かなければならん、貴女がたの……私は貴女がた皆を私自身の小兒かなぞのやうに思つて居るんだ、これは御承知だらう」

公爵嬢は、前と同じやうな體然した動か無い据はつた眼付で、公爵を見て居た。

「最後には、われ／＼は又私の家族のことも考へ無ければならん」公爵ヴァシイリは、公爵嬢を見ずに、腹立たし氣に小さい卓子を自分の前から突き遣つて、斯う言葉を續けた「ねえ、カチイシ、貴女がた三人マアモントフ姉妹と私の妻とが、——われ／＼だけが伯爵の直接の相續者なんではありませんか。いや、解かつて居ます、斯様なことを云つたり考へたりするのは、貴女がたには噓ぞ辛いことでせう。私に取つても

ご同様に辛らいです、けれども、ねえ、私は最早五十歳を越した身體で、何時何様な事があらうも知れんです。私がピエールを呼び寄せたこと、伯爵が、ピエールの肖像に指し、彼に逢ひ度いと知らせなかつたことを、貴女は知つておいでだらうね？」

公爵ヴァシイリは、尋くやうに、公爵嬢を見た、が、對手は、自分の云つたことを考量へて居るのか、唯だ自分を見詰めて居るだけなのか、孰方とも判じ兼ねた。

「私は、唯だ一つの事ばかり始中終神様に祈つて居ます」と、公爵嬢は答へて「神様が伯爵に憐みを掛てくださつて、伯爵の高貴な靈魂が此世を離れ得られるやうにと……」

「左様、その通り」と、公爵ヴァシイリは、もどかし氣に續け、禿頭を撫で、再腹立たし氣に寸時前に突き遣つたばかりの卓子を自分の方へ引寄せて「けれども、實際……實際肝腎な點は貴女自身ご承知の通り、この前の冬伯爵が遺書を造つたことなんだ、彼書では、直接の相續者は皆捨て置て、財産全部ピエールに譲るといふことになつて居たぢやありませんか」

「伯爵はこれ迄随分種々な遺書を拵らへたやうですわね」と、公爵嬢は落着き拂つて云つた「でも、ピエールに譲る譯には行か無いんですよ。ピエールは庶子ですもの」

「もし」と、公爵ヴァシイリは、不意に云つて、卓子に向ふへ突き遣り、一層本氣になり、一層速語に話した「けれども、陛下に書面で願つたとすれば、伯爵がピエールを正當の嗣子に爲る願書を出したのであつたら、何う爲ますね？。伯爵の勳功は願書の趣きを徹させるだけの力は十分ありませんか、ね……」

公爵嬢は、自分が話して居る先方の相手よりは自分の方が話頭に上つて居る問題に就て愈に多く知つて居るといふ自信のある人々の微笑むやうに、微笑んだ。

「私は尙進んで斯ういふことも云ひ得ますぞ」と、公爵ヴァシイリは公爵嬢の手を握り締め、談話を續けた。「出しは爲無かつたが、願書が書かれたのは確です、そして、陛下のお耳へも願書のことは入つたのです。問題は唯だそれが破毀されたや、否やといふだけなんだ。若し、破毀され無いとすれば、いよ／＼となるが最期」と、溜息を爲て、「いよ／＼」の意味は何ういふのだから瞭然と公爵嬢に解からずやうに爲て置いて「すれば、伯爵の書類が開かれる、願書の添うた遺書が陛下のお手許へ出る、そして、願の趣きがお聞届けになる。ビエールは、正當な嗣子として、何も彼にも受け取つてしまふんです」

「それで、私たちの分が何う爲るんですね」と、公爵嬢は、其様なことが、何うしたつて有るものかといふ態で、皮肉な笑顔で云つた。

「いや、それは白晝のやうに明かなことですわい。左様なれば彼の男が全部に對する唯一人の嗣子になつて、貴女がたは今の分さへ貰らへんでせう、ね。だから、ねえ、貴女は、遺書と願書が書かれたか何うか、それが破毀されたか何うか、それを知らなければいかん。それから若しそれが何うか爲て何處かに置き忘れてあるとすれば、その有り所を知り、それを見付さなければいかん、何故かといふと……」

「まあ餘んまりぢやア無いの」と、公爵嬢は公爵の言葉を遮ぎつて、眼の表情は寸毫も變ずに苦々しさに笑つた。「私は女です、だもんで、貴下は私たちは皆白痴ばかりだと思つておいでなんです、けれども、私だつて、庶子が財産相續の能き無い位は知つてますよ。私生兒、その語を斯う翻譯したことで、公爵の主張の根據の無いことを一舉に證明し得るのだと思つて、斯う云ひ足した。」

「何うしてこれが貴女に解からんのかねえ、カチイシ、眞個に。貴女は極く伶俐な人ぢやア無いか、若し伯爵が陛下に書面を上げて、正當な嗣子としてビエールを認めてくださいと願へば、さうすれば、ビエール

はビエールでは無く、伯爵ベズウホフに爲つてしまふんで、さてさうなれば、遺書に據つて彼の男が何でも彼でも、有らゆる物を譲られることになるといふのが、何うして貴女に解らんのだらう？。それで、若し遺書と願書が破毀され無かつたとすれば、其様なら、貴女は、伯父孝行であつたといふ慰藉と、自分の義務を善く盡くしたことから生ずる種々の満足とを除けては、何にも遺産として貰らうことは能きませんぞ。これは事實です」

「遺書の出来たことは知つてます、けども、私は又それが無効なものなのも知つてますよ、貴下は私を白痴扱になさるのねえ」と、女が、自分で何か氣の利いた皮肉なことを云つて居ると思ふ時に、何時も物を云ふやうな態様で、公爵嬢は云つた。

「私の好きな公爵嬢、カテリイナ・セミヨノヴナ」と、公爵ヴァシイリはさももどかしさうに云ひ始めて、「私は貴女に腹を立てる爲めに此所へ来たのではありませんぞ、私は、貴女を骨肉の婦人、善い、親切な心の、信實な骨肉の婦人と見て、貴女の利害に關する話を爲に來たのですぞ。これで十遍目にお話するのだが、陛下への願書や、ビエールの爲めに遺書が伯爵の書類のなかに有るのなら、貴女も貴女の妹さんたちも、相續人では有りませんぞ。私の云ふのが信ぜられ無いとしても、斯ういふことを善く知つて居る人の言葉はお信じなさい、私は今ホンの先刻ヅミイツリ・オヌフレイチとも話して見たんです」(それは、ベズウホフ家の常雇の辯護士であつた)「彼の男も私が今云つたのと同じことを云ひましたぞ」

「確に公爵嬢の考に不意に何か變化が起つたらしかつた、薄い唇が白く爲つた、(眼は變ら無かつた)、そして物を云ひだすと、聲が、明かに公爵嬢自身思ひ寄ら無かつたらしい風に、だん／＼變つて行つた。

「可訝しな事ぢやア有りませんか」と、公爵嬢は云つた。「私何にも欲か、無かつたんですよ。だから何に

も要るもんですかよ。膝の上の犬を投げ落し、そして、袴の皺を撫で延ばした。

「彼の人の爲めに有らゆる物を犠牲に爲て了まつた人々が受ける禮や、感謝は先づ其様なものですわ」と、公爵嬢が云つた。「眞個に善いわ、結構だわねえ。私何にも要ら無いわよ、公爵」

「左様、けれども、貴女は一人では無い、妹御たちがお有りぢや無いか」と、公爵ヴァシイリが答へた。が、公爵嬢は公爵の言葉を耳にも入れ無かつた。

「左様、私は最早餘つ程前から知つて居た、けれども、忘れて居たんだ、此の家ぢやア、卑劣なこと、虚偽、猜嫉、作略なんかの外、恩知らず、眞黒な恩知らずの外、何にも當てには能き無いんだつた……」

「その遺書が何處に在るか、貴女知つて居ますか、それとも、知ら無いのですか」と、公爵ヴァシイリは尋いた、頬部で痙攣するのがますます目立つて來た。

「左様だ、私は眞個に痴愚だつた、私は尙且人を信じて居て、その爲めに心配して遣り、そして、私自身を犠牲に爲た。けれども、卑劣で奸悪な奴たちの外は、誰も成功しや爲無い。この悪策は誰の業だか私解かつてよ」

公爵嬢は起つ所であつた、けれども、公爵が腕を撃つて抑へた。公爵嬢は不意に人間全體を信じ無くなつた人のやうな態であつた。意地悪るさうに、相手の公爵を見た。

「未だ間に合ひますよ。宜しいか、カチイシ、それは悉皆伯爵が前後の考慮無しに爲たことなんだ、腹の立つた時とか、病氣の時とかいふのでね、それで、それ限り忘れて了まつたものなんですぜ、だから、ねえ、伯爵の間違を正して、さういふ不公平なことを爲せ無いやうにして彼の人の末期を安らかにし、他の者を不幸に陥れたといふ後悔無しに死なせて遣るのが、われ々の義務ぢやアありませんか……」

「而かも、彼の人の爲めに有らゆる物を犠牲にした他の者なんですわ」と、公爵嬢は、公爵の言葉を補つた、で、烈しい勢で再起たうと爲た、けれども、公爵が放さ無かつた。「犠牲を有り難く思つて呉れる人ぢやアありません。いゝえ」と、公爵嬢は溜息を爲ながら云ひ足して、「此の世の中ぢやア善い事の應報を待つながら馬鹿なことだ、此の世の中ぢやア名譽も無ければ、公平も無いんです、私何う爲たつてこれは忘れ無いわ。狡猾と悪心だけしきや此の世の中は求め無いものなんだ」

「さア、まア、落着きなさい、貴女は立派な心の人ぢやア無いか」

「いゝえ、悪い心なのよ」

「貴女の心は善く解つて居る」と、公爵は繰返して、「私は貴女の愛情を貴んで居ます、私も貴女と同じ了簡だと思つてください。落着いて、時の有るうちに——それは二十四時間かも知れず、或ひは唯つた一時間かも知れんのだが——右に左時の有るうちに、肝腎の話を極めて置かうではありませんか。遺書のこと、貴女の知つて居ることを悉皆私に聞かせてください、それに、此際最も大切なことは、それが何處に置いてあるかといふことなんです、貴女はそれを知ら無きやアいかん。われ々は今直ぐにその遺書を持つて行つて伯爵に見せませう。伯爵はその遺書のことなどは最早忘れて居るに違ひ無い、で、見せたら、破毀する氣に爲るでせう、私は、彼の人の望みを何處までも神聖に守もつてその通り實行しやうと爲る外に、何一つ他意は無いのですからねえ。私が此所へ來たのは唯だその爲めばかりなんです。私は、伯爵の爲めにも貴女の爲めにも、兩方の利益になるやうに爲度いと思つて、やつて來たんです」

「あゝ、全然私分かつたわ。誰の策略なんだか知れましたわ、私知つて居るわ」と、公爵嬢は云ひ掛けた。「其様なことは何うでも宜いぢや無いか」

「これは悉皆貴下の最良にして居る、貴下の大切の、公爵夫人ゾルベエツスコイ、アンナ・ミハイロヴナの業なんだわ、彼様な奴なんぞ女中にだつて遣つてやる氣は無いわ、眞個に下司な悪黨老婆つたら有りやアし無い」

「そんな悠長なことを云つて居る時ちやア有りませんぞ」と、公爵は佛蘭西語で云つた。

「え、何にも云はずに居てください。この前の冬此家へ無理に推し掛けて来て、私たちが皆のことを伯爵にそれはく口汚く悪く告げ口を爲たことつたら、就中ソフィーのことが一等酷かつたのよ——此所でお話は到底能き無い程だつたわ——だもんで、伯爵は病氣に爲つた位よ、伯爵は二週間も私たちに逢は無かつたの。その時よ、今思へば、伯爵が彼の厭な怪しから無い書類を拵らへたのは、けども、私それは何でも無いものだと思つて居ただわ」

「それだ。何故、貴女前にその話をわれく爲無かつたんですか」

「伯爵が何時も枕の下に入れて置く象徴の有る書類扱みのなかに有ることよ。最早私分かつたわ、返答は爲すに、公爵嬢は斯う云つた。左様だ、私の罪になるのだつても、大變な罪になるのだつても、大變な罪になるのだつても、彼の悪黨老婆が憎くつて憎くつて堪まら無もの」と、公爵嬢は、全然人が變つたやうに、殆ど絶叫した。『彼奴が何故推し掛けて来るんだらうね。でも、最早全然彼奴の腹は分かつたんだもの。今に見てるが宜い』

(三十)

さういふ種々な談話が應接室や公爵嬢の部室で爲れて居た間に、ピエール（呼びに遣つた）とアンナ・ミ

ハイロヴナ（ピエールに隨いて行くべきだと考へた）を載せた馬車が、伯爵ベズウホフの邸宅の廣庭へ乗り付けられて居た。車轍の音が通路に敷いて有る藁に消されて了まふと、同伴に慰ぐさめの言辭を掛けて遣らうと振り向いたアンナ・ミハイロヴナは、それが隅の方で眠入つて居るのを見た、で、それを起した。目を眞個に覺まして、ピエールはアンナ・ミハイロヴナに隨いて馬車を降りた、で、其所で初めて、自分を待つて居る危篤の父親に逢ひに行くのだと思へだせた。自分たちは、客の入る入口へ乗り付けたのでは無く、裏の入口へ廻つて居たのに氣が付いた。馬車の踏み段から降り掛けた時に、商人の服装の男が二人入口から壁の蔭へと跳び退いた。ピエールは、立つて待つて居る間に、同じやうな男が他にも幾人か兩側の家の蔭に立つて居るのに氣が付いた。が、さういふ者等を見たに違ひ無いアンナ・ミハイロヴナも従僕も馭者も、それを何とも思つて居無い態であつた。では、これは何でも無いことなんだと、ピエールは極めて、アンナ・ミハイロヴナに隨いて行つた。急ぎ足でアンナ・ミハイロヴナは、後れ勝であつたピエールを迫り立てながら、薄暗い狭い石の階段を上がつて行つた。ピエールは何故伯爵の所へ行か無ければなら無いか、一向その理由が解らず、又、何故裏階段から行か無ければなら無かつたのかといふ理由に至つては更に一層解ら無かつた、が、アンナ・ミハイロヴナは萬事心得た風でズン／＼行くのに勵まされて、さう爲るのが自分に取つて必らず必要なことであらうと腹を極めて、階段を半分所昇つた所で、二人は、水桶を持つて、大きい長靴で音高く踏みながら、駈け降りて来た二三人の男に、既でのこと突き落とされる所であつた。さういふ男たちは、ピエールとアンナ・ミハイロヴナを通らせる爲めに、壁にピツタリと押つ着いて了まつた限りで、二人を見ても、寸毫も怪んだ態様は無かつた。

「これは公爵嬢の部室の方ですか」と、アンナ・ミハイロヴナがそのうちの一人に尋いた。

「へえ、左様で」と、従僕は、斯様な時は何んな事を爲ても構は無いといふのであつたかのやうに、無遠慮な高聲で答へた。「左の戸で、奥様」

「伯爵が私を呼んだのぢやア無いのかも知れ無い」と、階段を昇り切つた所で、ピエールが云つた。「私は私の部室へ行つた方が宜いでせう」。アンナ・ミハイロヴナは止まつて、ピエールが追ひ付くのを待ち合せた。

「あゝ、もし」と、公爵夫人は、その朝自分の子息に對して爲たのと丁度同なじ手付で、ピエールの手に觸はつた。「眞個に、私は貴下と同なじやうに苦しんでるんですよ。ね、斷乎して居てくださいよ」

「眞個に、部室へ行く方が宜かア無いんですか」と、ピエールは公爵夫人を眼鏡越しに見やつて、優しい聲で云つた。

「あゝ、もし、此れまで貴下が受けた酷い扱ひなんぞは忘れておしまひなさい、彼は貴下の父上だといふことをお思ひなさい……で、何うかすれば、末期の苦痛の時には」と、公爵夫人は溜息を吐いた。「私は、初めから貴下を自分の子息のやうに可愛く思つたんですよ。私に委かせて置てください、ピエール。私は貴下の利益を忘れませんよ」

ピエールには何の事だか寸毫も解ら無かつた。が、再、彼は、總て斯ういふことは爲ら無ければなら無いことだと、前より一層強く感じた。で、最早戸を開け掛けて居たアンナ・ミハイロヴナの後へ溫和しく隨いた、戸は裏階段の前房に通ふのであつた。隅の所に、公爵嬢の老僕が靴足袋を編んで居た。ピエールは家の斯ういふ方へは未だ一度も來たことは無く、又、斯様な部室々々があらうとは夢にも知ら無かつた。女中が一人、酒瓶の載つた盆を持つて、二人に追ひ付いた。アンナ・ミハイロヴナは「其女を『お前さん』とか、

「好い娘」とか呼んで）公爵嬢たちは機嫌が克か何うかなど尋き、そして、石床の廊下をピエールを引張つてズン／＼進んだ。左の最初の戸は廊下から公爵嬢たちの居室へ通つて居た。瓶を持つた女中は急いで居た（その時は、その家では何事でも大急ぎで爲れて居たやうであつた）で、後を閉め無かつた。ピエールとアンナ・ミハイロヴナは、通りすがりに我れ知らず一番年長の公爵嬢と公爵ヴァシイリが接近して坐つて話して居る部室の裡を一寸と見た。二人の通つて行く姿を見るや否や、公爵ヴァシイリはもどかしさうな身振りで、體を引き退けた、公爵嬢は跳びあがつて、絶望の手付きで、戸を力一杯叩き付けるやうに閉めて了まつた。その舉動は公爵嬢の平常の落着には甚く不似合であつたし、公爵ヴァシイリの顔に出て居たギョツとした様子も甚く彼の勿體振つた所と不釣合であつたので、ピエールはピタリと止まつて、不思議さうに、自分の案内者を眼鏡越しに見た位であつた。アンナ・ミハイロヴナは少しも驚いた様子は無かつた、悉皆豫期して居たのを見せやうとするかのやうに、唯だ微笑んで、溜息を爲たばかりであつた。

「斷乎して居てくださいよ、もし、私は貴下の利益の爲に心配して居るんですからね」と、アンナ・ミハイロヴナは、ピエールの不審さうな顔付に答へた、そして、廊下を一層速歩で進んだ。

ピエールは、その時の事態は何ういふのか寸毫も解ら無かつた、自分の利益の爲めに心配して呉れるとは何ういふことなのか、更に解ら無かつた。が、何事でも悉皆左様爲ら無ければなら無いのだと感じた。二人は、廊下から、伯爵の應接室に續いた半分暗い廣室へ入つた。これは、客用の階段からの通路になつて居る、ピエールの好く知つた、寒い、立派な裝飾の部室の一つであつた。が、この部室さへ、床の真中に空の浴桶が置き捨て、あつて、水が敷物の上に滾れて居た。二人は、其所で家僕と香爐を持った寺男とが、足を爪立つて歩いて來るのに出逢つたが、彼等は二人をロクに見もし無かつた。二人は、冬向きの庭の方へ開いた

應接室へ行つた。これはピエールの善く知て居る、伊太利風の窓の二つある、カザリン女帝の大きい胸像と等身の肖像のある部室なのだ。應接室では、前同様な人々が悉皆殆ど前同様な位置に坐つて、囁語を交換して居た。涙に濡れた蒼い顔で入つて来たアンナ・ミハイロヴナと、頭を垂下れて其後から溫和しく隨いて来たピエールの大きい肥つた姿を、衆皆談話を止めて、ジロ／＼見た。

アンナ・ミハイロヴナの顔容は、大切な時が来たとき自覺して居ることを表はした。飽くまで事馴れた彼得堡婦人の態で、ピエールを側に引き付けて、朝よりも尙一層大膽に部室へ歩み込んだ。自分は今危篤の病人が逢ひ度がつて居る人を伴れて行くのだから、自分が人々から重ぜらるゝことは確だと感じて居たのだ。唯つた一眼で、部室のなかの人々を悉皆見分けて了まひ、伯爵の顧問僧を見るや否や、點頭を爲るといふのでは無く、不意に何うか爲て背が低くなつたといふ態で、小走りに僧の所まで泳ぐやうにして行き、最初は一人の僧から、次ぎには他の僧からと、順々に、信心深い態で、祝禱を受けた。

「神様のお蔭さまで、間に合ひました」と、僧に云つた。「私も、親族一同最早非常な心痛でした。この若い人は伯爵の子息です」と、少し低聲に爲つて云つた。「實に悲しい時です」

さう云つて了まふと、アンナ・ミハイロヴナは、醫者に近寄つた。

「ねえ、先生」と、醫者に云つて、「この若い人が伯爵の子息です。未だ望みは有りますませうか」

醫者は何とも云は無かつた、唯だ急に肩を揺つて、眼を上方へと向けたばかりであつた。それと寸分違は無い身振で、アンナ・ミハイロヴナは、肩と眼を動かし、眼瞼を殆ど閉ぶるやうに爲て、溜息を爲、そして、醫者の所を離れて、ピエールの方へ行つた。ピエールには、際立つた尊敬と、優しい悲しさうな様子で、言語を掛けた。

「神様の御慈悲をお頼りなさいよ、ピエールに斯う云ひ、そして、坐わつて待て居るといふ風で、長椅子に指して教へて置いて、自分は衆皆の見て居る戸口へ、足音を忍ばせて行つた、で、殆ど音を爲さずにそれを開けてから、その彼方へ見え無くなつて了まつた。

ピエールは、何事でもその指揮者の婦人の云ふなりに爲やうと決心したので、指された長椅子の方へと動いた。アンナ・ミハイロヴナが、居無くなるや否や、部室ちうの人々の眼が、好奇心とか同情とかいふものより以上の何物かを含んだ眼付で、自分一人の上に据ゑられて居るのに気が付いた。彼は、衆皆が畏怖や、阿諛の尊敬とさへ云へさうな何物かで自分の方を見ながら、囁き合つて居るのに気が付いた。彼等は、前には彼に對して一度も示したことのないやうな尊敬を表した。彼の方では一向知ら無い婦人で、僧と話して居たのが、起ちあがつて、席を譲つた。助手は、ピエールが落した手袋を拾つて、渡して呉れた。醫者たちは、彼が傍を通ると、謹んで談話を止めて、彼に路を譲る爲めに傍へ動いた。ピエールは、最初は、婦人を煩らへさ無いやうに、何處か他へ坐らうと思つた、自分で手袋を拾ひ、寸毫も通路の邪魔には爲ら無かつた醫者の所などは廻つて行き度かつたのだ。が、彼は、フィと、さう爲ては穩當で無いのだと感じた、又、自分はその晩は、誰もが自分に待ち望む或る恐ろしい儀式を経なければならぬ人間であるのだから、それで、誰に世話を焼かせても構はぬ筈だと感じた。黙まつて、助手から手袋を受け取り、婦人の席に腰を下ろし、膝に手を置き、埃及塑像のやうな如何にも自然な釣合の好い姿勢で坐つて、そして、腹の裡では、最早泣いても笑つても左様して居るより外爲やうは無いのだから、前後を取り失なつて、何か馬鹿なことを爲無いやうに爲るには、その晩だけは、自分の考慮は頼まずに、一切導いて呉れる人々の了簡通りに爲つて居無ければなら無いのだと、極めて居た。

二分と過ぎ無いうちに、公爵ヴァシイリは、勳章の三つ着いた上衣を着、頭を高く擧げて、堂々と部屋へ乗り込んで来た。朝から此方、大分瘠せたやうに見えた。平常よりは大きいやうに見えた眼で部屋をジロリと見て、ピエールを見付けた。彼の所へ行つて、手を牽り（前には一度も其様なことは無かつたのだ）、そしてその力を試すとも云ひさうに、下へ向けて引張つた。

「確乎して居なさい、確乎して居なさい、ねえ、君、伯爵は君に逢ひ度いと云つた、夫りやア宜い……」、公爵は後を續ける所であつたが、ピエールは、「何ういふ態で……」と自分の方からも聞くべきものだと思つたのだ。彼は躊躇つた、危篤なその人を「伯爵」と呼んで宜いものなのか何うか分から無かつた、さればと云つて、「父」と呼ぶのは恥かしく感じたのであつた。

「半時間前に又一つ打撃が来たのだ。確乎して居なさい、ねえ、君」

ピエールは甚く心が轉動して居たので、その「打撃」といふ語が、重い物體で打つといふやうな意味を心に喚び起した位であつた。彼は思案に餘まつた態で公爵ヴァシイリを見た、そして暫時経つて艱然、病氣の襲撃を「打撃」と云ふのだと氣が付いたのであつた。公爵ヴァシイリは通りすがりに、ロオレエンに二言三言云つて、爪立つて戸口へと行つた。彼は、爪立つては巧く歩け無かつた、で、拙態に身體全體を上下にギクシヤク爲せた。その後から年長の公爵嬢、それから、僧、寺男が續いた、二三人の家僕が又その戸を入つた。その戸越しに、裡の混雜が聞き得られた、やがて、アンナ・ミハイロヴナが、未だ顔が蒼かつたけれども、義務を成し遂やうといふ斷乎した顔付で、駆けて出て来て、ピエールの腕に觸つて、

「天のお恵は限りが有りません、今末期の塗膏式を始める所なんですよ。さア」

ピエールは、和かな絨氈の上を歩きながら、入つて行つた、そして、助手も、誰だか分から無い婦人も、

又二三人の僕も、誰も彼も、最早その部屋に入るのに許可を得る必要は無くなつて居たかのやうに、自分の後に隨いて来たことにピエールは氣が付いた。

(三十一)

ピエールは、幾つもの圓柱と一つの穹窿で分かれた、波斯絨氈を敷いたその大きい部屋を善く知つて居た。部屋の圓柱の後の部分は、一方の側には、絹の帷の有る桃花心木の高い寢臺が立ち、も一つの側には、聖畫の大きい箱が有つたが、その部分全體が、教會堂が夕勤の爲めに明らされるやうに、カン／＼華やかに燈明が點いて居た。箱の燦々する裝飾の下に、長い病人用の椅子があり、そして、その椅子の裡に、雪白の、皺の無い、新しい枕の上に、バツとした緑の褥を腰まで掛けて、廣い額に獅子の立髪のやうな白髪の方を持ち、美しい赤黄色な顔に何處までも貴族的な深い皺の出來て居る父親、伯爵ベズウホフの氣高い姿をピエールは認めた。彼は、聖畫の眞下に横に爲つて居た。大きい肥つた兩腕が褥の上で置かれて居た。掌を下にして横たはつて居た右の手には、蠟燭が拵指と人差指との間に挟まれて居、老僕が一人椅子の上へ押つ冠ぶさるやうに爲て、蠟燭を其所へ押さへて居た。椅子の周圍には、僧侶たちが、燦爛する法服を着て、その上へ長い髪を振り掛けて、起つて居た。彼等は手に手に點もした蠟燭を持つて、緩然と嚴肅に式を行なつて居た。その少し後に、二人の若い方の公爵嬢が眼へ手巾を當て、立ち、その前に、一番年長の公爵嬢が居た。カチイシは、若し傍目を爲ても、それは自分の知つて爲ることでは無いと衆皆に言ひ渡して居るとも云ひさうに、聖像から決して片時も眼を離さずに、憤然となつた斷乎とした態で立つて居た。アンナ・ミハイロヴナは敬虔な悲哀と宥怒の顔容で、誰だか分から無い婦人に並んで戸口に立つて居た。公爵ヴァシイリ

は、戸のも一つの側で、病人の椅子に接近して立つて居た。彼は、自分の傍へ彫刻の有る天鵞絨の椅子を引き寄せて、蠟燭を持つて居る左の手をその背に掛けて、凭れて、右の手では、十字を切り、額へ指を付ける度毎眼の上へと向けて居た。彼の顔は平靜な信心と神の意への服従を表はして居た。「若し、お前たちが斯ういふ感情を解さ無いといふのであつたら、それだけお前たちに取つて氣の毒なことだ」彼の顔は斯う云つて居るやうに見えた。

公爵の後は、副官と、醫者たちと、従僕どもが立つた、男と女は寺院に居るかのやうに、別々に列んだ。衆皆黙まつて十字を切つて居た、讀經の聲、抑へた深い低音の歌の外、何の音も爲無かつた、唯だ沈靜の合間合間に溜息と足の軽く動く音とが聞えるばかりであつた。自分が何を爲て居るのか自分で善く解つて居ることを見せる心得た態で、アンナ・ミハイロヴナは部屋を眞直に横断つてピエールの所へ歩み寄つた、蠟燭を渡した。彼は、それを點した、そして、周囲の人々の態様を見るのに氣を取られて了まつた、嘩然して、蠟燭を持つた手の方で十字を切つた。黒子の有る、桃色の顔の笑好きなソフィーはピエールを見て居た。その公爵嬢は微笑んだ、手巾で顔を隠して、長いこと、顔を挙げ無かつた。が、再ピエールを見て、再笑つた。公爵嬢は笑はずにピエールを見ることは能き無い癖に、又見ずには何うしても居られ無いのらしかつた、で、さういふ誘惑を遁れやうと、竊然と圓柱の陰へ引つ込んだ。式の眞中で、僧たちの聲々がハタと止んだ、そして、彼等は互に何事か囁き合つた。伯爵の手を抑へて居た老僕が起つて、婦人たちの方へ振り向いた。アンナ・ミハイロヴナが、歩み出て、病人の上へ屈んだ、後向なりにロオレエンを招いた。佛蘭西人の醫者は、蠟燭は持たずに、圓柱に凭れて居た、で、その態様は、外國人で、宗教は違うに拘はらず、その儀式の嚴肅な意義は十分解して居るのみならず、その上に、それに賛同さへ爲て居ることを示めす謹んだ態であつ

たのだ。屈強の男の音のし無い歩で、彼は病人の所へと行つた。華奢な白い指で、蒲團から病人の明て居る方の手を持ち上げ、傍を向いて、そして、注意を集中して脈を伺がひだした。病人には何か飲み物が與へられた、その周圍にはホンの少し人々がバサ／＼したのみで、直きに衆皆それ／＼の立場に歸り、そして、式が続けられた。式のこの中斷の間に、ピエールは、公爵ヴァシイリがそれまで凭れて居た椅子の背の所を離れ、俺は、自分の爲ることは自分でチャンと知つて居るんだが、それがお前たちに解から無ければ、それだけお前たちの損なのだと言つた態の前同様の様子で以つて、病人の所へは行かずに、その傍を通り越して、一番年長の公爵嬢と一緒に居た。それから、二人一緒に、部屋の彼方の隅、絹の天蓋の下の高い寢臺の所へ行つた。やがて又寢臺の所を離れるかと思ふと、公爵も公爵嬢も一緒に、その先の戸口を通つて居無くなつて了まつた、が、式の終らぬうちに、二人共前後して各自の元居た所へ歸つて來た。ピエールは、最早その晩彼の眼に入る事柄は總て悉皆何うしてもさう無ければならぬことに違ひ無いと思ふことに極めて了まつてからなので、その公爵の舉動にも他一切の事と同じやうに別段に深く注意は爲無かつたのであつた。

宗教歌の響が止んだ、そして、その神秘的な式を滞り無く受け終はつたことを病人に向つて祝する主座僧の聲が聞えた。死行く人は矢張り生命無きさまでピリツとも動かさず横はつて居た。誰も彼もその周圍を動いて居た、多くの足音と多くの囁語の聲が爲て居たが、就中、アンナ・ミハイロヴナの囁聲が一番高かつた。

ピエールには、アンナ・ミハイロヴナが、「何うしても寢床の方へ伴れて行つてあけなければ不可ませんよ、それは駄目……」と云つて居るのが聞えた。

病人は、醫者たち、公爵嬢たち、それから、家僕どもに全然取り圍かれて了まつたので、ビエールは、儀式の間、他の人々の様子を見ては居ながらも、決して片時も眼を離さなかつた白髪の立髪を頂いた赤味がかった黄色い顔を最早見ることができなくなつて了まつた。で、椅子の周囲の人々の非常に用心した舉動でいつて、彼等が、死掛かつて居る人を抱きあげて、他所へ持つて行くところだと推量したのであつた。

「俺の腕につかまれよ、夫ちやア落しちまう」と、家僕の一人の怖れた囁語が、ビエールに聞えた。「もつと下だ……も一人此方へ」と、幾人もの聲がした。で、衆皆の苦しうな息使ひと急ぎ歩の様子では、彼等が持つて居る重荷は彼等の力に過ぎたものであることが知られた。

人々が——アンナ・ミハイロヴナもその一人として——ビエールの傍を通つて行く時に、その若い男は、人々の背部や頸の彼方で、病人の大きい筋骨逞しい開いた胸や、白髪の、縮れた、獅子のやうな頭や、腋下を捉まへて支へて居るので突き上げられて居る頑丈な肩などを、警然見ることができた。圖抜けて廣い額と頬骨、美くしい肉感的な口、傲然とした冷たい眼を持つた頭部は、死の近づいて居るに拘らず、少しも醜く爲つては居無かつた。それは、その父親にビエールが彼得堡へ遣られた時、即ち三月前に彼が見たのと少しも變つて居無かつた。が、その頭部は、擔いで行く人々のギクシヤク爲た歩調に伴れて、グタリとして彼方此方揺れ、そして、冷たい無感覺のやうな眼は、何處を見ても無しに、唯だ大きく開いて居た。

人々は少時の間高い寢臺を取り巻いて、忙がしさうであつた、が、やがて、伯爵を移した人々は、四方へ別れた。アンナ・ミハイロヴナは、ビエールの腕に手を觸はらせて、「さ、此方へ」と、云つた。ビエールはそれに隨いて、寢臺に近寄つたが、病人は今の先刻終つた神聖な儀式に適應つた嚴やかな姿勢に置かれて居た。頭は枕の上に高く支へられて居た。手は掌を下向て緑絹の蒲團の上に兩方とも列べて形善く置かれて

居た。ビエールが傍へ寄つた時には、伯爵は彼を眞直に見詰て居た、が、その眼の意味は誰にも解き難いものであつた。その眼は何にも云はずに、唯だ眼としては何物かを見て居無ければならぬので見て居た。けなのか、或は、云はふとすることが餘りに多かつたのか、何方かであつた。ビエールは、何う爲て宜いのか分から無かつたので、唯だ突つ立つて、何う爲るのかといふ顔付きで、指揮を爲て呉れる夫人を見た。アンナ・ミハイロヴナは、病人の手を指し、自分の唇で、影の接吻をその方へ投げる眞似を爲て、ビエールにチラと胸を爲た。ビエールは指揮通りに爲た、そして、蒲團にからまら無いやうにと、そおつと頸を延ばして、骨太の逞ましい手に接吻した。その手には幽な微動も無かつた、又伯爵の顔の筋一つだに動か無かつた。ビエールは再その次には何う爲べきか教へて貰はうと、尋くやうな顔付でアンナ・ミハイロヴナを見た。アンナ・ミハイロヴナは、寢臺の傍に立つて居た肱掛椅子の方をチラと見た。ビエールは、その通りに其處へ行つて坐つたが、眼は尙且、それで好かつたのか、尋いて居た。アンナ・ミハイロヴナは、結構だといふ態に點頭いた。ビエールは、自分の圖抜けた體軀が餘りに場塞けなのに困じて、成るべく小さくなるやうにと甚く骨折て居る體で、再埃及塑像の自然な均整した姿勢に爲つた。彼は、伯爵を見た。伯爵は矢張り、ビエールが立つて居た時にビエールの顔が在つた場所を見詰て居た。アンナ・ミハイロヴナの態様は、父と子のこの最後の面會の哀れに嚴肅な意味を十分に認めて居ることを表はして居た。總體僅か二分程のことであつたのだが、ビエールは一時間も掛つたやうな氣が爲た。倏忽、伯爵の顔の逞ましい筋肉と皺の上で戦慄が過ぎた。その戦慄は一層甚くなつた、美しくい口が歪んだ（その時初めてビエールは、父親が何れ程死に近よつて居るかを知り得たのだ）、そして、その歪んだ口から、皺腹たボンヤリした音が出た。アンナ・ミハイロヴナは病人の口を擬乎と見詰めて居たが、病人の意を察しやうと骨折つて、先づビエールに指し

し、その次に、飲み物を指さし、その次ぎに、尋くやうな囁語で公爵ヴァシイリの名を云ひ、それから、蒲團に指した。病人の眼と顔はもどかしさを示めした。そして寢床の頭を一度も去ら無かつた家僕に艱然目くばせ爲やうと爲た。

「閣下は反側を爲さり度いんで」と、家僕は囁いた、そして、伯爵の重い體軀を壁の方へ向けて反側らさうと起ちあがつた。

ビエールは家僕に手傳はうとして起つた。

伯爵が反側らされて居るうちに、片方の腕がグタリと後へずれた、伯爵はそれを自分で戻さうと徒勞に骨折つた。伯爵は、その生命無き腕を見たビエールの慄然とした顔に氣が付いたのか、それとも、何か他の考想がその死に掛つて居る腦裡を過ぎつたのか、その云ふ事を聞かぬ腕を見、ビエールの顔の慄然とした表情を見、再自分の腕を見た、そして、彼の顔にはヘンに不似合な微笑が顔へ出て來た、それは、自分の爲方の無くなつた有様を自ら嘲ける、諦めた、力の無い微笑であつたのだ。その笑顔を見ると、倏忽、ビエールは、喉頭には塊、鼻には滴りを感じた、そして、涙が眼を曇らせた。病人は壁の方に向けられた。彼は、溜息した。

「一眠入爲さるんですよ」と、公爵嬢の一人が寢床の傍に番を爲に來たのを見て、アンナ・ミハイイロヴナは斯う云つた。「行きませう」

ビエールは出て行つた。

(三十二)

最早應接室には誰も居ず、唯だ公爵ヴァシイリと一番年長の公爵嬢が、カザリンの肖像の下に坐つて、一生懸命に話合つて居た。二人はビエールとその同伴者を見ると、パツタリ黙まつて了まつた、公爵嬢は、ビエールの思つたには、何物か隠くしたやうであつたが、斯う囁いた、「彼の女を見るのが眞個に厭で堪ら無いのよ」

「カチイシが小さい應接室の方へ茶を點れさせて置きましたから」と、公爵ヴァシイリはアンナ・ミハイイロヴナに云つた。「おいでなさい、アンナ・ミハイイロヴナ、何かお喫べなさい、で無くば、身體が續きませんよ」

彼は、ビエールには何とも云は無かつた、唯だ同情の態でその腕を握つたばかりであつた。ビエールとアンナ・ミハイイロヴナは小さい應接室へと出て行つた。

「徹夜の後での、斯ういふ好い露西亞茶の一杯位力の付くものは無いね」と、ロオレエンが快活さを抑へたやうな態で云つた、彼は、小さい圓形の應接室のなかで、茶の道具や、冷たい夜食の料理の載つて居る卓子の傍に立つて、把柄の無い美しい陶器の茶碗から茶を吸つて居たのだ。その夜伯爵ベズウホフの家に居た人々は、腹を丈夫にして置かうといふ考慮で、各自その卓子の周圍に集まつた。ビエールは、姿鏡と小さい卓子の幾つもあるその小さい應接室を記憶えて居た。伯爵の家に舞踏會があつた時分は、踊れ無かつたビエールは、姿鏡の澤山あるその小さい部室に坐つて、露出の肩の上に眞珠や金剛石を飾つた舞踏扮装の婦人たちが、その部室を横断つて、めいめいの姿を幾度も寫し返へすクワツと明るい姿鏡に寫るめいめいの姿を見て居るのを、眺めるのが好であつた。が、今は、その同なじ部室が、二つの蠟燭で朦朧と照らされ、夜の最中に、小さい幾つもの卓子には茶道具や夜食の皿が狼藉として居、雑多な平服を着た人々が其所に坐

つて囁き合ひ、一言毎に、誰もがその瞬間に過ぎ行きつゝあつた事と、これから寢室で起らうとして居る事とを忘れることの能き無いのを示めて居た。ピエールは、食ふ氣は十分有りながら、何も食は無かつた。彼は、何う爲て宜いのかといふ風に、指揮人の婦人の方へグルリと振り向いた、そして、その婦人が、公爵ヴァシイリが一年長の公爵嬢と一緒に残つて居た應接室へと忍び足で行つたことを認めた。ピエールは、それも亦その夜の所置の何うしても爲らずには濟まされぬ部分なのであらうと思つた、で、少時躊躇つたのみで、直ぐ、その後を随つた。アンナ・ミハイロヴナは公爵嬢の傍に立つて居て、雙方甚く氣色ばんだ調子で一時に物を云つて居た。

「奥様、私自身の爲べき事と、爲て悪るい事とを極めるのは、私の勝手に委しめてください」と、居間の戸を叩き付けて閉めたと同じやうな激し切つた氣分であるらしかつた公爵嬢が、云つた。

「ですけども、公爵嬢」と、アンナ・ミハイロヴナは、寢室への道に立塞がつて、公爵嬢を通させずに、穩やかに説き勧めるやうに云ひ掛けて居た。「心を平和に爲せて置いてあけなければなら無い斯ういふ大切な時に、伯父さんに其様な話を聞かせるのは、伯父さんに取つては餘り苦し過ぎる事ぢやア無いでせうか。靈魂が最早天国へ行くやうに用意されてる今になつて、この世の用事を話すなんて……」

公爵ヴァシイリは片脚を高く重ねた常例の姿勢で、低い椅子に坐つて居た。兩方の頬部が烈しくピク／＼して居た、で、それが緩やかになつてしまふと、下の方へ膨れたやうに見えた、けれども、婦人二人の評論には何の利害も持た無い人のやうな態を表はして居た。

「いや、アンナ・ミハイロヴナ、それはカチイシの勝手に爲て置きなさい。伯爵が甚く可愛がつた娘なことは貴女も知つて居る通りだから」

「この書類は何ういふものなのか、それさへ私は知ら無いですわね」と、公爵嬢は、公爵ヴァシイリに向いて、手に携つて居た象徴の書類挾を指した。「私は、真正の遺書は書類箆筒にあつて、これは伯父さんが置き忘れた書類だといふことしきや、知ら無いんですわよ……」

公爵嬢はアンナ・ミハイロヴナの横を廻つて行かうと爲た、が、後者は又小走りが出て、行方を塞いだ。「解かつてますよ、まア、貴女、好いお娘さんだからさ」と、アンナ・ミハイロヴナは、何うあつても離しさうも無い態で、書類挾を牢乎と捉まへた。「ねえ、公爵嬢、願ひます、お頼みです、伯父さんを苦しめてくださいますなよ。後生ですからさ」

公爵嬢は物を言は無かつた。聞えたのは、書類挾を引張り合ふ音ばかりであつた。公爵嬢が若し言語を出すのであつたら、その言語はアンナ・ミハイロヴナに取つて決して有り難いものでは無かつたらう。アンナ・ミハイロヴナは緊乎と握つて居た、が、それでも、聲は平常の優しい落着と和かさを飽くまで失はずに居た。

「ピエール、此所へお出なさい、お前さん。家の相談に彼の人が加はつたつて、餘計なことでは無いでせうね、ねえ、公爵嬢」

「何故何にも云は無いの、もし」と、公爵嬢は、不意に、小さい應接室に居た人々にも聞えて、何事だらうと吃驚した程の高聲で、喚いた。「斯様な他人が厚顔しい干渉を爲て、危篤な病人の部室の直ぐ敷居の所で亂暴してゐるのに、貴君は何故何とも云は無いのよ。悪黨」と、さも憎體に云つて、カ一杯書類挾をシヤクつた、が、アンナ・ミハイロヴナは手の放れ無いやうに、二歩三歩前へ出て、持ち換へた。

「おい」と、公爵ヴァシイリは、訓戒めるやうな驚愕で、云つた。起ちあがつた。「見つとも無いぢや無いか。

さ、放しなさい。これ。公爵嬢は放した。

「貴女も」

アンナ・ミハイロヴナは知らん顔を爲て居た。

「放しなさい、もし。私が全體の責を負つて爲る。私が行つて尋かう。私が……貴女はそれを放しなさい」
「ですが、公爵」と、アンナ・ミハイロヴナは云つた。「この神々しい聖禮の後では、少時心を平和に爲せて置ておあけなさいよ。もし、ビエール、貴下の考想を聞いてください」と、三人の傍へ来て、禮儀の外觀を全然投げ捨てた公爵嬢の絶望に爲つた顔と、公爵ヴァシイリのビク／＼痙攣る頬部とを、呆れた顔で見詰めて居た若者に振り向いた。

「斯ういふことの責任は悉皆貴女たちに歸するのですぞ」と、公爵ヴァシイリは荒々しく云つた。「貴女たちは自分が爲つて居ることは何んな事なのか自分で知らずに居るんだ」

「悪黨老婆」と、公爵嬢が怒號つて、不意にアンナ・ミハイロヴナに跳び掛つて、書類挾を引奪つて了まつた。公爵ヴァシイリは頭を下けて、兩手を投げ擧げた。

その途端に、戸——ビエールが長いこと見詰めて居た、これまでは極く徐にばかり開けられて居たその恐ろしい戸が、壁に叩き付られるまで、急に、騒がしく投げ開けられて、二番目の公爵嬢が自分の手を振り絞るやうにして駈け出て来た。

「貴下たち何を爲てるのよ」と、絶望して云つた。「最早臨終よ、だのに、私ばかりに爲るとして」

一番年長の公爵嬢は、書類挾を落した。手早くアンナ・ミハイロヴナは跣んだ、そして、評論のその目的物を引奪くるやうに拾ひあけて、寢室へ駈け込んだ。一番年長の公爵嬢と公爵ヴァシイリは、艱然我に返

つて、その後を追つた。二三分経つて、年長の公爵嬢は、蒼い萎びた顔をして下唇を噛みながら、再出て来た。ビエールを見ると、公爵嬢の顔は堪へ切れぬやうな憎悪を表はした。

「左様、最早幾らでもお威張りなさい」と、云つて「貴下の思ひ通りに爲つたんだもの」で、歎けだし、顔を手中で隠して、部屋を駈け出た。

次に出て来たのは公爵ヴァシイリであつた。ビエールが坐つて居た長椅子へと踉けて来て、その上にヘタヘタと沈むやうに掛けて、手で眼を隠した。ビエールは、公爵が蒼い顔をして、そして、下顎が瘡に罹つたとても云ひさうに震へ動いて居るのに、氣が付いた。

「あゝ、君」と、ビエールの肱の所を抑へて、云つた——で、その聲には、ビエールが公爵の聲のなかでは是れ迄一度も氣付たことの無い、擊實と弱さがあつた——「私は随分多くの罪を犯し、随分多くの虚言を云ふ、そして、それは何の爲だ？ 私は最早五十歳をズツと越して居るんだ、君も……私も……皆死で終つて了まふんだ、何も彼も。死は恐ろしいものだ」。公爵は泣きだした。

アンナ・ミハイロヴナが一番最後に出て来た。夫人は、靜な緩然した歩調でビエールに近寄つた。「ビエール」と、云つた。ビエールは、尋くやうな顔付で夫人を見た。アンナ・ミハイロヴナは、若者の額に接吻して、自分の涙で彼を濡した。少時何とも云はずに居た。

「最早此の世にはおいでありません……」

ビエールは眼鏡越しにアンナ・ミハイロヴナを見詰めた。

「さ、彼方へ行きませう。お泣きなさい。涙ほど心の慰藉になるものは無いんですよ」
アンナ・ミハイロヴナは、ビエールを暗い客室へ伴れて行つた、で、ビエールは誰も自分の顔を見る者が

居無いのを嬉しく思つた。アンナ・ミハイイロヴナはビエールの傍を去つたが、少時経つて返つて来ると、彼は腕を枕にして、眠入つて居た。

次の朝、アンナ・ミハイイロヴナは、ビエールに斯う云つた、「左様、貴下、これは私たちが總體に取つて大變な喪失なんですわ。貴下のことを云ふのぢや無いんですよ。神様が貴下の後見を爲すつてくださるでせう、未だお若いんだし、而かも、今ぢやア莫大も無い財産を持つことにお爲りでせうよ。遺書は未だ開けられは爲無いんです。貴下はその財産の爲めに急に氣が違つたやうに爲る方ではないことは、貴下の平常で私には善く解かつて居ます、ですが、それが爲めには貴下に種々な義務が懸つて来るでせう、だから、確乎して居なければいけませんよ」

ビエールは何とも云は無かつた。

「もつと後に爲りましたらばね、又お話し爲ますでせうけれどもね、私が彼處に居無かつたら、何う爲つたことだか全く解から無いんですよ。御承知でせうけどもね、伯父さんはツイ一昨日ボリスのことは忘れ無いと私に約束してくださいましたの。ですが、最早時が無かつたんです。ねえ、貴下、貴下はお父上のお望みをお守りなさるでせうねえ」

ビエールは何の事だか一言も解ら無かつた、で、バツが悪るさうに赤く爲つて、黙まりでアンナ・ミハイイロヴナを見た。ビエールに話爲した後で、アンナ・ミハイイロヴナはロストオフ家へ馬車で歸つた、そして、寢床に入つた。午前中に起きて、ロストオフ家の人々其他自分の知人たちに、伯爵ベズウホフの死の顛末を詳しく話した。アンナ・ミハイイロヴナは、伯爵は、ミハイイロヴナ自身も彼様死ねれば不足は無いと思ふ位な立派な死方を爲たと云ひ、伯爵の末期は唯だ悲哀であつたのみで無く、更に又壯大であつたと云ひ、父と

子息との最後の對面は、憶ひ出す度に涙が滾ほれる程哀なものであつて、全くの末期までも、何んな物も、何んな人も善く記憶えて居て、子息に實に慈愛の深い哀れな言葉を掛けた父も、全然くづ折れて居ながらも、末期の父に心配させまいと、自分の悲痛を隠さうと努めて居ても傷ましかつたビエールも、孰方を孰方と云ひ難い雙方共に氣高い舉動で有つた、と云つた。「それは傷ましいことです、けれども、人の心の爲めには爲るんですよ、年老つた伯爵や、その立派な子息のやうな人々を見れば、誰の心でも高尚に爲りますわ」と、云つた。で、又公爵嬢や公爵ヴァシイリのこと人々に話した、が、それは、非常な秘密だといふので、囁語で話した。勿論、非難の意味を添へて。

(二十三)

公爵ニコラアイ・アンドレエヴィイチ・ボルコオンスキイの領地、荒涼丘では、若公爵アンドレエー夫婦の歸省が毎日待ち設けられた。が、この待ち設けの爲めに、老公爵の家内の日々の常例の生活に攪き亂されは爲無かつた。交際社會では「普魯西亞王」と稱名されて居た、一度總司令官であつた公爵ニコラアイ・アンドレエヴィイチは、ボオル帝の治世に、自分の領地へ追放されて、それ以來ズツと、公爵嬢マリイヤやその附添のマドモアゼル・プリアンヌなどと、一緒に、荒涼丘で暮して居たのだ。新帝の世になつて、都へ歸へる許可を得てさへ、彼は、誰でも彼に逢ひ度く思ふ者は、其者の方からして、莫斯科から荒涼丘まで百五十露里の旅を爲て来るのが宜からう、彼自身の方では、何人も何物も見度くも、欲くも無いのだと云ひく、一度も田舎の家を出無かつた。この人の持論に依ると、人間の不徳は悉皆唯だ二つの根源——懶惰と迷信——から出るものであり、又、人間には唯だ二つの徳しきや無い——即ち、精力と恰情がそれだ、とい

ふのであつた。彼は、自分自ら娘の教育を企てた、娘の身に前云ふやうな良質を育成しやうといふので、彼は、娘が二十歳になるまでズツと續けて代數と幾何を教へた、そして、娘の生活を何時でも何かしら爲て居るやうに割り振つて極めて了まつた。彼自身はといふと、何時も感想録を書いたり、高等數學の問題を解いたり、旋盤の上で喫烟草函を造つたり、庭畑の手入れを爲したり、何時も領地の何處かしらで建築中であつた農事の建物を見廻つたりして、暮して居た。仕事をやり上げるのに大切なことは規則正しくするといふことだといふので、彼は、自分の暮し方を正確の最高度にまで規則正しく爲て了まつた。食事はキチンと極まつて何時も變はらずに出され、何時といふどころでは無く、何分といふまでチャンと極まつて居た。周囲の者に對しても娘から召使に至るまで、公爵は油斷無く何時も嚴重に扱かつた、で、没義道であること無しに、彼は、最も没義道な人でも容易には得ることが能き無いやうな度合の尊敬と畏怖を家内のものに起こさせたのだ。退職者であり、政治社會には何の勢力も無い人であつたに拘らず、公爵の領地があつたその地方の高官が誰も彼を訪問し無ければならぬやうに思つて、建築技師や、庭師や、公爵嬢マリイヤなどゝ宛然同なじやうに、立派な客室で、公爵が必定其所へ出て来る何時もの極まつた時間まで待つた。で、書齋の非常に高い戸が開いて、小さい萎びた手の、顔を曇める度毎に鋭い若々しい眼の光を隠くす白い押冠さるやうな眉の、装粉を撒つた髪を冠ぶつた老人の小さい姿を現はした時には、客室に居る人々は誰彼無しに、同なじやうな尊敬は元より、畏怖の念さへも起すのであつた。

若い人々が歸り着く筈であつた日は、公爵嬢マリイヤは何時もの極まつた時間に、父親に朝の挨拶を爲る爲めに、客室へと行きながら、オド／＼して、十字を切り、腹の裡で祈禱を繰り返した。毎日公爵嬢は左様いふ風で行き、毎日、父親とのその日の對面が事無く済むやうにと祈つたのだ。装粉を撒つた髪を冠ぶつた老人の老家僕が

客室の自分の席から靜に起つて、「お入りなさい」と、囁いた。

戸越しに旋盤の音が聞えた。公爵嬢は滑らかに軽く開いた戸を恐は／＼抑へたまゝで、戸口に立ち止まつた。公爵は旋盤を動かして居た、そして、少時振り返つたばかりで、仕事を續けた。

大きい部屋は、始終使用つて居るらしい道具で一杯であつた。書籍や圖の載つた大きい卓子、鍵の付いた硝子張の高い幾個かの書籍函、開いたまゝの古い雜記帳の載つた公爵が立つたまゝで書く爲めの高卓子、細工道具を周圍に列らべ、鉋屑を散らかした指物用の旋盤、斯ういふ總ての物が、絶間の無い、何時も變はらぬ、秩序正しく活動を示めして居た。鞆紐風の銀刺繍の靴を穿いた公爵の小さい足の運動、筋ばつた小さい手の確乎した押し方が、未だ意志の強い敏捷な健かな老年の力を表はして居た。もう二三遍廻してから、公爵は旋盤の踏板から脚を離し、鉋を拭き、盤に付いた革袋のなかへそれを落し、卓子の所へ行つて、娘を呼んだ。彼は決して見事に普通の祝詞を授け無かつた、唯だ毛の蒙茸とした未だ剃ら無い頬部をさし出し、娘を頭から脚までズツと見渡して、荒々しいながら、同時に非常に愛情の籠もつた聲で、「變りは無いか。——宜しいでは、お坐り」と、云つた。で、自分で手づから書いた幾何の問題帳を取り、脚で椅子を引寄せた。

「明日は」と、開いた頁に振り向き、ザラ／＼した爪で一つの節から他のへと記印を付けながら、速語に云つた。公爵嬢は問題帳の上へと顔を寄せた。「待ちなさい。お前に手紙が来て居る」と、老人は不意に云つて、卓子の彼方に垂下てある袋から、女の手の封筒を引張り出し、それを卓子の上に置いた。

公爵嬢の顔は、手紙を見ると、所班に赤く染まつた。で、それを急いで取つて、その上へ顔を下げた。

「エロアズからかの」と、公爵は、冷たい微笑で、未だ強い黄色い歯を見せて、尋いた。

「左様です、ジュリイから」と、オヅ／＼と公爵を見、オヅ／＼と微笑みながら、公爵嬢が答へた。

「これから来る手紙でもう二つはその儘お前に渡すが、三本目は私が読む」と、公爵は酷しく云つた。「お前は痴愚なことを散々書いて居りませんか。三本目は私が読む」

「これもお読みなさい、父上様」と、尙一層赤くなつた、手紙を父親に指し出しながら、公爵嬢は答へた。「三本目だ、三本目と私は云つたのだ」と、公爵は言葉短に叫んで、手紙を突き遣つて、卓子に腕を凭せて、幾何の圖のある帳面を自分の傍へ引寄せた。

「さア、嬢様」と、娘の顔に摺れ付くやうに帳面の上へ顔を持つて行き、娘の坐つて居る椅子の背に片腕を掛けて、老人は始めた、で、公爵嬢は、最早長いこと父親に附屬物のやうに思ひ慣れて居た老年と烟草とのヘンな強い嗅氣に四方から圍まれたやうな氣が爲た。「さア、嬢様、こゝの三角形は孰も等しいのだ、善くご覧、ABC角——」

公爵嬢は自分の顔の傍で輝つて居る父親の眼を恐々一寸々見た。赤い所が顔全體方々に出来、そして、勿論一語も解から無かつた、太くオド／＼して了まつて、餘りの恐さに、それから父親が爲て呉れた説明は、何れ程明白なものであつても、寸毫も呑み込み得られ無かつた。教へ人の咎か、習ひ人の咎か、毎日さういふ同なじ體態が繰り返された。公爵嬢の眼は曇つた、何物も見ることが能き事聞くことも能き無かつた、自分の傍にある賑やかなしい父親の干涸びた顔、呼吸、嗅氣の外何物も感ぜられ無かつた、そして、何うかしてその書齋から能きだけ早く逃げ出し、自分の部屋で氣儘に問題を解き度いものだと思ふより外、何物も考へられ無かつた。老人は機嫌を損じた、高いガリ／＼いふ音を爲せて、自分の坐つて居た椅子を後へ引摺り下けて、怒りだすまいと、自分を抑制へやうと骨折つたが、大抵毎時も、怒り出し、叱り付け、そして、時には、帳面を擲り飛ばした。

公爵嬢は問に間違つた答を爲た。

「あ、お前は實に間拔だ」と、公爵は叫んだ、帳面を突き飛ばして、グルリと背部を向けた。が、直ぐ起ちあがり、彼方此方と歩き、公爵嬢の髪の上に手を措いて、そして、又坐つた。卓子に身體を寄せて、説明を續けた。「これでは不可、これでは駄目だ」と、公爵嬢マリイヤが宿題と一緒に問題帳を傍へ引寄せ、それを閉ぢて、部屋を出やうと爲した時に、公爵は云つた、「數學は大きい學問だ、嬢様。私は世間の痴愚な娘たちには有り勝な風にお前をならせ度く無い。耐忍しなさい、今にこれが好きになるから」。娘の頬部を軽く叩いた。「數學はお前の頭の裡の痴愚なことを悉皆追ひ拂つて了まつて呉れるわい」。娘は去る所であつた、が、公爵は手眞似で止めた、そして、高卓子から新しい縁の切つて無い書籍を取つた。

「エロアズがお前によこした書籍もあつた、神祕の解決と云ふやうなものだ。宗教的な。けれども、私は誰の信仰にも干渉は爲ん……私はこれを見た。持つておいで。さア、急げ、急げ」

公爵嬢マリイヤは、滅多に顔から無くならず、その爲めに、不器量な病身らしい顔が益々不器量にされたその銷沈たオヅ／＼した表情で、自分の部屋へ返つた。小形の肖像の幾つも載り、書籍や寫本の散らばつて居る書記卓子の所へ坐つた。公爵嬢は父親が奇麗好きなのと同じ度合に於てダラシが無かつた。公爵嬢は幾何の問題帳を下へ置いて、もどかしさうに、手紙を開けた。手紙は公爵嬢の小兒の時分からの友達から來たのであつた、その友達といふのは、誰でも無い、ロストオフ家の命名日の客に行つて居たジュリー・カラアギンその人であつた。

ジュリーは佛蘭西語で斯う書いた。

「親愛な、そして、非常な信友——離れて居るつてもものは眞個に厭な苦しいものねえ。私の存在と幸福のうち半分は貴女のお蔭だと私自分で始終云つてますの、また、斯様に遠く離れて居ても、二人の心は見えない糸で互に結び付けられてるんだと、云ひくしてますの、ですけども、私の心は今の境遇に謀叛するのよ、種々面白いことはあつても、私はお互に別れてから以來私の心の奥で感じた或る潜在的謀叛を服することができませんわ。何故私たち二人は貴女の家の大い書齋でこの夏のやうに、あの青い長椅子、あの二人切りで胸を打ち開け合つたあの長椅子の上に一緒に居られ無いでせうね、何故私は、三月前のやうに、眞個に懐しい眼付、私がこの手紙を書いてると眼前にチラ付くやうな眼付、彼の貴女の優しい、落着いた、物を見徹すやうな眼付から、新しい道徳上の力を與へて頂くことが能き無いでせうね」

此所まで讀んで來ると、公爵嬢マリイは溜息して、右に立つて居た姿鏡の方を見返つた。鏡は弱々しい形の好く無い姿と瘦た顔を映し返した。何時も陰気な眼は、今しも、鏡の裡の自分を殊に失望した表情で見つて居た。お諛辭だと、公爵嬢は思つた、そして、振り向いて讀み續けた。が、ジュリイはお諛辭を書いたのでは無かつた。公爵嬢の眼——大きい、深い、輝いた——(暖な光線が時に依りそれから流のやうに射出するやうに見えた)——は實際なかく美しかつた。顔全體の平凡であつたに拘はらず、眼だけは屢、唯の美人よりも、人を引付ける位であつた。公爵嬢は、自分の美しい表情を自分で見たことは無かつた、さういふ表情は公爵嬢が自分自身の事を思つて居無いた時に現はれたのだ。誰でも左様である通りに、公爵嬢も鏡に向ふが最期、顔は氣取つた不自然な醜い表情に爲るのであつた。

公爵嬢は讀み續けた——。

「莫斯科ぢう何處へ行つても戦争の話ばかりなの。私の二人の兄のうち一人は最早外征しました、もう一人は近衛に居て、やがて、國境へ進軍するといふんです。聖上陛下も彼得堡をお出になりました、世間の取沙汰では、戦争の危険に玉體をお曝しにならうといふのださうです。何うか神様の御意で、歐羅巴の平和を破壊しつゝあるコルシカの大妖怪が、全能の御恵で皇帝としてわれ々に與へられた天使の御手に依つて滅ぼされるやうにし度いものでは有りませんか。二人の兄のことは申しませんが、この戦争のお蔭で私の一番氣の合つた親愛な人を奪られて了まひましたのよ。愛國の熱心で唯だちつとしては居られ無く爲つて、大學を廢して軍隊に投じた若いニコラス・ロストオフのことなんですの。ねえ、親愛なマリイ、私貴女に白状するけども、ニコラスが、未だ彼様に若いのに、軍隊に入つて了まつたのは、私に取つては非常な悲哀なんですわ。この夏貴女にも噂したこの若い人は、今の世この頃のやうな二十歳で老翁さんになつて了まふ男たちの間では、眞個に珍らしい位氣高くつて若々しい人なんですの。取り分け、非常に率直で、情の深い所が結構なのよ。眞個に心の清い、詩的な人なもんで、私の交際は、ホンの少時だけでも、それが、最早これまでに随分苦しんで來た私の哀れな心の一番懐かしい憶記に爲つてる位なんですの。私何時か、訣別と、別れる時に話し合つたことなんぞを悉皆貴女にお話し爲ますわ。今は未だそれが餘り新し過ぎてお話しする氣に爲れ無いのよ。あゝ、親愛な友よ、貴女は、眞個に強く胸に徹へる左様いふ喜びも苦痛も經驗したこと無いのは幸運なんですよ。貴女は幸運よ、大抵苦痛の方が覺然強いんですからね。伯爵ニコラスは私に取つて友達より以上のものになるには未だ若過ぎることは私善く知つてる

んです、けども、この詩的な純潔な交際は私の心の要求を十分満足させたんですわ。まあ、この話はこれつ切りにしませう。莫斯科ちう何處へ行つてもそれで持ち切つて此頃の話の種は、老伯爵ベズウホフの亡つたことよ、その遺産のことなんです。思ひ懸け無いでせう、二人の公爵嬢は宛然何にも貰は無い位、公爵ヴァシイリ、これは眞個に何にも貰へずに、何も彼も悉皆モシウ・ピエールに遺されたんです、ピエールは尙その上に、正當の子息と認められたもんですから、彼の人は今は伯爵ベズウホフに爲つて、露西亞ちうで一番の物持になつて了まつたんですよ。噂では、公爵ヴァシイリはこの事件では大變面白く無い行動を爲したとかで、全然銷沈り切つて彼得堡へ引上げて了まひましたつて。

私なんぞ遺産だの遺言状だのつて其様な複雑なことは寸毫も解りは爲無いんですけれどね、面白いことには、私たちが唯のモシウ・ピエールとして知り來つた彼の若い人が伯爵ベズウホフと爲つて、露西亞ちうで一番大きい仲間に數へられるやうな富豪に爲つてからつてものは、妙齡の娘を背負てる母親連やさういふ娘たち自身その人——まづ餘り香しく無い人と云つて宜いだらうと私何時も思つて居たんですが——に對する聲の調子だの舉動なんぞは、俄然と變つて了つたんですよ。世間の人は面白づくにこの二年以來といふもの何處の人だか私の知りも爲無い人を私の夫に擬らへて居たんですが、今度は莫斯科の結婚評判記では、大抵私を伯爵夫人ベズウホフに爲て居るんですよ。けども、貴女は必然私にさうなる氣の無いことを認めてくださるでせうね。時に、結婚といへば、誰も伯爵さん——世話好きの——アンナ・ミハリーヴロナが、極く秘密だからとのお断り付で、貴女の爲めに企畫んで居るつて、内密で私に話してくださいなんです。先方は誰あらう公爵ヴァシイリの子息さんのアナトオルなの、何でも身持を直させる爲めに、金持で身分の高い人をお嫁に貰はうといふんで、親類ちうの札が貴女に落ちたといふんです。貴女

がこれを何うお考へなのか、それは私解ら無いけれども、前以て貴女に知らせとくのが義務だと私思ふんです。彼の人は、大變奇麗で、極く烈い身持の人ださうです。私の聞き出せたことは唯だそれだけの。けども、噂は最早これだけに爲ませう。最早これで二枚目の紙が書き切れる所なの、そして、母がアラキシンへ晚餐に行くんだからつて、呼びによこしてるのですもの。此方では今大評判の宗教書を送りますから読んでください。この書籍のなかには、人間の考想では其所まで達することは到底も能き無いことがなかく、多いんですけども、眞個に好い書籍には違ひ無く、讀めば心が落ちて高まるのです。左様なら、貴女のお父上に宜しく、マドモアゼル・ブリアンヌには呉々も宜しく。心から私貴女を抱擁してよ。——ジュリー。

それから——貴女のお兄さんと奇麗な可愛い奥さんのことを聞かせてください」

公爵嬢マリイヤは、夢見るやうに微笑みながら、少時考へて居た（輝いた眼に勢ひづけられた顔は、平常とは全然變はつて了まつて居た）。突と起つて、重い足音を爲せて、卓子へ行つた。紙を取り出した、そして、手が手ばしこくその上を動き始めた。公爵嬢は次のやうな返答を書いた——

「親愛な、非常な信友——十三日のお手紙は大變嬉れしく拜見しました。では、依然貴女は私を愛してくださるのね、詩人らしい心のジュリー。では、貴女がさう太く厭がる遠く離れて居るといふことも、貴女にはその常例の影響を及ぼさ無かつたのです。貴女は離れて居ることを歎いて居らつしやる——けども、ねえ、若し私もそれを歎くので有つたら、私のやうな自分の懐しい者は皆居無くなつて了まつた者は

何うすれば宜いのでせうね。あゝ、若し私が私を慰さめて呉れる宗教を持つて居無いのであつたら、人生は私に取つて何んなに悲しかつたでせう。彼の若い人に對する貴女の愛情の話を聞いて私が嚴づかしいことを云ふだらうと、何で貴女さう思つたんですか。さういふ事柄では、私は私自身に對しての外は、何方向つても酷しくは爲ませんわ。私他の人のさういふ心持は察せられますわ、で、私自身さういふ感情を持つたことが一度もありませんから、同情は能き無いかも知れませんが、決して非難は爲ませんのよ。唯だ、基督教の愛、われ／＼の隣人を愛すること、われ／＼の敵を愛することの方が、若い男の美しい眼の爲めに、貴女のやうな詩人的な優しい若い娘の胸の裡に起させられるさういふ感情より、もつと貴く、もつと快く、そして、もつと美しいと、私には思はれるだけです。

伯爵ベズウホフの亡くなつた報知は、貴女のお手紙より前に、私もへ参りました、そして、父に大變強い感動を與へました。前の「大世紀」の代表者は伯爵ベズウホフと外もう一人ある限りなのだから、今度は自分の番なのであらう、けども、自分は能きただけそれを遅く來させるやうに努めるのだから云つてますの。神様のお助で、左様な恐ろしい不幸の起り無いやうにと祈つて居ますのよ。ピエールは私小兒の時から知つてるので、彼の人に對する見方は貴女とは私少し違ひますわ。彼の人は非常に善い心を持つてるやうに私には何時も思はれたんです、それが私は人に於て最も尊ぶ長所なんです。遺産と、それに就ての公爵ヴァシイリの舉動のことは、孰方にとつても實に悲しいことではありませんか。あゝ、親愛な友よ、富める者の神の國に入よりは駱駝の針の孔を穿るは却て易しいと云ふ、われ／＼の神聖な救主のお言辭は恐ろしい眞實の言辭です、私は公爵ヴァシイリを憐れみ、ピエールの爲めには眞個に氣の毒に思ひますの。彼様な若い身で、非常な富の重荷を負せられたのですもの、何んなにか様々の誘惑に曝されるこ

となんでせう。私は私がこの世で一番願ふことはと尋ねば、それは、最も哀れな乞食よりも尙貧乏であることなんでせう。其地で大評判だと云つて送つてくだすつた書籍はホントに有り難うございます。貴女は、多くの善い物のなかに、われ／＼の弱い人間の理解力では解から無い物があると云つてくだすつたのですが、何うしても解から無い書籍を一生懸命に讀むのは何うも無益のやうに思はれますわ、解から無ければ何の利益も無い譯では有りませんの。自分たちの想像心を煽り立て、基督教の簡素とは全く反對な事を過大に爲る氣分を拵へさせて、唯だ疑惑ばかり起こさせるやうな異様な書籍で自分たちの頭腦を混雜させて了まふことを、何だつて、或る人々が彼様熱心に好くのだか、今まで何うしても解から無いで居ますのよ。私たちは師徒語録や、福音書を讀のが宜いんですよ。そんな裡にある神祕なことは無理に解かうと爲無い方が宜いんです、われ／＼のやうな哀れな罪ある者は、われ／＼と永遠の神様との間の超えることの能き無い幕に成るこの肉の殻を着て居ながら、神様の恐ろしい、そして、神聖な祕密に參しやうなんぞと、何うして厚顔しく出しや張れるものですかね。私たちは、われ／＼の神聖な救主がこの世の中でわれ／＼の行爲の案内としてわれ／＼に遣してくだすつた種々な崇高い法則を學ぶだけに止めて置く方が宜いんです、私たちは、さういふ法則に従ひそれを守るやうに努めやうぢやありませんか、私どもは、われわれの弱い人間の智慧を頼みに爲無ければ爲無いほど、神様から出無い有ゆる知識をお排せけなさる神様の御意には一層協ふといふこと、神様がわれ／＼に知らせまいとお隠しなさる積りの物を、無理に知らうとするやうなことを爲無ければ爲無いほど、神様はさういふ物を一層早くご自分の神聖な靈に依つてわれわれに現はし示めしてくださることを、固く信じるやうに爲やうぢやありませんか。父は未だ縁談を云ひ込んだ人のことは私には話しませんの、唯だ手紙が來たといふこと、公爵ヴァシイ

リが逢ひに来る筈だといふことを、私に話した限りなんです。私の縁談に就ては、私は、親愛な非常な信友の貴女に、私は、結婚つてものは、われ／＼が従は無ければならぬ神聖な制度だと思つてゐることを云つて置きます。何れほどそれが私に取つて苦しくとも、若し全能の御神が妻となり母となる義務を私に負はせ給ふことになつたら、夫として神様が私にお與へなさる人その人に對する私の感情を自分で調べて心配するやうなこと無しに、私の力で能き限り忠實に私の義務を盡すやうに骨折りませう。

私は、家内と一緒に荒涼丘へ來ることを云つた兄からの手紙を受け取りました。これはホンの短い間の嬉しさです、兄は、何の理由でだか、又何うしてだかわれ／＼が引き込まれた、この不幸な戦争に出る爲めに直に去つて了まふんですもの。戦争の外何の話も爲無いのは、用務と交際の忙がしい貴女がたの方ばかりでは有りません、此所でも、都會の人々が田舎は大抵左様だと想像する田舎らしい労働や自然の物寂かさのなかで、尙且戦争の風説が傷ましく聞かれ、そして、傷ましく感じられてゐるのです。父は、前進とか背進とか、そんな様な私なんぞには寸毫も解ら無いことばかりを云つて居ますの、そして、一昨日のこと、私何時ものやうに村の街路を散歩してまして、胸も張り裂けるやうな事を見たんですの……。それは、この邊の地方で募られて、軍隊に送られる徵募兵の出發でしたんです。出て行く人々の母親や、家妻や、小兒たちの態を貴女に見せ度かつたわ。雙方で歎けける聲を聞せ度かつたわ。哀れたつて、悲しいたつてお話には到底なりませんの。人間が、愛と罪を宥すことゝをお説きなすつた神聖な救主の律法を全然忘れて了まつた、お互ひに殺し合ふ術が非常に尊いものだといふことに爲て了まつたかのやうですのね。

左様なら、親愛な善い友よ、われ／＼の神聖な救主と、その最も神聖なる母の恩寵と強い保護が貴女の上に常に在らんことを。——マリイ——

「あら、貴女も手紙をお出しなさる所なの、公爵嬢、私も自分のを最早書いて了まつたのよ。私のは母親に遣るんです」と、Rを轉がして發音して、マドモアゼル・ブウリアンヌが、その心持の好い汁氣の多い速語に云つた。顔全體を微笑に爲て、入つて來たその女は、公爵嬢マリイアの深い、沈鬱な、薄暗い雰圍氣のなかへ、陽氣な氣輕さと自足の他の世界を齎らした。公爵嬢、氣をお付けなさいよ」と、聲を低くして、云ひ足して「公爵が云ひ合ひをなすつたの」と、Rをへんに轉がして發音し、自分の聲に聞惚て居るやうな態で、云つた。「ミハイール・イヴァーノフと云ひ合ひをなすつたの。今甚くご機嫌を損じてるのよ、甚く氣むづかしくなつてるの、用心なさいよ、ねえ」

「もし、貴女」と、公爵嬢マリイアは答へて「私、何様なご機嫌で父上様がいらつしやるか前以つて知らせてくださいと、貴女に頼んだ覚えは有りませんことよ。私苟且にも父上様のことを陰で彼此云ひなんぞ爲無いです、そして、誰も其様なことなんぞ云つて頂き度く有りません」

公爵嬢は自分の時計を一寸と見た、そして、翼、琴の稽古を爲るのに極まつて居た何時もの時間に最早五分後れて居ることを見て、不安な顔に爲つて喫煙室へ行つた。一日を割り付けた規則に依つて、公爵は十二時から二時まで晝寢し、その間に、若い公爵嬢は翼、琴の稽古を爲るのであつた。

(二十四)

白髪侍僕が、大書齋での公爵の駢聲をう／＼と聞きながら、客室で坐わつて居た。家のズツと離れた方から、閉めた戸越しに、デュセックのソナタの難づかしい歌節を二十度も繰返へす音が聞えて來た。

その時、馬車と小荷馬車が昇降段へ乗り付けて来た、そして、公爵アンドレーエが馬車から降り、小さい妻を扶け降ろし、自分の先きへ立たせて家の方へ行かした。髪を冠ぶつた白髪のティフォンが、客室の戸口へヒョイと現れて来て、公爵は今晝寝中だと、囁語で知らせ、そして、急いで戸を閉めた。ティフォンは何様な非常な事件でも、縦し實の子息の歸着でも、日々例を破ぶることは許されまいと思つたのだ。公爵アンドレーエも勿論ティフォン同様その事實を善く知つて居た。公爵は、暫時逢は無かつたうちに父親の習慣が變はつたか何うか確かめやうとするとでも云ひさうに、懐時計を見た、そして、それが變はつて居無ことを確かめて、妻に振り向いた。

「最早二十分経つと起なさる。マリイの所へ行かう」と、彼は云つた。

小さい公爵夫人は此頃肥つた、が、微笑と極く薄い口鬚とを持つた短い上唇は、物を云ふ度毎に、尙且陽氣らしく可愛げに上がるのであつた。

「まあ、宛然宮殿ね、世間の人が舞踏會で亭主に挨拶をすると丁度同なじ表情で四邊を見廻はして、夫に斯う云つた。『おいでなさい、さ、早くよ、早くよ』。周囲を見廻はしながら、ティフォンに向いて笑み、夫に向いて笑み、裡へ案内して居た従僕に向いて笑んだ。

「マリイが稽古してるんですね。そおつと行きませうよ、不意に驚かすのよ」。公爵アンドレーエは丁寧な、氣の無い表情で隨いて行つた。

「お前少しフケたね、ティフォン」と、手に接吻して居る老人に、云つた。

二人が翼琴の音が出て来る部屋へまで行か無いうちに、可愛らしい、赤つ毛の佛蘭西女が横戸から出て来た。マドモアゼル・プウリアンヌは嬉しくて堪まらなさうであつた。

「あら、公爵嬢が何様にお喜びでせう」と、勢込んで云つた。『到頭でした。申して来ませう』

「いゝえ、いゝえ、何卒、いけ無いのよ……」と、小さい公爵夫人は云つて、先方に接吻した。『貴女マドモアゼル・プウリアンヌね、家の義妹の仲好の方だといふんで、最早ズツと前から貴女のこととは知つてたんですよ。彼の女は私たちが今日歸るとは思つて無いんですよ』

それから、同じ歌節を繰り返し繰り返し爲て居る音が聞えて来る喫煙室の戸へ行つた。公爵アンドレーエは、不愉快な何物かを豫期するとも云ひさうに、顔を擧めてハタと立ち止まつた。

小さい公爵夫人は入つて行つた。歌曲は真中で断れた、驚いた聲、公爵嬢マリイの重い足音、そして、接吻の音を公爵は聞いた。公爵が入つて行くと、公爵の婚禮の時に一度少時顔を合はせた切りの二人の婦人は、互に抱き合つて、さも懐かしさうに、互に唇の觸はり次第其所へ、唇を押し付けて居る所であつた。

マドモアゼル・プウリアンヌは、両手を胸へ押し付けて、二人の側に立つて居た、その恭やしい笑顔は笑ひ出しさうでもあり、泣き出しさうでもあつた。公爵アンドレーエは、肩を揺すつた、そして、音樂の好きな人が調子外を聞く時のやうに、顔を擧めた。二人の婦人は離れたが、再、互に後れては大變だと思ふかのやうに、大急ぎで抱き合ひだし、互に手に接吻し合ひ、引張り合ひ、それから、再顔に接吻し合ひだした。公爵

アンドレーエの非常に驚いたことには、二人は不意に泣きだして、再更に接吻を行ひだした。マドモアゼル・プウリアンヌも泣いた。公爵アンドレーエは、何う見ても、不安の態様であつたが、二人の女には自分たちが泣くのは全く當然のこと、思はれたのだ、二人が顔を合はせて涙を出さずに居られやうなどは、二人とも夢にも思は無かつたらしく見えた。

「あら、貴女」……「あら、マリイ」……二人の婦人は雙方同時に話したり、笑つたりした。『私昨夜』

夢に見たの。では、貴女今日だとは思つて無かつたの。あら、マリイ、貴女瘦せたことねえ」

「けども、貴女健康さうにおなりですわ……」

「公爵夫人だと直ぐに判りましたの」と、マドモアゼル・アウリアヌスが口を挟まれた。

「私夢にも思は無かつたの」……公爵嬢マリイヤが叫んだ。「あら、アンドレーエ、私寸毫も気が付か無かつたわ」

公爵アンドレーエ兄妹は互に手に接吻した、公爵は妹に、昔時のやうに依然泣き蟲だなど云つた。公爵嬢マリイヤは兄に振り向いた、そして、涙の間から、その時美しく爲つた大きい涼しい眼で、優しい懐かしさうな風で、公爵アンドレーエの顔を見詰めた。小さい公爵夫人は間斷無しに話した。柔毛のある短い上唇が、必要次第、桃色の下唇に合ふ爲めに絶えず飛び下り、そして、又、キラ／＼する歯と眼の微笑に伴れて、別れた、小さい公爵夫人は、スパアスカヤ山で起こつた、既でのご自分の今の身體には大變な事になりさうであつた危険かつたことを詳しく話した。それから、直ぐ、彼得堡に衣服を悉皆置いて来て了まつたので、此所では何を着て居たものだらうか當惑して居るといふことや、アンドレーエは前とは全然變つて了まつたことや、キティ・オディーンツワアが或る老人に縁付いたことや、公爵嬢マリイヤに對し立派な候補者が、出て来て居るのだが、その話は後で爲やうといふことなどを話した。公爵嬢マリイヤは尙且黙つて兄を見詰て居た。眼は、愛情と鬱憂に満ちて居た。明白に、その考想は、兄嫁の饒舌とは全く掛け離れた自分の方の道をたどつて居たのだ。公爵夫人が彼得堡での最後の夜會の談話を爲て居る最中に、マリイヤは兄に話し掛けた。

「で、戦争にお出なさることは最早全く極つてゐるんですか」と、云つて、溜息した。リザも溜息した。

「左様だよ、而も、明日だ」と、兄は答へた。

「私を捨てつちまうの、何故だか分から無いわ、昇任するといふと……」。公爵嬢マリイヤは、終局まで聞か無かつた、で、自分の方の考想の道を追つて、兄嫁に振り向いて、優しい眼を相手の腰に着けた。

「眞實なの？」と、云つた。

兄嫁の顔は變つた。溜息した。

「え、眞實よ」と、云つた。「あ、恐いことつたら……」

リザの唇が垂れ下がつた。義妹の顔の傍へ自分の顔を持つて行つて、そして、再不意に泣きだした。

「馳ませ無きやア不可」と、公爵アンドレーエは顔を擧めて、云つた。「何うだい、リザ？。お前の部室へ伴れてつてお呉れ、私は父上様の所へ行つて来るから。何うだね、彼方は——先の通りかい」

「同なじよ、先の通りなの、貴下は何うお思ひなさるか知れ無いけれども」と、公爵嬢マリイヤが嬉しさうに云つた。

「同なじ時間、庭の散歩、旋盤もか」と、尋いた公爵アンドレーエは、極く／＼微弱な微笑で、父親に對して十分な愛情と尊敬は持ちながら、その持ち前の癖は可笑しがつて居ることを見せた。

「同なじ時間、そして、旋盤、數學も、それから、私の幾何のお稽古」と、さういふ稽古が自分の生涯の一番面白いことの一つでもあつたかのやうに、公爵嬢マリイヤは、如何にも快活に答へた。

二十分経つて、老公爵が起きる時間が来ると、ティフォンが呼びに来た。老人は、子息の歸着を祝つて、常例の規定を破ぶつた。食事前に、自分が着換を爲て居る所へ入つて来るやうにと云つた。老人は、土耳其古下衣を着、装粉を使ふ、昔風の服裝を爲るのであつた。で、公爵アンドレーエが——他家の客室へ入つて行く

時のやうな他人を侮蔑するやうな顔や舉動では無く、ピエールと話した時のやうな熱心な顔で——父親の部屋へ入つて行くと、老紳士は、化粧部屋で、被蓋布の掛つた廣いモロツコ皮の椅子に坐つて、ティフォンの手に頭を委せて居た。

「やア、勇士。では、いよ／＼ボナバルトと戦ふ積かの」と、ティフォンの手にある編んだ豚尾が許るす限り、装粉を付けた頭を振つて、云つた。

「奴にやア飽くまで用心せえ、右も左も、さうで無いと、奴直きにわれ／＼を臣下の列に加へ居るわい。や、變りは無いかの」

で、子息に自分の頬部をさしたした。

老紳士は、食前の晝寝の後で、非常な好い機嫌であつた。(正餐後の睡眠は銀で、正餐前のは金だと云つて居たのだ)。濃い蓋被さつた肩の下から、子息を横眼で嬉しさにジロ／＼見た。公爵アンドレエーは行つて、父親が指した場所に接吻した。彼は父親の得意の問題——當時の軍人、殊に、ボナバルトに、就いての冷嘲には——何とも返答し無かつた。

「え、父上様、妊娠の家内を伴つて参りましたんで、公爵アンドレエーは、熱心な恭やしい眼付で父親の顔の有らゆる動きを見まもりながら、斯う云つた。「お身體は如何です」

「痴者か放蕩兒かで無くば病身では無い、私はお前の知つての通りだ、朝から夜まで働き續けの上に、まだ攝生して居る、で、勿論健康だ」

「神のお蔭で、眞に結構です」と、子息は微笑んだ。

「神は餘り關係は無いわ。さア、何うだね」と、老人は言葉を繼いで、何時もお箱の問題に立ち戻つて、

「確か戦略とか云つたね——ボナバルトと戦ふ獨逸仕込みの科學的方法といふのを聞かせ無いかい」
公爵アンドレエーは微笑んだ。

「まア一息繼がしてください、父上様、父親の辭が父親に對する自分の尊敬と愛情を少しも減らさ無いことを見せる笑顔で、斯う云つた。「ねえ、ホンの今しがた歸り着いた儘なんです」

「痴愚な事、痴愚な事」と、緊然組んであるか何うか豚尾を振つて試めし、それから、子息の手を取つて、老人は云つた。「嫁の部屋は準備して置いた。マリイが引受けて、いろ／＼な物を見せ、大籠に三杯振り位話し合ふだらう。女といふものは左様なものだ。嫁が来たのは私は嬉しい。さ、坐つて話さない。ミイヘルソンの軍、これは解かつた、トルストイのもの……同時の進軍だ……だが、南方軍は何う爲て居るのかね。普魯西亞。その中立……それも皆知つて居る。塊地利は何うかね、斯う云つて、椅子から起つて、部屋のうちを歩きだしたので、ティフォンは、その後から駆けるやうにして、服装のいろ／＼な品を渡した。瑞典は何うだね何ういふ案配にボメラニアを通るかね」

公爵アンドレエーは、父親の間の急激なを見て、今始まらうとする戦役の軍略を説明しだした、最初のうちこそ氣乗の爲無い態であつたれ、進むに従つてだん／＼興が加はつて、そして、我知らず、何時もの通りに、露西亞語から佛蘭西語になつて了まつた。彼は、九萬の軍隊が、普魯西亞を脅迫し、中立を擲うたせて戦闘に加はらせやうと爲て居ることや、その軍隊の一部がスツラアルスンドで瑞典軍と聯絡する筈のことや、二十二萬の塊地利軍が、伊太利とライン沿岸とで、十萬の露西亞軍と協働しやうと爲て居ることや、五萬の露西亞軍と五千の英吉利軍がネエブルスで合同する筈のことや、即ち、總計五十萬の軍隊が各方面から同時に佛蘭西人を攻撃する筈であることを話した。老公爵は、子息の談話を少しも氣に留めて居る態では

無かつた。歩き廻りながら、少しも聞て居無いらしい態様で、衣服を着て居て、而も不意に子息の談話の腰を折つたことが三度あつた。一度は子息の談話を止めて、そして、叫んだ「白いの、白いのだ」

これは、ティフォンが、自分の望み通りの直衣を渡さ無かつたのを云つたのだ。もう一度は、ピタリと止まつて、尋いた、「で、直きに産褥に入るかね」が、困まつたものだと言ふ態に頭を振つて、「や、そりやア不可先を、先を」

三度目は、公爵アンドレーエが最早ア説明を終はらうといふ所であつた。老人は、老年の假聲で、佛蘭西語の鼻歌を諷つた、――

「マルブルウが戦争に出る。何時歸ることやら」
子息は唯だ微笑んだ。

「この戦略は私も賛成だといふのではありません。唯だ今の實際の状態をお話したけなんです。ナポレオンは今頃は最早われれくに劣らん策を建て、居りませう」

「うん、お前の談話も別に變つたことは無いな」で、老人は考へ込んだ態で、速語に獨語のやうに、繰り返した、「何時歸ることやら――さ、食堂へおいで」

(二十五)

装粉を掛け、顔を剃つた公爵は、判行で押したやうに極つて居る何時もの時間に、嫁と、公爵嬢マリイヤと、マドモアゼル・アウリアンヌと、抱への建築技師が待ち受けて居た食堂へ入つて行つた。技師は社會上の位置から云へば極く低い身分なので、さういふ待遇は常例ならば受られる筈のものでは無いのだが、老紳

士の風變りの氣まぐれから、同じ卓子で食事を許るさることになつて居たのだ。常は階級の區別は嚴かましくつて、なか／＼地方官などは何んな重い位地の者でも、滅多には自分の食卓には就かせ無かつた公爵が、何うしたことだか、フイト、人間は平等だといふ理論を説明する爲めに、隅で市松模様の手巾で鼻をかむ建築技師ミハイール・イヴァーノヴィチを生捕つた、そして、度々、ミハイール・イヴァーノヴィチも自分たちと寸毫も變はら無い人間なんだと、娘に云つて聞かした。食卓では、公爵は、主に無口な建築技師に談話を向けた。

この家の他の部屋々と同なじやうな、非常に天井の高い食堂では、公爵の入つて來るのが、家内一同と、椅子の背毎に立つて居る従僕たちに依つて待ち受けられた。腕に食卓手拭を掛けた給仕長は、食卓具合をズツと見渡して、従僕に合圖を爲、そして、絶えず心配さうに、壁の時計から、公爵が入つて來べき戸へと、一寸々々眼を移して居た。公爵アンドレーエは、壁に懸つた今まで見無かつた圖抜た大きい金縁の額を見詰めた。それには、樹で示めしたボルコンスキイ家の系圖が入つて居た、そして、それと向き合つて、又一つ懸つて居る同なじやうに圖抜けて大きい額は、(確に抱への畫師の筆らしい)ルウリックの後裔でボルコンスキイ家の始祖の積りの、王冠を頂いた王の拙い肖像であつた、公爵アンドレーエは、この系圖を見て、頭を振つた、そして、好く似たボンチを見た人のやうに、笑つた。

「何處までも父上式だね」と、側へ來た公爵嬢マリイヤに云つた。

公爵嬢マリイヤは、吃驚して兄を見た。マリイヤは何を兄が笑つて居るのか解ら無かつた。父親が爲ることとは何事でも、批評を許さぬやうに尊く思つて居たのであつた。

「誰だつて弱點はあるものだね」と、公爵アンドレーエは言葉を繼いで、「あの大きい智力でありながら、

此様な瑣然した下らんことを行なうなんて」
 公爵嬢マリイヤは、兄の思ひ切つた批評は感心能き無かつたので、抗辯しやうと爲た、が、その途端に、衆皆が待ち設けて居た足音が書齋の方から聞えて來だした。公爵は、宛然、家内の規定の動きの取れぬやうに嚴重なのに、故意、自分の立居の敏捷いことを對照させて居るかのやうに、何時もの通り、速い軽々とした歩調で入つて來た。その途端に、大時計が二時を打つた、そして、客室のも一つの時計が少し細い音でそれを反響した。公爵は止まつた、濃い被蓋さつた眉の下でギラ／＼する鋭い氣むづかしさうな眼が、一座をズツと見渡して、小さい公爵夫人の上に止まつた。小さい公爵夫人は、直ぐ、宮中官たちが皇帝の出御と見て覺えるやうな感を覺えた、この老人の周囲の人は誰でもさういふ畏怖と尊敬の念をこの老人に對しては覺えさせられるのだ。公爵は小さい公爵夫人の頭を撫でた、それから、プキッテウな手付で、其の頭を叩いた。

「善く、善く來てくださつたな」斯う云つて、公爵夫人の眼を凝乎と見て、歩いて行つて、自分の席へ坐つた。「坐りなさい、坐りなさい、ミハイイル・イヴァーノヴィチ、坐りなさい」

彼は、自分の次の席を嫁に指した。従僕が公爵夫人の爲めに、椅子を引き出した。

「ほ、ほう」と、老人は嫁の圓くなつた體姿を見て、云つた。「最早やがてだな、氣の毒な」乾いた冷たい心持の悪い聲で笑つた、老人は、何時も、眼では無く、唯だ唇だけで笑ふのであつた。「運動せにやアいかん、能きただけ運動せねば、能きただけ」斯う云つた。

小さい公爵夫人は、その言辭を聞か無かつたし、又聞く氣も無かつた。唯だ默然で、オド／＼しながら、坐つて居た。公爵は夫人の父親のことを尋ねた、そして、夫人は話しだし、微笑みだした。公爵は自分たち

の知人のことを尋ねた、公爵夫人は、だん／＼勢付いて、だん／＼話しだして、いろ／＼な人からの傳言を公爵に傳へ、市の世間話を取り次いだ。

「伯爵夫人アブラクシンは氣の毒ですよ、御主人に亡くなられちまつて、彼の方は宛然眼を泣き潰す位でしたよ、可愛いさうに」と、だん／＼調子付いて來た。

公爵夫人が調子付くに隨がつて、公爵はだん／＼氣むづかしさうに公爵夫人を見て居たが、不意に、最早十分相手の腹を見抜き、その氣質を測り知つたから最早用は無くなつたとも云ふかのやうに、横を向いて、ミハイイル・イヴァーノヴィチに聲を掛けた。

「おい、ミハイイル・イヴァーノヴィチ、ボナバルトの奴さん大閉口だらうぜ。公爵アンドレーエが（自分の息子を何時も斯う呼んだのだ）濠い軍隊が彼に對して集められたことを話して呉れたのだ。貴下と私とは、何時もズブ下らん人間のやうに奴のことを話して居つたのだになア」

ミハイイル・イヴァーノヴィチは、何時「貴下と私」がボナバルトに就て左様なやうなことを云つたのか、全然推量し兼ねた、が、公爵がお得意の問題を持ち出す爲めに自分はダシに使はれたのだと氣取つたので、それから何うなるのだらうと、不思議さうに若公爵の方を見て居た。

「彼男はなかく、戦略家だよ」と、公爵は息子に、建築技師を指した、そして、談話が、戦争、ボナバルト、それから、當時の將軍たち、政治界の人物の上に移つた。老公爵は、當時の公人は何れも此れも残らず、軍事上及び政治上の事柄の A、B、C をも全然心得て居無い唯の赤兒なのだと見くびつて居るらしかつた、それに、彼の考想では、ボナバルトは實際は下らぬ人間なのだ、唯だ彼に對するボティヨームブケンやスヴォートロフが一人も居無いので、成功したに過ぎぬといふのであつた。彼は、歐羅巴には國際間の葛藤が在